

臨床教育学と地域研究

—上ノ国調査の中間総括と聴きとりの記録—

Community-Based Approach to Clinical Study of Education

田中 孝彦

Takahiko TANAKA

はじめに—本稿の目的

1、調査にいたるまで

- (1) 檜山への関心
- (2) 上ノ国との出会い
- (3) 臨床教育学の構想

2、上ノ国という地域

- (1) 上ノ国に関する学習
- (2) 地域の概観
- (3) 教育長の「自分史」

3、子どもの「人生イメージ」調査

- (1) 子どもの「人生イメージ」への着目
- (2) 聴きとり調査の実際
- (3) ある高校生の語りの記録
- (4) 青年の人生観・幸福観の基調—聴きとりを終えて

4、「発達援助者」調査

- (1) 「援助者」調査へ
- (2) 調査結果の概要
- (3) ある住民の語りの記録
- (4) 共同の精神とその系譜—聴きとりを終えて

5、学校づくりの試み

- (1) 聴きとりとテキスト化
- (2) 地域と子どもの状況
- (3) 生活史・実践史をふりかえる
- (4) 新しい課題
- (5) 学校づくりの思想—聴きとりを終えて

6、教師像の模索

- (1) 聴きとりとテキスト化
- (2) 地域と子どもの状況
- (3) 生活史・実践史をふりかえる
- (4) 新しい課題
- (5) 地域に生きる教師像—聴きとりを終えて

おわりに—臨床教育学への地域的接近

はじめに一本稿の目的

私は、1995年度より、北海道大学の教育学部の教育臨床心理学講座のスタッフの一員として、臨床教育学の研究・教育の開拓を試みることになった。そして、そのための基礎的な作業の一つとして、1990年代の末より、北海道の檜山の上ノ国町において、関心を共有する研究仲間や学生・大学院生たちとともに、子ども・青年の「人生イメージ」の聴きとり、父母・住民、保育者、教職員、行政担当者たちの地域観・子ども観・教育観などの聴きとりを中心とする地域調査に取り組んできた。この上ノ国調査は、今後も、問題関心を発展させ、調査方法を改善し、分析概念を明確化しながら、継続的に進めていくつもりである。

この調査に関連して、2004年度には、新しい動きがあった。その一つは、5月21日に、上ノ国町教育委員会が、この調査を素材とし、住民、援助者、教職員、町職員らによる、「子ども理解」と「地域教育計画」を考えるシンポジウムを開催したことである。第二は、8月2日～3日に、上ノ国町の隣の厚沢部町において、上ノ国町・厚沢部町の若手教師たちが中心となって、「教師のための総合学習セミナー」を開催したことである。ここで、私は、この間の上ノ国調査を踏まえて、上ノ国の教師と教育実践の課題について語ることを求められた。第三は、8月27日、北海学園大学で開かれた日本教育学会第63回大会のラウンドテーブルでこの調査が報告され、「現代の子どもの『人生イメージ』と地域教育計画」をテーマに、30名ほどの参加者によって検討が行なわれたことである。第四は、「臨床教育学の展開と教師教育の改革」を主題とする科研費共同研究のチーム（私もその一員であるが）が、9月に、地域に根ざした（community-based）臨床教育学の展開の動きとして上ノ国に注目し、調査に入ったことである。

こうして、私たちが始めた上ノ国調査は、地元の人々や教師たちによる子ども理解と地域教育計画づくりの実践的動き、日本の子ども研究や教師教育の改革や教育学の革新などの理論的検討の動きとつながりつつあると言ってよい。

ところで、私自身は、2003年度より都留文科大学に移り、新設された大学院臨床教育実践学専攻で、臨床教育学の開拓を継続すると共に、それを教師の養成・再教育とつなげる試みを始めている。2005年度からは、初等教育学科の臨床教育学コースが発足し、学部段階からの臨床教育学の教育の模索も始まる予定である。そうした動きのなかで、私は、子ども理解の深化と臨床教育学の構築と教師教育の改革のための基礎的作業の一つとして、都留の地域においても上ノ国調査と同様の調査を新たに始めたいと考え、その準備を始めているところである。

以上のような事情から、今、私は、i) これまでの上ノ国調査の経緯の大筋を中間的に総括しておくこと、ii) 共有されてきた聴きとり記録のいくつかを読みやすいかたちでテキスト化しておくこと、iii) 調査を通じて浮上してきた理論的な問題・概念や方法論上の問題を整理しておくこと、などの必要を感じている。

本稿は、上記のうち主にi)、ii)の課題を果たそうとするものである。その目的からして、本稿においては、聴きとりの記録の紹介が多くの部分を占めることを、あらかじめお断りしておく。なお、iii)については、近刊予定の『臨床教育学と教師教育・研究集録

Ⅱ』(科研費共同研究)とその中の拙稿を参照されたい。

1、調査にいたるまで

最初に、私が上ノ国調査に取り組むにいたった経緯を簡単に説明しておきたい。

(1) 檜山への関心

北海道の檜山で生まれ、檜山の教師として働き続け、現在は上ノ国町の教育委員会の仕事をしている小林勝行が、檜山について記した文章がある。まず、その一節を紹介しよう。

「北海道の南端、渡島半島の日本海沿いに檜山地域十ヶ町…が散在する。すべて農・漁業を基幹とする十町は、過疎が進行する寒村である。…その昔、檜山地方は北海道文化の発祥の地であり、…とくに…江差地域は、江戸中期からニシンの漁で繁栄し、『江差の五月は江戸にもない』と称された。…檜山の年寄りの中には今なお、札幌・旭川方面を『奥地』と呼ぶ名残を留めている。私たちは、この檜山を『先発後進地域』と称しているが、この呼び名には、檜山人教師たちの檜山に対する郷愁と愛着と哀感が込められているのである。

…1960年代からの高度経済成長政策は、檜山にも吹き荒れ、地域・生活の構造破壊が一気に進行するものとなった。そして、それに伴う地域共同体の崩壊は、地域における子育ての連帯と教育力を著しく低下させた。…

ところで、『先発後進地域』と称される片田舎の檜山の地で、誰もが驚愕せずにはいられない、一つの教育集会が取り組まれている。一千人以上の母親たちが参加して開催されている『檜山・母と女教師の集い』がそれである。…総人口七万人に満たない檜山の地域で、千人を集める集会はまさに前代未聞であり、どんな盛大な演説会も娯楽興行も檜山にあっては例がない。

…この集会は、…教育・子育て一色で構成され、相互の胸の奥にある子どもへの思いを本音で語り、子どもたちの成長と発達への激励と援助の手だてを求め合う態様となっている。」¹

これは、15年も前に書かれたものであるが、今なお、檜山という地域の歴史的・社会的・文化的な位置とそこに住む住民や教師たちの生活意識・生活感情を集約的に描き伝えているように思われる。

小林が記しているように、檜山という地域は、長年にわたる第一次産業の切り捨て政策の下で、過疎化が進行し、地域として存続し続けることができるかどうかという厳しい困難に直面している。しかし、なお自らの生活の場に愛着を覚え、子どもたちの生存と成長を支える新たな共同をぎりぎり模索している住民たちが、そしてその子どもと住民を支えて働いている教師たちや援助者たちや行政担当者たちが存在する地域でもある。

私は、1980年代の後半に、この小林の文章を目にしたことを一つのきっかけとして、檜山に関心を持つようになり、檜山の教師たちと交流するようになった。

¹ 地域民主教育全国交流研究会準備会編『現代と教育』12号、1989年10月、桐書房

(2) 上ノ国との出会い

冒頭に述べたように、1995年、私は、北海道大学の教育学部に新しく設けられた教育臨床心理学講座（1993年度開設）で働くことになった。そして、98年の秋に、その北大教育学部の公開講座が上ノ国町で開かれ、それを通じて上野秀勝教育長をはじめとする町教育委員会の人々と知り合うことができた。その頃から、檜山の中でもとくに上ノ国町を訪れ、子ども・青年、父母・住民、発達援助者、教職員、行政担当者らに会って話を聞く機会をしばしば持つようになっていった。

さらに、1999年秋に、「北海道の教育改革を共に考える会」²が、地域からの自発的な教育改革のとりくみの一つとして、上ノ国の住民と教職員と教育行政担当者の動きに注目し、上ノ国を訪問し関係者のインタビューを行った。これには、私を含め北大教育学部の教育臨床心理学研究グループの教員と学生の数名も参加した。³

私は、2000年3月の同会の総会において、この訪問・インタビューを通して得た印象を、次のように報告している。⁴

i) 上ノ国の地域には、農業・漁業など第一次産業を切り捨てる政策の長年にわたる推進の結果と、長く続く「構造的不況」の影響がはっきりと現れており、住民の生活と子どもの成長をめぐる不安定な状況には深刻なものがある。たとえば、父親が長期の「出稼ぎ」に出ざるをえない家族が多数存在するという事実や、若者がこの地域で生きていくことを望んでも働き場所が極めて少ないといった事態が、この地域の不安定さや住民生活の厳しさを端的に示していた。

ii) しかし、この地域では、「教育フォーラム」（前掲の小林の文章にある「母と女教師の会」が発展したもの）にみられるように、子育て・教育についての共同関係を創り出そうとする住民の努力、「ふるさと学習」を軸に子どもたちの「生きる力」を育てようとする学校の教職員たちの努力、それら支える教育行政の関係者たちの努力が展開されていた。それらは、子どもや住民や教職員たちの内面に、ある程度の「安心」「落ち着き」を生み出しているように思われた。

iii) 今回の訪問では、直接子どもたちから話を聞くことは出来なかった。しかし、こうした地域のなかで育っている子どもたちの生活感情・人生選択意識には、「不安」と「安心」が交錯する複雑なものがあることが、住民や教職員たちの話から伝わってきた。この地域の子どもたちは、年少の頃には無邪気に都会に出て行く人生を夢見ているが、進路選択が現実の問題となり、現代の社会の苛烈さ・酷薄さがある程度わかる思春期・青年期になると、出来ればこの地域で生きていきたいと考えるようになる傾向があることがうかがわれた。

この訪問・インタビューを通じて、私は、上ノ国の子どもたちの声を直接聴いてみたい、彼らの「安心」と「不安」が複雑に交錯する生活感情・人生選択意識の内実を、不安定さを増す現代の日本の全体社会の動向と、この地域の住民たちの生活と子育ての新しい共同

² 「北海道の教育改革を共に考える会」は、1997年に、住民・教職員・研究者らによって、個人参加の団体として結成され、研究会・シンポジウムの開催、調査の実施、ニュースやブックレットの発行など、現在もその活動を続けている。

³ この訪問・インタビューの概要は、「北海道の教育改革を共に考える会」のニュースの第四号（2001年12月）にまとめられている。

⁴ 「北海道の教育改革を共に考える会」第三回総会資料、2000年3月

を探る努力との関連で、出来るだけリアルにとらえてみたい、そこからこの地域の住民の自発的な努力の意味と今後の課題を考えてみたいと思うようになった。そして、上ノ国で問題と課題を深く探ることが、日本全体の子どもについての理解を深め、子どもの生存・成長を支える共同を広げ、教育改革の課題を考えるための、一つの重要な作業になるのではないかと考えるようになったのである。

(3) 臨床教育学の構想

他方、先に述べたように、私は、1995年に、北海道大学教育学部に新設された教育臨床心理学講座のスタッフの一員となった。新しい教育臨床心理学講座の大きな特徴の一つは、相談室をもち相談活動を行いながら、生存・成長の過程で困難や問題に直面している子どもたちの相談事例にもとづいて、研究・教育を進めようとするところにあった。

そして、この講座では、研究・教育の重要な場として、97年度から、月一回のペースで、ケースカンファレンスが開かれるようになった。そこでは、問題や困難を抱えて相談に訪れる子どもやその親・家族の姿と、それへの相談者の判断と対応が詳細に報告され、それをめぐる論議が重ねられた。私もそれに参加したが、このケースカンファレンスが、私にとっては極めて刺激的であった。

毎回のカンファレンスでは、相談室を訪れる子どもたちが抱えている困難の重さを感じさせられたが、同時に、問題を抱えながらも生きている子どもたちの「生きる力」の強さに驚かされることがしばしばであった。そして、相談に訪れる子どもたちの姿を、ただ「病理」として見るだけでなく、困難を抱えながらも生きようとしている生活・成長の主体・当事者として、全体的にとらえる必要があるということ具体的を知らされた。

また、カンファレンスで、子どもや親に対する相談者の見立てと対応の報告にふれて、相談室における心理臨床的援助の実践を貫く作法・常識を、その生きた姿において具体的に知ることができた。それを通じて、困難に直面し、心身の不安定を抱える子どもたちや親たちが、相談室という「非日常」的な空間において、安全とプライバシーを守られながら、徹底して聞きとられる経験を持つことの意味、つまり相談室臨床の固有の意味を理解できるようになった。

しかし、教育学の側から臨床的実践・研究の世界に接近してきた私にとっては、相談室における心理臨床的実践の視野が、ともすればクライアントとカウンセラーの直接的な関係、親子・家族の関係に限定されがちであると感じさせられることも少なくなかった。子どもとその親子・家族関係の不安定の背後に、明らかに、現代の地域の社会的・経済的不安定の問題があるのではないか。今、この子が、家族の外側で親以外のおとなに会えれば、あるいは学習の機会を持てれば、その子の視界が広がるのではないか。そのように感じるものがしばしばあったが、カンファレンスの論議はそうした方向に展開することは必ずしも多くなく、その点では違和感を覚えることもあった。

こうして、私は、相談室のケースカンファレンスへの参加を通じて、心理臨床的実践の固有の意味を実感すると同時に、それを、重要だが全てではない、現代の援助的な実践の一つとして理解するようになった。そこで私は、相談室のケースカンファレンスに参加し学ぶ一方で、狭義の心理臨床家ではない私にできるやり方で、子どもや親や教師や福祉・医療・心理臨床の援助者たちとの相談的関係を結ぶ努力を、多少とも意識的に試みるよう

になっていったのである。

そして、そうした相談的関係を結ぶにつれて、実際に子ども・青年が生まれ育つのは特定の時代の、特定の地域においてであり、彼らの生存・成長に関わる問題や困難はその地域の中で発生し、彼らを支える人間関係や実践も地域の中で展開される以外にないということにあらためて気づかされていった。とくに、子ども・青年の問題や彼らを支える援助的・教育的実践の課題をリアルに把握しようとするれば、子どもが生まれ育つ地域において、彼らが世界と自分をどのように感じながら生きているかをできるだけリアルにつかむ努力を欠かすわけには行かないということ強く感じるようになったのである。

このようにして、私は、1995年からの数年の間に、北大の教育臨床心理学講座の研究・教育を創る共同作業に参加するなかで、教育学の新しい形として臨床教育学を構想するようになり、その臨床教育学の研究・教育の基本的な方法として「地域に根ざす」ということを考えるようになっていった。⁵ このことは、上ノ国調査を始めるにいたった、私の側の大きな理由の一つである。

2、上ノ国という地域

以上のような経緯を踏まえて、2000年の春、調査の実施について上ノ国町の上野秀勝教育長に相談し、教育委員会や住民・教職員の理解を得ることができた。上ノ国で調査を実施するということが決まってから、私たちは、北海道大学教育学部の2000年度前期の教育臨床心理学専門演習の時間を軸として、学生たちと共に、上ノ国という地域について学習を重ね、そこで何をいかなる方法で調べるかを検討し、調査計画を具体化して行った。

(1) 上ノ国に関する学習

まず、私たちは、上ノ国の自然・歴史・産業・生活についての基本的な文献を集め、地域の特徴を知るための学習を行なった。私たちが目を通すことができた資料はそれほど多くはなかったが、以下のようなものであった。

- i) 上ノ国町役場町民課編『上ノ国町勢要覧』¹
- ii) 松崎岩穂『上ノ国村史』²
- iii) わたしたちの町上ノ国編集委員会編『かみのくに歴史散歩』³

⁵ 北海道大学教育学部における教育臨床心理学講座の開設の趣旨とその研究・教育活動の実際と、その共同の試みのなかで私が自らの専攻を臨床教育学と名乗るようになっていった経緯は、次の四つものを参照されたい。

① 田中「臨床教育学への接近」、北海道大学教育学部教育臨床心理学研究グループ紀要『教育臨床心理学研究』創刊号、2000年3月、1-14

② 田中「臨床教育学の輪郭」、小林剛・皇紀夫・田中孝彦編『臨床教育学序説』、2002年4月、柏書房、42-60

③ 田中「臨床教育学の開拓の試み」、和光大学人間関係学部人間発達学科編『臨床の知』第1集、2003年3月、49-60

④ 田中「臨床教育学の構想」、北海道大学大学院教育学研究科教育臨床心理学・臨床教育学研究グループ紀要『教育臨床心理学研究』第5号、2003年3月、1-17

¹ 上ノ国町、1997年10月

² 1962年、自費出版

³ 上ノ国町教育委員会、1978年初版、1995年増補版

iv) 宮良高弘編『上ノ国町の社会と民俗』⁴

また、子ども・子育て・教育・学校に関する文献、とくに檜山の教師たちが上ノ国で展開してきた教育実践の記録の学習を行った。学生たちと共に検討できたのは、当時手に入れやすかった以下の三つの記録である。

i) 岸晴美「飼育活動を通して子どもの心にふるさとを育む」(上の国小学校での、サフォークの飼育を軸とした学習活動の記録。)⁵

ii) 小林勝行「海に生きる小砂子の人々」(上ノ国の南端に位置する小砂子小学校での、漁業の現実と漁村の歴史の学習を軸とした教育実践の記録。)⁶

iii) 茶森茂樹「他者とのかかわりを通して自己を見つめさせる」(上ノ国中学校での、地域で生き働く人々との対面を軸とした教育実践の記録。)⁷

これらの教育実践記録を読むことによって、私たちは、檜山の教師たちが、上ノ国で、「地域に根ざす教育実践」「ふるさと学習」といった言葉のもとに、子どもたちに、地域の生活現実をみつめざることを通じて、日本と世界についての実感にくぐった認識を発展させ、人間としての生き方をつかませようとする実践を、一時の流行に乗るのではなく、腰をすえて時間をかけて多様に積み重ねてきていることを知った。

これらの文献資料の学習を行なうとともに、私たちは、2000年4月の末に、上ノ国町教育長の上野秀勝から、町の教育行政の基本的姿勢についてレクチャーを受けた。⁸

このレクチャーにおいて、上野教育長は、自己紹介を兼ねて上ノ国で生まれ育った自らの子ども時代のことを語り、上ノ国という地域の現状と子どもと教育の状況と課題について説明し、とくに教育行政で大切にしていることについて次のように語った。

i) 上ノ国の住民の間には、自らが「地域で育てられた」という実感がまだ相当に残っており、子どもの成長に寄せる期待と、住民同士が協力しあうという気持ちには、かなり根強いものがある。だが、それも、時代の趨勢を反映して、急激に弱まりつつあるように感じられる。そうした状況の下で、限界はあるが、「新たな共同体意識の復活」「地域の教育力の再生」を図りたいと考えて、教育行政に当たっている。

ii) 上ノ国の学校は、「地域に根ざす」ということを基本に運営されている。しかし、実際には、学校によって、また教師によって、「落差」があり、何をどう教えるのかを問わないまま、教科書をこなすことに追われるという状況も少なくない。地域社会と学校の「垣根」をなくし、学校が、「子どもたちが、外界の事物と豊かにふれあい、人々と出会い、かかわり合い、学び合い、新たな自分に出会い、育ち合い、教師や親もまた共に学び合い、つながりを深めて育ちあっていく、『学びの共同体』」となるように、行政を通して学校を支えたいと考えている。

そして、上野は、私たちに対するレクチャーを、次のような趣旨の言葉でしめくくった。

「上ノ国は、古い歴史を持っているわけですがけれど、第一次産業の衰退と共に、どんどん過疎化して、経済的にも疲弊してきている状況であります。…が、私は、むしろ、昔か

⁴ 北海道檜山管内上ノ国町・北海道みんぞく文化研究会、1995年3月

⁵ 地域民主教育全国交流研究会編『現代と教育』27号、1994年4月、桐書房

⁶ 教育科学研究会編『教育』600・601号、1996年5・6月、国土社

⁷ 『教育』649号、2000年2月、国土社

⁸ このレクチャーの記録は、北海道大学大学院教育学研究科教育臨床心理学研究グループ編『教育臨床心理学研究』3号(2000年7月)に、上野秀勝「私を育てくれたふるさと上の国」として収録されている。

ら続いてきた畑を耕す、海に行つて漁をして生活を成り立たせる、ここに人間の原点があるのではないかという見方をしております。

何かの本で読んだことですが、アマゾンの原住民の生活には六つのリズムがあったそうですね。夜明けと共に起きて、食料を獲得する。それから、調理して食事をする。そして家族団欒する。それが終わったら、集落の人の皆でもってコミュニケーションをはかる。その次に、沈思黙考、一人きりになって静かに者を考える。そして最後に寝る。時間が悠々と流れているというのですね。

上の国は、今、貧しいと言われてはいますがけれども、ここに住んでいる人たちは、これまで本当の人間の生活をいとなんできたのではないか、そんなふうに思っています。」

こうした上野の話に、私たちは、教育行政の責任者というだけでなく、上ノ国という地域に生きてきた一人の生活者としての思い、それをより若い世代や子どもたちと共有し発展させたいという人間としての願いを聴いたような気がして、強い印象を受けた。

(2) 地域の特徴

こうした学習を通して、私たちは上ノ国という地域の現状と歴史についての基礎的な認識を形成していったのだが、実は上ノ国を包括的に扱った文献資料は、先に述べたように必ずしも多くはない。そのような状況の中で、上野が私たちに対して行なったレクチュアの後半は、地域としての上ノ国についての全体的でコンパクトな説明になっており、それ自体が上ノ国に関する貴重な資料になっていると言える。

ここでは、上ノ国という地域の特徴を伝えるために、上野のレクチュアの関連部分を紹介しておきたい。

上ノ国という地域の概略⁹

上野秀勝

〈位置〉 北海道は14支庁でできていますが、檜山支庁管内は10町でできています。上ノ国町は檜山管内の南端です。南隣町は渡島管内の松前町です。上ノ国町という地域は、南端に小砂子という漁業集落があり、中央地区から約30キロ、東の方に神明という集落があり、中央地区から約20キロで、総延長約50キロあります。地図でお分かりのように、中央地区から南方向の海岸沿いに漁業集落があり、天の川流域沿い（JR線沿い）に農村集落があります。

〈人口とその構成〉 昭和35年頃は1万5千人ぐらいの人口を擁しており、現在は約7千4百人で、ピーク時から見ると半減しております。

半減した理由の一つは、第一次産業、つまり農業・林業・漁業の衰退にあります。もう一つは、地図で見ると若葉小中学校という学校がありますが、ここに中外鉱山、今井鉱山があり、マンガン鉱などを採掘しておりましたので、従業員の大きな集落が形成されておりました。小中学校の児童生徒を合わせておよそ200名が在学しておりました。この鉱山の

⁹ 前掲の講義記録「私を育てくれたふるさと上ノ国」の後半部分。

閉山により、現在はゴーストタウンとなり、廃屋と廃校が残っているだけです。大きくはこの二つの理由によって人口が減少したわけです。

次に世帯数と年齢の状況を見ますと、世帯数は2,777世帯、人口は7,416人。そのうち、8歳未満の人口は1,374人で、全体の18.46%。65歳以上の人口は1,673人で、22.5%。確実に高齢社会になっています。独居老人世帯が238戸で8.5%、寝たきり老人88人、単親家庭が66世帯2.4%となっております。

産業別人口では、第一次産業就業人口が昭和35年で3,774人、平成7年になると617人で18.5%。逆に三次産業（主として土建業）の就業人口は増えてきております。

〈歴史〉 高校時代に日本史を専攻された方はご存知だと思いますが、日本史の中世史の最後に登場するのが上ノ国であります。少し前までは、北海道に中世の（和人の）歴史はないとされてきましたが、上ノ国町では勝山館（山城）跡を21年間発掘調査して参りました結果、検出された遺物から中世の歴史があることが明確になったわけです。

そもそも上ノ国に和人が住みついたのは、源頼朝が奥州藤原を攻めた時代、文治五年に追討を逃れて蝦夷地に渡ってきたことに始まったと言われております。上ノ国町には館跡が四つありますが、そのうちの最も新しいのが勝山館でありまして、15世紀半ばからの遺物が検出されております。この山城は、コシャマインを戦いで倒した武田信廣が築城し、信廣の居城となったようです。

また、和人とアイヌがいつも戦っていたように私たちは感じていましたが、この勝山館跡の発掘調査で検出された遺物には、アイヌの使用する狩猟具や漁労具が出ています。周りには六百以上の墳墓群があり、これまでは和人の墓とされてきました。ところが、発掘の結果、和人の墓と隣り合わせて、アイヌを埋葬するときの副葬品である漆器や刀などが検出されました。これは、和人とアイヌが混住・共存していたことを窺わせるものとして注目されています。

この時代の上ノ国は、本州はもとより北方民族や大陸とダイレクトに交易をする拠点として栄え、海岸には港湾都市が形成されていただろうと推測されます。それを裏付ける遺物としては、中国製の白磁、青磁あるいは美濃の天目茶碗や茶壺、ルソン壺、鉄砲の弾などがありますし、鍛冶をしたり、銅細工などもしていたことがわかっています。文化の伝達は予想以上に速く、信廣は茶の湯を嗜むなど、本州の武士の生活と変わらない生活を送っていた様子を窺うことができます。

私が子どもの頃から憧れていた武田信廣は、後の松前藩の基盤をしっかりと築き、1494年この城で64歳をもって生涯を終わりますが、二代目光廣は、現在の松前にあった大館に移り、次子高廣を勝山館の守護としました。

もっと民俗学的にも調査研究していく必要があると思われまますので、皆さんが上ノ国へ調査に行かれた時に、肌で感じとって頂きたいと思ひます。

〈子どもたちの生活〉 次に、子どもたちの様子ですが、上ノ国の子どもも都会の子どももそう変わったところがないと私は見えています。家に帰るとテレビゲームで遊ぶ子どもが多く、恵まれた自然のなかで遊ぶということも多くはないように見えます。農業や漁業にしても機械化されて、子どもを労働力としてあてにする必要もありません。したがって、

農村の子どもも農業のことはあまり知らないし、漁村の子どもも漁業に従事することもないので、漁業のことは知らない。学校の体験学習で初めて田植えを経験したり、イカ釣りをしたりという状況にあります。

性質的には、純真で素直で穏やかな子どもたちが多いと思います。檜山では、過疎化の進行に伴い児童生徒数が減少し、中学校の統合が進められておりますが、統合した中学校が統合二・三年で荒れるというのが一つのジクスマミたいになっておりました。しかし、現在のところ上ノ国中学校は統合して四年を経過しましたが、先生方の努力と地域の皆様のご協力やご支援がありまして、安定した学校経営がなされております。

〈学校教育〉 さて学校教育についてであります。私は教育長として、教育の内容につきましては先生方にお任せしておりますが、特にお願いしていることは、「ふるさとを心に刻む教育」であります。

子どもたちが、ふるさとの自然や生活文化と豊かにふれあい、人々とかかわりあい、学びあい、育ちあって行く「学びの共同体」として、地域に開かれた創意に富む学校づくりをすることです。

自らの足もとの地域を深く掘り下げて学ぶことにより、はじめてグローバルな世界が見えてくると考えますし、根無し草のような子どもを育てる教育は避けたいという思いがあります。これを実践するには、先生方の準備などに要する負担が大きくなりますが、子どもたちに上ノ国人としてのアイデンティティーを育み、ふるさとに心を寄せ、広く社会で活躍していく人材の育成には欠かせないと考えております。

〈地域の共同の子育て〉 子どもたちを、健やかに、賢く、優しく育てていくためには、地域の全ての教育力を最大限に活用していくことが必要です。よく、地域の教育力が低下していると言われますが、確かにそういう面も否定はできませんが、潜在的にある教育力をどのように、どんな場で引き出して活用するかということも考えていく必要がありますし、そのことが今、教育に携わる者の責任でもあると思います。

そのため、上ノ国町では町全体を五地区に分けて、それぞれに生涯学習推進会議が設置されていて、それぞれの地区が特色ある生涯学習活動を展開しております。各学校の体験学習やふるさと学習などでは、地区の生涯学習事業と連携協力しながら効果的にすすめております。その中で子どもたちが、地域のおとなたちとかかわりあい、学びあい、おとなも子どもも育ちあって行くことを願って、施策を講じております。

これを、推進するためには、教師のご苦勞が多いわけですが、学校週五日制が完全実施された場合の、大切な受け皿にもなることになり、地域に子育て共同体をつくりあげていくために、どうしても頑張ってもらいたいと思っています。

(3) 教育長の「自分史」

また、上野は、このレクチュアの前半で、自己紹介もかねて、上ノ国で生まれ育ち、檜山の教師となり、檜山で生きてきた、彼自身の「自分史」について、私たちに語ってくれた。これは、上野という一人の人間の生まれと育ちの語りを通して、上ノ国の歴史と特徴を語った興味深いものであった。またこのような人物が教育長の位置にあるというこ

とそのものも、上ノ国の重要な特徴の一つであるように思われた。

そこで、以下に、関連する部分を紹介しておく。

上ノ国に生まれ育って¹⁰

上野秀勝

〈上ノ国に生まれて〉 私は上ノ国町に生まれ育ちました。先祖が上ノ国町に渡ってきたのは、多分、1660年から1670年代だろうと思います。この年代は、伊達騒動のあった時代で、追われて上ノ国へ来たようです。先祖の墓は今も上ノ国町にありまして、先祖が亡くなったのは享保9年、1724年ですから、今から276年前ということになります。

私の両親は漁師を生業としておりました。家から小学校までは4キロ歩いて通学するわけです、交通機関はありませんでしたから。現在私の生まれた集落には家が22軒残っていますが、当時は29軒ありました。

〈できなすボンズ〉 今はネクタイをつけ、背広を着て、一人前の人間みたいに見えるかも知れませんが、小学校時代は悪ガキで、やんちゃで、よく立たされていて、67年と半年生きていますが、今もって落ちこぼれなんです。

小学校三年生くらいから、夕方イカ釣りに沖へ出て、朝に帰ってきます。朝、顔をサッと洗ってご飯を食べて、4キロの道のりを歩いて学校へ急ぐわけです。一時間目くらいは緊張して何とか持ちこたえます。二時間目・三時間目になると、机に臥せて居眠り。当然の結果として落ちこぼれになります。昔、落ちこぼれという言葉は無かったのですが、上ノ国では「できなすボンズ」（できの悪い坊ず）と言われていました。

〈コウモンハエイモンニツウジ〉 四年生・五年生になると、第二次世界大戦が激しくなり、六年生になりますと担任の先生がさかんに「コウモンハ、エイモンニツウジ」ということをおっしゃって、体罰が非常に厳しくなりました。子ども心に「コウモンハ、エイモンニツウジ」とは、先生が子どもを殴ることなんだなあと理解したものでした。「コウモンハ、エイモンニツウジ」とは、「校門は営門に通じ」で、つまり学校の門を入ることは兵営の門を入ることと同じという意味で、後でわかるわけです。

例を上げますと、二分の一に二分の一を加えるといくらかと先生に質問されます。「一です」と答えると、木刀で頭をバーンと殴られます。何故かと言いますと「校門は営門」であり、軍隊ですから、「一であります」と答えなければならないのです。答えの結びには必ず「…であります」とつけなければならないのです。田舎の子どもですから、答えの後に「…であります」をつけるのに、ゴロが悪くてなかなかつけにくい。「…です」などと二回三回繰り返して、「キサマのような者は消えて無くなれ」と言われて窓から放り出された子どももいたんです。

〈「ズル休み」して夷王山でチャンバラ遊び〉 私の家は、原歌にありました。これは

¹⁰ 講義記録「私を育ててくれたふるさと上ノ国」（前掲）の前半部分。

アイヌ語でパラオタが語源のようで、「広い砂浜」という意味らしいです。上ノ国小学校までの途中に、「神の道」という獣道みたいな道がありまして、あの恐ろしい学校へ行かずに、その道を通して夷王山という山へ登って、チャンバラをして遊んでいた。今でいうと不登校。その頃は、不登校などという言葉がありませんで、「ズル休み」です。

私は、本当に勉強の出来は悪い、おまけに悪ガキ大将。二年生の頃から皆を引き連れて、夷王山に行って敵味方に分かれてチャンバラをやって遊びました。この遊びがまたダイナミックで、夷王山のまわりに牧場があって、たくさんの馬が放牧されていました。その馬を捕まえて、木刀を持って馬に乗り、「我こそは武田信廣なり」—武田信廣というのは、松前藩の始祖で、上ノ国に壮大な山城を築いて蝦夷地の覇権を握った人ですが—と大声で名乗り、チャンバラをして遊ぶのです。

遊び疲れると干し草にまどろんで、白雲の流れる果てにどんな街があるのだろうと、未だ見ぬ街への憧れを抱き、日本海の大空に消えて行く船影に海の男のロマンを感じ…。この時ばかりは、私たちの自由な空想の世界が果てしなく広がり、楽しい楽しい一時でありました。

こうして遊んでいるうちに、SLの機関車が煙を吐いて、海岸線を江差に向かって行くのが見えます。時刻は三時半です。そろそろ女生徒が学校から帰る時間です。山から馬に乗ってダーッと下りてきて、女生徒の周りをぐるぐる回ります。女生徒は「許してくれ」と謝まるんですよ。今考えると、何を私たちが許し、女生徒は何を許してもらったのでしょうか。許してもらわなければならないのは、こちらの方なのに…。「じゃ、許してやるから、俺たちが学校をズル休みしたことを絶対に言うなよ」「わかった」。これで悪ガキどもは、あたかも学校へ行って勉強してきたかのようなそぶりで家に帰ります。

こんなことを続けているうちに、ある日、家に帰ったらですね、学校の先生がちゃんと居るんですよ。昔は相当悪いことをしなかったら、先生が家庭訪問などしませんから、それなのに先生が居るのですから、もうすっかり動転しました。生まれてから、あれ程驚いたことはありません。

土下座して謝ったのですが、私の親父は、かます一藁の藪で作った袋—に私を突っ込んで、縄で縛って、家の前の急斜面に浜に向かってぶん投げたんです。斜面をゴロゴロ転がり落ちました。縛ってあるものですから袋から出られないんです。日暮れになって兄が縄を解いて助けてくれたんですが、家には入れません。

家の周りをぐるぐる回っているうちにランプの灯が消えるんです。当時は、電気がまだないので、灯油ランプで夜を過ごしていました。ランプの灯が消えると急に悲しくなって、家の周りを泣きながらぐるぐる歩き、玄関の戸を開けようとはしますが、旋錠して開きません。旋錠というとかっこうがいいのですけれど、心張棒と言って引き戸が開かないように、つかい棒をするのです。やがて諦めて、浜にある物置小屋に入って、藪をかぶって泣いているうちに、いつの間にか眠るんですね。

これだから勉強できる筈ありません。これで勉強の落ちこぼれになるわけです。

〈漁師になったが、父親と衝突して家を飛び出す〉 私の時代は、義務教育は8年間です。小学校6年、高等科2年で終わります。兄は二人とも国鉄マンで親父は私を後継者に考えていたようでした。そのことを当時の私としては誇りにも思っていました。

そういうことで、漁師をやるわけですが、原歌という集落はみんな手漕ぎの船でした。川崎船と言いまして、八丁櫓で何時間も漕いで漁場へ着きます。ところが、風の弱い時はいいのですが、やませと言って、東風が強く吹くと、漁が終わって浜に帰ろうとして、いくら櫓を漕いでも陸へ近づかないのです。そうするとSOSを出す。SOSと言いましても、無線があるわけがありません。櫓を逆さまに立て先端に手拭いとかを結んで合図するのです。これが当時の漁師仲間の信号でした。これを発見した動力船は近づいてきて、ロープで私たちの船を引いてくれるのです。

こんなことが何回か続くと、思春期の私のプライドが許さない。親父に動力船を買ってほしいと言ったが、原歌には漁港がないからダメだと言われて、結局は家を飛び出すことになるんです。今度は漁師の落ちこぼれです。

〈ある教師に拾われて代用教員に〉 それからは心の荒んだ生活をしていて、やすりでヒ首のようなものを作って持って、イキがっていたのですが、私はある教師に拾われました。

「おまえ、そんなことしていたら、最後に命を落とすことになるぞ。家へ来い」と。私はこの先生のお宅に居候を決め込んでいたのですが、ある夕食の時、「おまえ、先生になる気持ちないか」と言われました。「この先生、俺をオチョクッテいるのか」と思った。しかし、先生の話の聞いているうちに、なんとなくその気になってくるんですね。先生は、学校から帰ってくると、今度は私に勉強を教えてくださいました。そして私は師範学校へ進むことになるのですが、これも中途退学して上ノ国へ戻り、上ノ国小学校で代用教員（助教諭）をするわけです。

昭和23年10月から1年半代用教員をしましたが、他の先生の指導と私の指導を比較すると、比べものになりません。私は、「私から教わる子どもに申し訳ない」と思って昭和25年3月に退職しました。今度は、教師としての落ちこぼれであります。岩波書店の社長は「人の子を賊ふ如きものしかできない、教育界を去る」といって神田高等女学校教頭を退職しましたが、私とは地位も教育にかける思いも思考のレベルも全く違いますが、この言葉に妙に共感するものがありました。

代用教員をしながら、夜の定時制高校に通学しておりましたが、退職と同時に全日制普通高校に入学し一からの出直しであります。悪戦苦闘しながら何とか高校を卒業しました。

〈奥尻に赴任して〉 そして高校卒業と同時に再び代用教員になります。赴任した学校は、平成5年の南西沖地震で大災害を受けた奥尻島の稲穂小学校です。当時、江差～奥尻航路の船は120トンの小さな船で、少ししけると5時間・6時間もかかりました。

稲穂の学校は、小学校と中学校が併置の学校でした。私は小学校勤務であります。中学校の野球部の指導も担当しました。稲穂中学校は生徒数少なく、小学校5年生から選手にしなければチームができませんので、小学生3名を含めたチームをつくりました。当時、奥尻には稲穂中学校の他に中学校が3校ありました。奥尻中学校や青苗中学校は生徒数が300名くらいだったと思います。秋の島内の大会では、この奥尻中学校と対戦し、延長戦までして善戦しますが、5年生のエラーでサヨナラ負けをしました。

この子どもたちと「ヨーシ、来年こそは優勝するぞ」と誓いをたてて練習に励んでいた

のでしたが、翌29年の5月に、突然電報がきました。事態が理解できないので、校長先生にお話したら、校長先生が漁業共同組合まで走って行って電話で確かめたところ、私が上ノ国町の河北中学校に異動になっているとのことでした（学校には電話がない時代）。校長先生は、「明日、すぐに発ちなさい」と言われました。理由を聞いてみると、休職していた先生が復職したため、1名の教員が過員になって私の異動となったことがわかりました。

〈子どもたちが教えてくれた「人間の真実」〉 私は翌日、布団と少しばかりの荷物を纏めて、漁船にその荷物を積んでもらい、浜で子どもたちに見送られて奥尻（航路の船着場のある所）へ来て宿をとりました。奥尻で一泊して午前6時半ごろ、私は船上の人となって、憧れを抱いてきた奥尻ともこれでお別れかと惜別の思いを込めて島の山並みや家並みを眺めておりました。

ところが、遠くに白い一団がこちらに向かって来るのを発見しました。しかし、なんだろうかと思いつつも、再び島の風景に自分の思いも重ねながら感慨に耽っているうちに7時、蛍の光のメロディーが流れ、船内にドラの音が鳴り響き、船は静かに岸壁を離れだしたとき、先程の白い一団が船着場を目指して小路からなだれこんできた。「センセ、センセ、サヨナラー」と口々に叫びながら船に駆け寄ってくるのです。

野球部の生徒だったのです。その瞬間熱い涙が溢れ出て、子どもたちの姿が歪んでしか見えませんでした。子どもたちは、ケーソンの上にあがって、人影が見えなくなるまで手を振って送ってくれました。子どもたちは12キロの山道を、ユニホームを着て走ってきたのです。7時の出航に間に合わせるためには、小学生も入っていますから、朝4時半には稲穂を出発しなければならないのです。しかも、今年こそは絶対優勝するぞと固く誓い合ったのに、その私が結果的には子どもとの約束を反古にした形で船上の人となっているわけです。にもかかわらず、子どもたちは12キロの道のりをひたすら走って送りに来てくれたのです。

私はこれほど感激したことはありません。船の中で私はずうっと考え続けました。子どもたちは、未熟な私に「人間の真実」はかくあるべしと突きつけてくれたように思いました。このことは、教員生活に終止符を打つまで、いや、現在も私の生き方のバックボーンになっています。子どもたちが示してくれた、あの人間の真実を、決して裏切ってはならないと。

平成5年3月、私は定年退職しました。6月に、当時の稲穂の野球部の生徒から電話がきました。「先生退職おめでとう。お祝いをしたいから是非稲穂にきてほしい。奥さんも一緒に連れてきてほしい」と。私は辞退しましたが、是非にと言われて、その言葉に甘え、家内を連れて稲穂を訪ね、夜遅くまで思い出話に花を咲かせ、美味しい酒と稲穂ならではの料理を堪能したのでした。

それから3週間ほど経ってあの忌しい南西沖地震があって、一緒に酒を酌み交わした人も犠牲になりました。お悔やみと少しなりとも励ますことができないかと四度奥尻を訪ねましたが、何とも痛ましく、慰めの言葉もありません。只々教え子の手を握りしめるだけでした。

以上のような「自分史」の語りを含んだ上野のレクチュアが終わった後、思いがけないことであったが、彼を囲み、感想を述べ、質問をする若い学生たちの輪が自然にできた。上野は、生まれ育った檜山・上ノ国の自然と人間関係に感じている愛着を語り、そこで子ども時代に体験してきたことと考えてきたことを語り、そのなかで大切に感じてきたものを今の子どもたちが育っていくための栄養として伝えたいという思いを率直に語ってくれた。それが、学生たちに、教育という営みの原点、本物の教育の思想にふれたような、新鮮な印象を与えたのであろう。そして、またこのような人間が教育長の位置にある、上ノ国という地域への関心をかきたてられたのであろう。学生たちにとっても、私にとっても、それは、上ノ国調査への意欲を大いに刺激される講義となった。

3、子どもの「人生イメージ」調査

(1) 子どもの「人生イメージ」への着目

上ノ国という地域についての学習を進めると同時に、私たちは、準備の過程で、北海道大学の教育臨床心理学研究グループに共通する問題関心が、今を生きる子どもたちの生活感覚をリアルにかつ共感的に理解し、子どもたち自身の生存・成長の課題と、発達援助の実践と発達援助者の課題を探ろうとするところにあるということを繰り返し確認した。

そこから、まず、今回の調査においては、学生一人一人が主体になって、子どもたちに直接インタビューして、彼らの生活感覚についての語りを聴きとる、「半構造化面接」¹を基本的なスタイル・方法とすることにした。

次に、今を生きる子どもたちの生活感覚をリアルにとらえると言っても、そこで何を聴きとるのかということが問題になった。この点では、私たちは、それまで行われてきた日本の子どもの生活意識に関する調査のいくつか（NHK放送世論調査所のものなど）を検討しながら、次のような共通の問題意識を形成していった。

子どもたちは、ある時代のある地域に生れ落ち、「世界」と「自分」についての全体的な感覚を形作りながら、成長していく。この「世界」と「自分」についての全体的な感覚を生活感覚と呼ぶとすれば、子どもたちの生存と成長の質は、個々の関係の形成や個々の能力の獲得によってだけではなく、そうした全体的な生活感覚の質によっても大きく左右されるはずである。そのなかでも、一人ひとりの子どもが、自分の現在の生活、過去の生活、未来の生活をどのように感じ考えながら生きているのか、つまり現在・過去・未来を含む自分の人生について、どのように感じ、どのようなイメージを抱きながら生きているかということが、格別に大きな意味を持つであろう。

このように考えて、私たちは、そうした現在・過去・未来を含む自己の人生についての

¹ ここで言う「半構造化面接」の概略については、ウヴェ・フリック著・小田博史他訳『質的研究入門』（2002年10月、春秋社）（Uwe Flick, Qualitative Forschung, 1995）の第8章「半構造化インタビュー」を参照されたい。

² このように子どもの「人生イメージ」を聴くということになった要因の一つに、人間の発達を自己感覚・自己意識と時間感覚・時間意識を軸に考えようとしてきた私自身の問題意識があったことは確かである。この点については、拙稿「子どもの生存・成長と『人生イメージ』をめぐる問題」（2001年7月、北海道大学大学院教育学研究科教育臨床心理学研究グループ編『教育臨床心理学研究』第3号、1-11）に記した。

全体的な感覚やイメージを「人生イメージ」と呼ぶことにし、今回の調査の主軸を、上ノ国の子どもたちの「人生イメージ」の聴きとりにおくことにした。²

そこで次に問題になったのが、子どもたちから、彼らの「人生イメージ」を、どのように聴けばよいかということであった。

ただ「あなたは人生をどうイメージしていますか」とたずねてみても、子どもたちは、答えようがないであろう。子どもたちは、上ノ国という地域に生まれ育って、その地域や学校や家族や社会について、そして自分自身について様々なことを感じ考えながら、それらの総和として自分の人生についての感覚・イメージを形成しているはずである。そうだとすれば、私たちの聴きとりも、地域・学校・家族・社会・自己などについての子どもたちの具体的な感じ方・考え方を聴きながら、彼らの全体的な「人生イメージ」に迫っていくようなものでなければならない。私たちは、このように考えて、インタビューの諸項目とその構造を考えていった。

さらに、どのような年齢の子どもたちに、何人ぐらいにインタビューするのかということが問題となった。

この点では、現在の日本の社会のなかで、子どもたちの多くが自分の人生について考えることを迫られるのが、小学校6年生、中学校3年生、高校3年生の進路選択にあたる時期であろうと常識的に判断して、その時期の子どもたちを対象とすることとした。対象とする子どもの数は、私たちの研究グループの学生と教員をあわせた人数が20数名であるので、私たち一人一人がじっくりと聞き取りを行える程度とすることにした。

以上のような骨格の調査を実施することによって、私たちは、上ノ国の子どもたちの「人生イメージ」の内実をできるだけリアルに全体的に把握し、彼らの人間形成の問題と課題を探ってみたいと考えるにいたったのである。

(2) 聴きとり調査の実際

このような経緯と準備を踏まえ、2000年の6月21日から23日に、北海道大学教育学部の教育臨床心理学講座の学生・研究生20余名と、同講座の私を含む教員3名が、上ノ国に調査に入った。

そして、上ノ国小学校の6年生の児童14名、上ノ国中学校の中学年生の生徒6名、上ノ国高等学校の二年生の生徒6名、計26名の子どもを対象に、彼らの「人生イメージ」の聴きとり調査を行った。なお、高校二年生になったのは、当初に対象と考えた三年生が調査期間中は学校行事のために不在であったためである。

この調査は、先に述べたように、一人の子どもに一人のインタビュアーが面接して聴きとるという仕方で行なわれた。聴きとり時間は、小学生については45分、中・高校生については90分を当てた。

実際の聞き取りに当たっては、「半構造化面接」の手法を採用し、次のような七つの大まかな問いを準備し、子どもたちにこれらに自由に答えてもらうことを通じて、彼らの人生についてのイメージが全体として浮かび上がるように工夫した。

- i) あなたの毎日の生活時間について教えてください。
- ii) あなたが住んでいる地域の様子とその特徴について教えてください。
- iii) あなたが通っている学校の様子とその特徴について教えてください。

- iv) あなたの家族の様子とその特徴について教えてください。
- v) あなたのこれからの人生に関する考えについて教えてください。(「どのように生きられたら幸せだと思いますか」など)
- vi) 今の自分をどう思いますか、自己評価について教えてください。(「以前の自分と比べて変わったと思うのはどういうところですか」など)
- vii) 社会についてのあなたの考えを教えてください。(「『競争』についてどう思いますか」など)³

26人の子どもたちは、それぞれの仕方で人生の選択の時期に直面していたこともあり、私たちの問いに答えながら、私たちが予想していた以上に、自らが抱く「人生イメージ」を熱心に語ってくれた。この調査に加わっての私の印象を概括的に述べておくと、以下のごとくである。⁴

i) 上ノ国の住民の生活は、長期にわたる第一次産業切り捨ての政策と、長引く構造的不況の下で、極めて厳しいものとなっていて、そのなかで育っている子どもたちは、現在と未来の生活に大きな不安を抱いている。

ii) しかし同時に、この地域では、子どもを支えるための住民同士の協力、住民と教職員や諸専門家たちの協力、それを支える行政関係者の努力が、自発的に展開されており、それに支えられて、子どもたちは、地域への強い愛着を持ち、生活の基底に安心の感情を創り出している。

iii) こうして、子どもたちの多くは、不安と安心の交錯する複雑な生活感情を形作っている。そして、「競争の先になにがあるの?」と競争的価値観を疑い、生まれ育ったこの地域で、仕事に就き、「普通の幸せ」を得たいと望んでいる。しかし、地域には青年の働き口が極めて少ない現実があり、彼らは、それはどうにもならないことなのか考えたいと思っている。

iv) この地域の住民や教師・援助者たちに求められているのは、こうした子ども・青年の声や生き方への問いをどう受けとめ、どう発展させたらよいかを深く考えていくことであろう。

(3) ある高校生の語りの記録

この調査において、私は、インタビュアーの一人として、ある高校二年生の女子生徒からの聴きとりを担当した。この時の彼女の語りは、調査に応じてくれた子どもたち、とくに高校生たちの語りを、内容的に代表していると言って差し支えない。そこで、子どもたちの語りの具体的な姿と内容を伝えるために、その聴きとりの記録を紹介しておきたい。

聴きとり記録の作成に当たっては、まず、インタビューを録音したテープをそのまま起こして第一次テキストとした。次に、この第一次テキストから、インタビュアーである私の問いと発言を削除し、女子高校生の語りを内容的な「まとまり」で区切り、その内容にふさわしい「見出し」を彼女自身の語り言葉から選んでつけて、第二次テキストとした⁵。

³ 各柱のなかにさらに細かい聴きとり項目を用意したが、それらについては、北海道大学大学院教育学研究科臨床教育心理学研究グループ編『教育臨床心理学研究』第3号(2001年7月)の26頁を参照されたい。

⁴ 子どもたちの語りの全体の記録と分析は、前掲の『教育臨床心理学研究』第3号(2001年7月)にまとめられている。

以下に紹介するのは、その第二次テキストである。

〈日々の暮らし〉 進学したいので、そのために数学を勉強しています。それで、ほとんど毎日過ぎてしまいます。塾には、行っていません。この地域にもあるんですけど、行く暇がなくて…。習いごとは、特にしていません。あとは、夏になると、休みの日に、友だちと海に行って遊んだり…。仲のいい友だちと泳いでいます。家での勉強は、毎日30分ぐらい。アルバイトはしていません。家のことは、お母さんが家にいない時に、ちょっと。お母さんは、仕事はしていないけれど、今、お父さんが入院していて、その世話をしなければならないので、そういう時に食事を作ったりしています。

〈地域の特徴〉 海と山があって自然が多い。あと、旧笹浪家など、昔のものが結構残っている。ほとんどの人が知り合いで、助け合いとかしていて住みやすいところだと思います。

例えば、みんなと、「おはようございます」とか、日常生活の会話ができる。向こうから話しかけてきてくれる人が多い。隣の人が病気だったらちょっと看病しに行ったり、何かあったらご飯とか作りに行ったり、手伝いに行ったりとか。そういうことを、あたりまえのようにやっている。他人のことを思いやる人が多い。

今の上ノ国の生活では、困ったことが起きたとき助けてくれる人がいる。お父さんもお母さんも、上ノ国で生まれ育ったから、近所にいとこや親戚がいっぱいいて、今、お父さんがケガで入院しているけれど、私がテストで忙しくて家事をできない時には、ご飯を作って持ってきてくれたりします。心配ごとや悩みがあったとき相談に乗ってくれるのは、お母さんと友だちと先生で、それは生活を助けてくれる人たちとはちょっと違う。でも、両方とも大事な人たちで、そういう人たちがいてくれるので、安心していられる。

私は、ここに生まれ育って、いろいろ気にかけてもらってきた。ここに生まれてよかったなあと思っています。中学二年の時、お父さんの仕事の都合で、函館で過ごしたことがあるんですけど、何かが違って、やっぱり落ち着かなかった。誰ともコミュニケーションがとれないというか…。どこを見回してみても建物しかないし、上ノ国にあったものがなくて、イライラしていた。

心配なのは、ここには就職する場所がないということ。もっと就職先が増えたら残れるのになあという気がします。ここで就職して、ここで住んで行けたらいいけど、それは無理で、やっぱり離れないといけないかなあという感じがしています。町の人みんなを考えていけないと思うけれど難しい。

〈学校生活の様子〉 普通の学校は、先生と話す機会がそんなにないと思うんですよ。でも、上ノ国高校は、すごく先生といろんなこと相談したり、話したり、遊んだりできて、

⁵ インタビューは、語り手と聞き手の「合作」である。したがって、私には、基本的には、インタビューの記録をテキスト化する場合に、聞き手の側の問いや発言も載せるべきであると考えている。ただし、聞き手の側の問いや発言を削った場合に、語り手が語ろうとしている問題や、その感じ方や思考様式が、よりはっきりと浮かび上がってくることがしばしばある。このインタビューはそのような性質のものであったと判断し、また本稿の目的からその方がよいと考えて、聞き手である私の問いと発言を削除した。次節以降の三人のインタビューについても、同じように判断して処理している。

いざとなると団結力深まるし、なんか家族みたいです。生徒は、みんなそう感じていると思います。

それから、ここの先生たちは、地域のお父さん・お母さんたちともフレンドリーです。ほかの学校とは全然違う感じで…。別の学校に行った友だちに聞くと、そんなふう先生と話せないし、先生と生徒の間が境界線みたいなものではらさっている（分かれている）って…。生徒の間でも相談ができなくて、ひとりで悩むことが多いって。

授業は、勉強はしてるんだけど、いろいろ違う話が出てきて、勉強してるより遊んでいほうが多いような気がします。例えば今日の日本史の授業みたいに、教科書はやるんだけど、今問題になっている環境問題とか、地域で何かあったらそのことについてどう思うかとか、そういう感じです。コミュニケーションとか社会性とか、そんな勉強をしている感じです。何と言ったらいいのかなあ、どういう接し方をすると人を傷つけるのかとか、社会に出たらどう生きて行ったらいいのかとか…。

だから、上ノ国高校は、先生と一緒に楽しく授業を受けられるし、生徒がみんな知り合いだから困ると助けてくれて、いじめとかほとんどないし、関係がよくて、楽しく学校に来れる。よそでは学校に行きたくないという人がいっぱいいるのに、ここではたいていの生徒が行きたいと思っている。今の日本ではちょっと珍しい学校でないかなと思っています。

嫌なところ・変わってほしいところは、規則は守ってほしい。例えば、髪をそめたらだめだよというような、こういうことはしてはだめだよと決められたことは守り、けじめをつけてほしい。これは、生徒に変わってほしいところですけど。

〈家族のこと〉 家族は4人です。お父さんは、短気で、怒りっぽくて。今、48で、工事の仕事をしていて、いろんなところに働きに行く。お母さんは、優しい。怒る時は怒ってくれる。47です。仕事は持っていません。あと、口のうるさい弟がひとりいます。今、中学2年生です。何かいちいちうるさいんですよ、反抗期もまぎって。祖父母は、おばあちゃんがひとりだけで、あとはみんな亡くなりました。

うちの家族の特徴は、会話がある家庭っていうか…。今日何があったとか、こういう人がこういう話をしたとか、テレビで何やっていたとか、会話が途切れることがない。ちっちゃいときからそういう家庭です。主にお母さんの力かな、お母さんが話してとまらないから。暗く考えるのがいやなんですよ、一日一日が楽しく暮らせたらいいいという考えで…。みんなは家にいるのいやだというけれど、私は家にいるのが好きなんですよ。落ち着いていられる場所というか、ゆったりものごと考えていられる。

〈父親との関係、父親の仕事への心配〉 お父さんは、工事に出かけていて、帰ってくるのは、盆と正月とか一年に二・三回くらいです。ちっちゃい時からいなかったから、帰ってきた時は嬉しいんだけど、また仕事に行くという時さみしくなって、何でこういう仕事についているのかな、一歩間違ったら命があぶないから、できたら家族が心配しないですむ仕事についてほしかったなと思います。今回は、石が落ちてきて、けがをしました。かなり大きなけがで動けない状態で…。今はかなりよくなって歩けるようにはなったんですけど…。それで食べさせてもらってるんだからしょうがないけれど、毎日が何か事故が

起こってないか、けがしてないか心配して緊張していなければならないので。お母さんもいつも心配している。弟はのほほんとしているけど。

お父さんが普段いないから、甘え方が分からないんですよ。たまに会うと、どうやって接したらいいか、何話せばいいんだらうかって考えちゃって。今日何やったとか、学校がどうだったとか話すんだけど、ほとんど会話は成り立たない。これからどうしたいという進路のことや就職の話をするとうケンカになる。ここ行きたいんだけどと言うと、「上ノ国に残ればいいんしょう」って感じで…。私は、看護関係の職業につきたいんで、看護専門学校に行きたいんだけどと言うと「看護学校に行ってもいいけど、近くにいてほしい」って。それで、函館とか札幌とか行きたいんだけどと言うと、「ダメだ」ってなる。お母さんは、行きなさいって言うんだけど。さみしがりやらしいんですよ、お父さんは。本当にダメだと思っているのかどうかは、よく分からないんですけど。

こんなこと言ってたって、お父さんのけがが治ってくれないと、お金のことがあるから、いけなくなるかもしれない。神経が切れちゃって、脊髄とかも崩れちゃったりして、大分回復してきたけれども、まだ腕が動かなくて、仕事に戻れるかどうか…。これからどうしようかなあなんて。学校も辞めようかなあって思ったり。学校に行っていると、やっぱりお金がかかるじゃないですか。やめてアルバイトでもして、アルバイト料を入れれば、家も助かるかと思って。でも、やめちゃったら自分の負けかなあと思ったり。お母さんは、学校に行ってほしいって。今は、お母さんの言うように、看護学校に行って、職業について、それで助けようと考えていますけど。長い目で見たらそっちのほうがいいって…。

〈私の弱い部分〉 家族は私に、何があっても自分を見失わないように強くなれって言う。それがお母さんの口癖。学校で大きいけんかをたまにすることがあるんですよ。友だちが約束を破ったりすると逆ギレするタイプなんで…。口きかなくなったり、とことんまでやってとっくみあいになったり…。先生ともうまくいかなかったりすると、もうどうでもいいやという感じで投げやりになっちゃう。それで自分を見失ったりして、気持ちをお母さんにぶつける。そうすると、お母さんに、自分を見失わないで強く生きなさいって言われるんです。

私には、結構弱い部分があるんで…。いじめられていたことがあったから、自分の意見を言うんだけど、すぐにひいちゃうところとか…。中学校のとき、統合したばかりだったから、生徒の人数が急に多くなって、ちょっと荒れていた時期だった。友だち関係も、見たことのない人がいっぱい、辛いときがあった。でも、そこで負けたら自分が弱いことになるかなと思って。お母さんが、いい人なんで、励ましてくれて。

〈家族の期待〉 進学は、したかったらしなさい、でも一回落ちたぐらいでやめるなら初めから受けるなど言われています。

職業は、お父さんもお母さんも、看護婦になってほしいと言っています。やっぱり、人の命を助けたいと思うんですよ。困っている人がいたら助けてやりたいし、なんかそういうのみにいるとかわいそうになってきて、少しでも心の支えになればなあとか、なってあげたいなあとか。それは、お父さんもお母さんも私も同じ気持ちだから。お父さんははっきり言わないけど、お母さんがそう言っている。お母さんは、学校行ってなかったんで

すよ。家庭の事情で、行けない状態だった。上ノ国の人なんだけれど、貧しくて、きょうだいが多かったみたいで…。自分がそうだったから、まわりに助けやりたい人がいたんだけど、助けてやれなくて、見過ごしてしまった。そういうのがあから、ちっちゃい頃から、お母さんが、少しでも人を助けられる仕事につけたらとか、看護婦さんになれたらというのを聞いてきた。

結婚は、お父さんは、してほしくないと言っている。孫は早くみたいけど、今は娘が結婚ということになったら悲しい、親元から離すのはいやだ、でも最後にはどうせ行っちゃうんだろうなあって。ただ、学校を卒業してすぐ結婚はしないほうがいいよって。少し自分の余裕をつくってそれから行った方が絶対にいいよって。なぜかよく分からないけれど、この地域には、早く結婚する人が多い。でも、早く結婚し過ぎるのは、あまりいいことはないよって言われている。そういうことは、主にお父さんが言ってる。お母さんは、したくなったらすぐすればいいよってという感じで。結婚となると、お父さんがうるさい。

暮らす場所は、両親ともに、上ノ国にいてほしいと言っています。何があるかわからないから、いてほしいよって…。

〈これからの人生について〉 進学は、看護学校に進みたい。今、看護模試というようなのを受けていて、ちょっと知識的には足りない。勉強不足だというところをやっていけば何とかかなかなと感じていますけれど、油断はできない。人の命を助けて、いろんなことを学びたいんですよ、とにかく。みんなが健康で生きて行けたらいい。

小学校の6年生のころから、看護婦になりたいと思うようになった。おじいちゃんが亡くなって、そのときに、おじいちゃんにすごいかわいがられていたから、どうして助けてもらえなかったのかなあと思った。それで、自分が、そういう職業につこうかなあという気持ちになった。

どこの地域で暮らしたいかという、最後は上ノ国に戻ってこようという考えがあるんですよ。それまでは、ちょっと上ノ国から離れてみて、札幌とか函館とかでがんばってみようかなあという考えがある。何かここにいると甘えちゃう、自分を甘やかそうだから。辛いことが多いと思うんだけど、それだけ強くなれるかなあって思って。「最後には…」と言ったけど、いつ頃帰ってきたいかという、自分はもういいやあという時になったら帰ってきたいなあ。40才とかそれぐらいになったら、こっちでのんびりした生活がしたくなるかなあ。子どもができたら、帰ってきたいという気になるような気もする。自分が上ノ国で育ってよかったなあと思っているから、それが大きい。子どもにも同じ経験をさせたいし、同じことを学ばせたい、いいところだから。

結婚は、やりたいことがいっぱいあるから、すぐにはしたいと思わないんですよ。でも結婚するなら、お金をもっているという人よりは、優しくて家族のことを考えてくれて、いい家庭を築けそうな人を見つけたい。見つからなければ無理して結婚しなくてもいい。無理して結婚して、あとあと大変なことになったらいやだから。

これからの人生で不安に思っているのは、自分がどれぐらい生きられるのかなあってことかな。いつ自分が死ぬかわからないから、それまでに自分がやりたいことをどれぐらい達成できるかなあということ。あと、お父さん、お母さんが健康でいてくれるかなあというのと…そんな感じかな。あと、いつまでも、上ノ国がこのままであってほしいけど。急

に変わって住みづらいところになったらいやだし。

〈どのように生きられたら幸福か〉 今の生活は、楽しい。学校に来たくて来たくてしようがない、本当ですよ。変だという人が多いかもしれないけれど、学校に来て、みんなとふれあって楽しく過ごせたら、それだけでいい。それが一番の幸せだなあって思う。辛いときは、仲のいい人とか信頼している人に裏切られるようなことがあったとき、そんなときにやっぱり辛いなあと思う。

どんなふう生きられたら幸福な人生だと思うか、うまく言えないけど、みんなが幸せだったら自分も幸せになれるかなあ。毎日毎日、そういう人と一緒に生きて行けたら、それが幸せかなあ。やっぱり、人には変だと言われるけれど、困っている人がいたら助けて、人のために何か役立つことができたなら幸せだなあと思う。自分を犠牲にしてまでやることはないと言われるけれど、そう思うんだから、これは仕方がない。

〈自己評価、どんな人をすごいと思うか〉 自分の好きなところは、いつも笑っているところ。嫌いなところは、よく人に優し過ぎると言われるんだけど、尽くし過ぎるところかな。あわせ過ぎって言われる。その人のことを考えてものを言うから、もうちょっと自分を大事にしたらって。

これまでの人生で自分が一番変わったのは、高一で、海外に行ったんですよ。それ行ってから、結構、自分が変わったような気がする。高校の研修旅行のようなのがあって、カナダに一週間行った。それに行くと、自然がすごかったし、帰ってきたら人に対する姿勢が変わっていたような気がした。何かが変わった。それまでは自分が気分屋だったから、暗いときは暗いし、あーあっという感じだった。いろんな人とふれあって、うまく言えないけど、気持ち的に大きくなったような。ちょっと行く前は、細かなことを気にしてたんですよ。そんなのがなくなって、なんだそんなに考えなくてもいいんだなあという感じで、だいぶ楽になった。それから、笑えるようになって、一日一日が楽しくなってきた。

どんな人をすごいと思うかということでは、悩んでいてもそれを表に出さない人ってすごいと思うんですよ。悩んでいたり困ってたりしたら、大体表情に出ますよね。大きな悩みがあるんだけど、それを表に見せない人、そういう人がすごいと思います。もう転勤した先生だけれど、この学校でそういう先生がいました。友だちも、そういう人をすごい、見習いたいと思うんです。

〈「競争」について〉 変かもしれないけれど、競争して何か意味があるのかなあと思うんですよ。その先に何があるのかなあって。競争しないで、力を合わせていけば何とかなるんじゃないかなあって。どうせ達成するのは同じなんだから、そんな争わなくていいんじゃないかなあ。でも現実を考えると無理なんかなあ…。

友だちの成績って、全然気にならない。テストでいい点とったからといって、なんかあるのって思うんですよ。自分の実力でやればいいんだから、友だちを越したからうれしいなんて感じないし…。先生たちは、ライバルを持ちなさい、がんばりなさい、何位までに入りなさいっていうけど、別に入りたくとも思わないし、自分でこれだけできたんだと思えばいいんだから、一位になりたいとも思わない。争いたくないんですよ。私が友だちの

目を気にしてしまうというのと、競争したいというのととはちょっと違う。

偏差値がいいからといってその学校がいいということはない。偏差値が悪くても、のんびりして友達と話ができる、そういう学校がいい学校だと思います。進学するとき、函館の高校を受けようかと思ったけれど、そういうふうを考えて、上ノ国高校を最後には自分で選んだんです。先生にはライバルを持ちなさいと言われるけれど、その人を追い越したってどうなるの、自分のやりたい勉強をやるようにやっていた方がよいと思う。

私がおとなになった頃の日本の社会は、機械化が進んで何でも機械に頼って自分で考えない、頭の悪い、常識のない日本人が増えるんじゃないかという心配がある。私が大事だと思うのとちょっと違うような社会になるのではないかと心配している。

(4) 青年の人生観・幸福観の基調一聴きとりを終えて

①生きることと「人生を物語る」こと

このように、彼女は、それまでの人生の体験と学習のなかで感じ考えてきたことを、「自分はどこから来て、どこへ行くのか」という自分の人生の「物語」として語った。その考え抜かれた「一貫性」には驚くばかりであった。

その語り口を通じて、聴き手の私は、高校生活の半ばにある彼女自身が、一年あまり後にやってくる大きな人生選択の時期を前にして、自分の経験・学習のすべてを一つの生き方の「物語」に創り上げることを必要としている時期にいるということを知らされた。

②競争への疑い、「普通」の幸福へのこだわり

語られた話の内容に関して言えば、父親が一年のほとんどを「出稼ぎ」に出ていること、その父親が働き続けられるかどうかわからないほどの大きな事故に遭遇したこと、地域に青年の就職口がないこと、中学校時代に「いじめ」を受けたことがあり友達関係に緊張を感じていること、進学・就職をめぐる「競争」のプレッシャーを感じていることなどが伝わってきた。現代日本の社会を覆う重い問題が、この地域とこの家族にも集中的に現れていて、彼女は、それらを、気がかり・心配・不安として語ったのである。

同時に、彼女が、地域の自然の豊かさと親密な人間関係への愛着、それが自分の人生を支える「原風景」になっていることをくり返し語ったことが、印象的であった。それらの言葉から、この地域で重ねられてきた住民同士の共同、父母と教職員の子育ての共同、学校での地域に根ざす教育への教職員の努力、それを支えている行政の努力などが、彼女の内部に確実に反映していて、生きる上での安心感のようなものを生み出していることを感じとることができた。不安定な時代と社会であるからこそ、地域にそうしたおとなの動きが少しでもあることが、子どもの内部に予想以上の安心感をもたらすということがあるのであろう。

その語りの全体を通して、伝わってきたのは、彼女が、こうした「不安」と「安心」の複雑に交錯する生活感情を抱いているということであった。そして、その交錯のなかから、「競争してその先に何かがあるのか」と「競争的価値観」を疑い、この地域で結んできた人間関係を大事にして「普通」に生きていけたらそれが幸福ではないかという価値観を探り、選び取ろうとしているということであった。

③一年後に語られた教師への疑い

この調査からほぼ一年が経った2001年の9月に、北海道大学の教育臨床心理学研究グループの大学院生であった土田佳織が、再度上ノ国を訪ねて、同じ七人の高校生に、同じ趣旨で話を聞き直した。⁶ それに対して、高校三年生になっていた彼女は、次のようなことを語った。

「今まで部活で発散していたんだけど、先生たちに『まだ部活に行ってるのか』って言われると、発散できなくなる。…二・三人の先生に『勉強してるって言ってるけど、本当はしてないんじゃないの?』って、そういうこと言われて、ちょっとそれはないんじゃないですかみたいな、やりたいこともやってないで、一生懸命やってるのに、何も分かってないのに、そういうこと言わなくなっちゃっていいじゃないって。去年の先生たちと今年の先生と変わっちゃってから、そういう風に言われるようになった。前からいる先生にも勉強のこと言われちゃって、『あんた変わりましたよね。学校で勉強してたのにしなくなって…』と言われちゃって。自分自身では何も変わってないと思うんですけど。今、職員室に入るのがすごく嫌なんです。また言われるかなってみたいな、だから放課後もいなくなるか、たまに部活に顔を出すというくらい。そうでもしないと自分が壊れそうでやっていけないから。だから、実際には学校にはほとんど来たくない。

最近、いろんなこと言われて、自分が進路に向いていないのかなって考えるようになって、これから一か月後に試験あるんですけど、願書も書けないんですよ。…支えて欲しいときありますよね。でも、そういうこと言われていると、支えて欲しいのに支えてもらえなくなっちゃうようで、フレンドリーだったのが境界線がひかさってきているように見えてきた。今までいろんなこと話してきたけど、今はもう話せないのかなあって、やっぱり前となんか違うなあって…。

先生は分かってないんだと思う。言っても分かんないのかも知れない。考え方が固いつていうか、言っても分かってくれないなあって。今は本当、話してない。何か用事ないかぎり話さない。思いっきり笑えなくなっちゃったんですよ、むかむかして。次何か言われるかなと思うと…。」

高三になって、「現実」の厳しさがよりはっきり見えるなかで、希望する進路に進めるのかという「心配」がつのってきた。進学準備の学習を軸とした生活の「重圧感」も溜まってきた。その中で、自分が本当に看護婦になりたいのかどうか疑わしくなり、自分が何をしたいのかという「迷い」が出てきた。そうした生活の中で、「息抜き」をしたいという気持ちが噴き出してくることもある。先生たちには、今こそ、そうした迷いや揺れを受けとめて支えて欲しいと思う。そうなのに、先生たちの口から出るのは、「競争から逃げるな」「ライバルを持て」などという「叱宅」の言葉ばかりで、それがやりきれない。

このように、教師たちに対する「疑い」や「批判」を強く語り、そのニュアンスは、先に紹介した高二の時の語りとは大きく変化していたのである。

⁶ 詳しくは、土田佳織「現代の青年の『人生イメージ』に関する研究—檜山・上ノ国に生きる高校生の聞き取り調査をもとに」（北海道大学大学院教育学研究科2001年度修士論文）を参照されたい。

④おとなと教師の価値観への問い

私は、聴きとりをした大学院生から彼女の語りの変化を聞いて、このとき強く表明された教師への「疑い」「批判」から目をそらさずに、それを受けとめて考えるということが、この地域のおとなや教師にとって極めて重要ではないかと感じた。

それは、単に教師の至らなさを責めるということではない。教師の立場にたってみれば、生徒の進路決定の最終局面を迎えて、その生徒の将来を考えて、少しでも「良い」就職先や進学先に進めるように「激励」しようとするのは、それとして理解できることである。また、過疎化が進行するこの地域では、高校の統廃合が問題になっており、地域の存続のためにも高校の存続を望む多くの住民のことを考えれば、教師たちが、存続に値すると認められる「就職実績」「進学実績」を挙げようとし、そのために生徒を「叱咤」するというのも、それとして理解できる。しかし、そのような教師の対応に対して、彼女は、深い疑問を抱いたのである。

この疑問は、他の高校生たちにも共通していた。この大学院生によるインタビューでは、別の高校生からは、「先生たちは、俺たちを、ダメな人間と見ていたのではないか。これまで優しく受けとめてくれていたのは、厳しく扱おうと荒れるからということだったのではないか」という言葉まで出た。

彼女の「語り」を、「競争」に立ち向かえない「弱者」の「甘え」の言葉として受けとめ、「競争秩序」において「よまし」な位置を占めるために「努力」するよう、「叱咤」することになってしまうのか。それとも、「競争」的な価値観が行き詰まり、新しい価値意識を探らざるを得なくなっている今日の日本の社会における、彼女なりの懸命な生き方の模索と受けとめて、彼女と一緒に考えていこうとするのか。

一年後の変化まで含んだ彼女の語りは、この地域のおとなや教師に、このことを問いかけているように感じられた。

⑤現代青年の人生観・幸福観の基調

ここでは、一人の女子高校生の語りしか紹介できない。こうした調査はいくつもの地域で実施されねばならないし、聴きとりの方法はさらに改善される必要がある。しかし、今の日本の社会においては、特別な状況におかれた特別な子どもだけでなく、例えば彼女が語っているように、多くの「普通」の子どもたちが、その日常生活の中から生き方を考え、幸福について考えようとしていると、かなりの確実性をもって言えるのではないか。

そして、子育て・教育の改革の基本的な視座は、生まれ育った地域で、結んできた人間関係を大切にして、職業につき、「普通」の幸せを得たいと考えている子どもたちを、「弱者」とみなし責めたてるのではなく、そうした子どもたちの問いを受けとめ、彼らの問いをともに考えるところにこそすえられねばならないのではないかと感じたのである。

4、「発達援助者」調査

(1)「発達援助者調査」へ

次に、私たちは、2002年9月に、上ノ国で子どもたちの生存・成長を支えて暮らし働いている住民、保育者・教職員など17名の人々から、彼らの地域観・子ども観・援助観・教

育観などについての聴きとり調査を行なった。私たちは、それまでの調査・研究を通じて、こうした人々を「発達援助者」と呼ぶようになっていたので、この調査を「発達援助者」調査と名づけた。

聴きとりに当たっては、やはり一對一のインタビューを基本とし、一人につき90分の時間を当てた。聴きとり手としては、間宮正幸（北海道大学・臨床心理学）、増渕哲子（北海道教育大学・家庭科教育論）、池田考司（札幌東稜高校）、川原茂雄（札幌東商業）、入山利彦（北海道大学大学院生）、田中孝彦らが参加した。

この調査でも、「半構造化面接」の手法を採用し、あらかじめ次のような聴きとりの三つの柱を立てて臨んだ。

- i) 地域と子どもの現状をどのように感じているか。
- ii) これまで、どのように暮らしてきて、子どもを支える上でどのような援助的実践を行ってきたか。
- iii) 地域における子ども援助の今後の課題をどう考えているか。

（2）結果の概要

この調査の全体的な報告は、北海道大学大学院教育学研究科教育臨床心理学・臨床教育学研究グループ『檜山・上ノ国町地域調査報告書』¹にまとめられているので、詳しくはそれを参照されたい。

その結果を私なりに整理すれば、17人の「発達援助者」たちの語り全体には、次の四つの大きな特徴があったといえることができる。

①自然・人間関係・子どもへの愛着

私たちが地域の特徴について尋ねた時、人々が語ったのは、上ノ国の自然の豊かさについてであった。

「やっぱり自然だね。」

「海もあるし、山もあるし、川もあるし。」

「日本海でとれた魚を食べられるありがたみを感じます。添加物を入れないすばらしいものを与えられて一番ですね。…魚をとって野菜をとっていけば生活は困らない。」

また、ほとんどの人が、人間関係の親密さを地域の特徴として挙げた。

「風は強いけど、人情味があるっていうのが最高ですよ。…お互いに気かけあっているっていう、そういう地区じゃないかなと思っているんですけど。」

さらに、子どもたちへの温かいまなざしを示す言葉も多く語られた。

「子どもたちはすごい。ものや人に対して、思いやり、気を遣うというか…。」

「素朴で…。活発なところがもうちょっとあればいいかなとは思いますが、自分を出すことが不得手で、またそこがおくゆかしくて、そういうのでいいかなという気もします。」

これらの言葉は主に40～50歳代の人々によって語られたが、こうした言葉に表現されるような雰囲気・生活意識が、これまでこの地域と住民生活の基調をなしてきた。そして、以下に述べるように地域は大きく変化しつつあるが、こうした雰囲気・生活意識は、今も

¹ 北海道大学大学院教育学研究科教育臨床心理学・臨床教育学研究グループ編、2004年4月。

この地域に根強く残っている。

前節で、私は、上ノ国の子どもたちが、地域の豊かな自然と親密な人間関係に愛着を感じ、できればこの地域で仕事について暮らして行きたいと考える傾向があることを紹介した。そうした子どもたちの生活感情と、ここで見た住民たちの生活感情とは、明らかに相似形を成している。そして、両者は、基本的には、おとなたちの生活感情を母胎として、子どもたちの生活感情が形成されているという関係にある。

②地域の存続についての危機感

同時に、インタビューに応じてくれた人々の語りを聴きながら、私は、これらの人々のなかに、生活圏としての地域をどう存続させ発展させられるかということにかかわって、強い不安・心配・危機感があることも感じないわけにはいかなかった。

小砂子などの漁村、温泉が湧きかつての木材の集積地として栄えた湯ノ岱、高度経済成長期に鉱山として賑わった中外を含む地域、農業・林業を中心とする滝沢、街場であり公共施設が集中する上ノ国の中心地域…。上ノ国町という地域には、これらの歴史的・経済的・文化的な個性を持ったより小さいいくつかの地区があり、その各々が、簡単に一括しては論じられないような、独自の生活圏を成して存続してきた。

しかし、それらの地区が、それぞれに過疎化・少子化に直面し、今、生活圏として存続し得るかどうかを問われる局面に立ち至っているのである。1996年には、各地区にあった中学校が上ノ国中学校へ統合された。それは、避けられない措置ではあったが、各地区の住民と学校との関係を希薄にすることにつながりかねず、それがそれまでの生活圏としての各地区の自律性を一層弱めることにもつながりかねない。

他方では、上ノ国町は、今日の日本社会に広がる自治体の再編・統合という動向の下で、渡島支庁と檜山支庁の統合問題など、より大きな世界の動きとの関係で、いかに個性的な一つの地域に自らを形成し得るかが問われている。そして、その文脈で、上ノ国高校を地域の高校として存続させうるか否かも大きな問題となりつつある。

このような事態にどう共同で対処したらよいのか、その処方箋を描くことは容易ではない。人々の不安・心配・危機感は、ここから発生しているように思えた。そして、前節で紹介した子どもたちの自らの人生への不安の根っこも、実はこうしたおとなたちの不安・心配・危機感のなかにあるように感じられた。

③“力”をつける教育観の顕在化

聴きとりのなかで、とくに保育者・教師たちの何人かから、上ノ国の子どもや子育ての状態に対して、子どもたちは「幼い」「学力が低い」「他の地域で生きていけない」「甘えている」、親たちが「甘やかしている」といった極めて厳しい評価も出された。例えば、次のようにである。

子どもの現状について。「幼いですよね。内面的には非常に幼いと思います。」「学びそびれていうか、知識不足を感じる…。」

地域に愛着を感じ、地域で生きていきたいという子どもたちについて。「ずっとここでいいんだってというのが、自分はこんなもんだよ、みたいな感じの思いだったら悲しいなって…思う…。」

上ノ国に戻って来てしまう青年について。「悪いですけど、よそで通用しなくて帰ってきたのか。親が子どもを必要としていることもあるのか、子離れできないのか。」

地域に目を向けることを重視する上ノ国の教育について。「この地域を否定するわけじゃないんですよ。ただ、明らかにこの地域に仕事があるわけではないし、…他にいかなきゃいけない場合もあるだろし、ある程度、どこでもそれなりに努力して食っていけるくらいのところを彼らに求めたい…。」

「発達援助者」調査に参加し、そのまとめの作業にも加わった川原茂雄は、このような意見を、上ノ国で追求されてきた「地域に根ざす」「共同の子育て」の教育観とは異なる、「厳しい競争社会の中でも生き抜くことができる、町の外に出てもちゃんと働いて生きていくことができる“力”をつける教育」観という言葉でまとめている。² 二つの教育観を機械的に対立させるのは単純過ぎるが、確かに、今回の調査では、このような意見が、保育者・教師たちの何人かから、はっきりした形で出されたのが一つの大きな特徴であった。

しかし、これを父母・住民の教育観と保育者・教師の教育観の対立としてだけとらえることも単純に過ぎよう。今回、このような意見が、父母・住民の間から表明されなかったのは、父母・住民の語り手が「生涯学習推進会議」に関わって活動している40～50代の人々であったことが影響しているのであろう。私たちは、上ノ国調査をはじめて以来、様々な機会に、比較的若い世代の父母・住民から、「この厳しい競争社会の中で、どこに行ってもある程度対応して生き抜いていけるような『学力』を、子どもたちにつける教育をしてほしい」という声が出されるのをしばしば耳にしてきた。

したがって、この「地域に根ざす」「共同」の教育観と、「力をつける」教育観という二つの教育観の間での揺れ動きは、保育者・教師の間でも、父母・住民の間でも相当に大きなものとなっていると考えられる。上ノ国の多くのおとなたちが、この二つの教育観の間で揺れ動いていると言っても過言ではなかろう。したがって、上ノ国のおとなたちが、この二つの教育観の関係の問題をどう考え、自らの教育観をいかに深めていくかということが、子どもたちの生存・成長を支える上での重要な問題になってきているように思われた。

④子育ての共同の追求の主体とその系譜

この節の冒頭で紹介したように、私たちは、一方で、父母・住民からは、上ノ国にある人間関係の親密さについて語る言葉を数多く聴いた。

同時に他方で、そうした親密な人間関係が薄れてきていることを心配する多くの声も聴いた。例えば、次のようにである。

「俺ら、小さい頃はね、近所の親父さんに殴られたり、悪いことすれば怒られたりしたけど、今はいろいろ難しいですよ。…そういうのは無くなっている。…都会から見れば、まだいいだろうけど。…（農業が）徐々に機械化になってからだね、人とのあれ（結びつき）が無くなってきたのは。…何でも機械化されて、その分、人の手間が省けるようになっているんですから、その分いらなくなる。協同組合でも変わっていますからね。農業そのものも今は…。」

そして、どちらを主に語る人も、上ノ国町に新しく作られた「生涯学習推進会議」に参

² 川原茂雄「人間発達援助者における〈差異〉と〈共同〉」、前掲『報告書』所収。

加して、住民同士のつながりを創り、子どもたちの成長を支える活動に携わっている人々であった。私たちは、これらの人々の活動の実際とそれに込める思いを聴いて、上ノ国に入って感じてきた「共同」の雰囲気、単なる古い共同体的雰囲気の残存ではなく、共同関係を崩す強い社会的圧力に抗しながら、意識的な努力によって維持され作り直され続けてきたものであるということをはっきりと知らされた。そういう人々が、この地域には存在し続けてきたということである。

私は、人々の語りを聴きながら、こうした共同の思想がなぜこの地域にあるのか、それはどこからきたものなのかを考えないわけにはいかなかった。

(3) ある住民の語りの記録

この「発達援助者」調査において、私は、一人の住民と二人の教師からの聴きとりを担当した。

まず、私が聴きとりを行なった住民は、滝沢地区生涯教育推進会議議長を務める永田勝であった。永田からの聴きとりは、2002年9月13日に、上ノ国町の社会教育施設の「雑蔵」(じょぐら)の一室で行なわれた。

聴きとりはテープに記録した。その録音テープを同席した入山利彦(北海道大学大学院生)が全文をおこし、それを第一次テキストとした。そして、その第一次テキストからインタビュアーの私の質問・発言と永田の発言のうち明らかな重複部分を削除し、発言箇所を若干入れかえて三つの柱にそって並べなおし、さらに小さな内容的なまとまりに区切り、そのまとまりを内容的に示すにふさわしい言葉を永田の語りから選び見出しとしてつけたものを、第二次テキストとした。

以下に紹介するのは、その第二次テキストである。

①地域と子どもの現状

〈略歴〉 生まれは1950年の9月9日で、ついこのあいだ52歳になりました。今は無くなったんですけど、上ノ国管内の早川から入ったところに鉱山があったんです。中外鉱山ってところですよ。マンガン、鉛、亜鉛、金銀がとれました。親たちは静狩から来たんですけどね、そこで生まれました。今は上ノ国の木ノ子にいます。1986年の7月30日からだから、16年くらいかな。仕事は自営ですね、畑、農家です。

〈やっぱり自然がいい〉 僕は生まれも育ちも上ノ国ですけどね、自然がいいところですね。

もう小さいころから海へもぐって遊んだり、川で泳いでみたり、山へ登って木の枝を折って小屋つくってみたり、ターザンごっこしたりとか、そういうので遊んだ。…おとなになってからは、やっぱり竈守りながら自分たちが食うだけが精一杯で、一生懸命働いてきたんですけどね。

「上ノ国っていうのは何がいいんだ」って言われたらやっぱり自然だよねえ、やっぱりねえ。

〈子どもたちの様子〉 子どもたちは、隣近所のつきあいが密だってことを、おそらくみているんだろうと思いますね。たとえば、「カレーつくったから食べないかい?」とか、「これもらったけれども、うちで多いから食べてくれないかい?」って隣近所さ配って歩くというのは、これね、いまでも多分どの地域でもやっていると思いますよ。そこのところを、子どもたちも見ていて、お互いが助け合っている、地域が密着していると言ってるんじゃないかなと思いますけれどね。

僕は、滝沢小学校の子どもたちを何年かみていて、よその学校をみたことないですけどもね、子どもたちは、やっぱり元気はつらつですよ、ええ。

だけどやっぱり、先生方もよく言うんですけど、人前に出て自分の意見をはっきり言えないということがあるんじゃないかなって気がするんです。

〈人間関係の閉鎖的傾向〉僕は都会に住んだことないですけども、16年前に木ノ子に来たときに、全然知らない人ばかりだった。何を一番先にしたかっていったら挨拶なんですね。知らない人でも挨拶をするっていう。その挨拶は、今でもやってるんですけどね、その時に「お前誰だべや、知らねえべや」って顔してね、挨拶を返してこない人がかなりいたんですよ。その辺がやっぱり都会と違って、田舎っていうのは旅の人をすぐ受け入れられないっていうか、そういうのがある…。

②生涯学習推進会議の活動

〈滝沢地区の生涯学習推進会議のこと〉上ノ国町には、生涯学習推進会議というのが設けられていましてね。

1993年に海側と山側の二つの地域で試験的に始められたんですけども、1997年から学校の校区ごとに五地区に設けられたんです。僕たちの滝沢生涯学習推進会議というのは滝沢小学校区を拠点としてやっているのですけれども、そのなかに汐吹、扇石、木ノ子という三つの地区があるんです。本来的な狙いとすれば、その三つの地区のおとなが、みんな知らない人だから何の交流もしないというのじゃなくて、何とか生涯学習推進会議のなかで交流を深めようということで、発足したんです。私が、その議長を一応務めさせてもらっているんですけど…。

そのなかで、だんだん学校の先生方から、「小さい子どもたちが今こういう状態だ」ってことで、一緒に「体験学習」だとかをひっくるめてですね、事業をすすめることになってきたんです。今進めているのは、当初からの地域の交流を深めようということと、子どもたちに対しては、学校と話をしながら、いろんな体験をさせましょうということです。自分たちの地域には海もあるし、農家もあるし、山もある。だから、海の行事も農家の体験学習などを子どもたちにやらせてるんです。海の行事については、子どもたちは非常に楽しみにしているんじゃないかと思います。自然が豊かですしね、田舎ですから隣近所のつきあいも綿密にやっていますしね。

〈子どもたちの「体験学習」を支える〉具体的に言いますと、「体験学習」では、漁師さんの協力をいただいて、地引網をやらせていただいているんですね。それと、生涯学習

の役員の人が、鮭の稚魚の放流を子どもたちに体験させるというのをやってくださっています。あと、浜がありますから、魚のさばき方だとか塩辛作りだとか、ちょうど大崎のほうに燻製の工場ができましたんで、それを利用してもらって燻製作りもやっています。農業体験では、畑で芋植えだとか、キビだとか豆だとかそういうのを作らせて。つい最近では、芋掘りもやらせたんですけどね。あと今年は田植えを。これは5年生だけですけどね。

雪中運動会って言って、冬に外で父兄と一緒に交流しようってことでやっていますし、三世代交流ってことで、お年寄りに昔の話をしてもらったり、昔の遊びものをつくってもらったりしています。あと、夏になると帰省するおとなの人々がいるということで、ふるさとに帰ってくる人々と一緒に一日楽しもうやということで、昼間、ソフトボール大会やって、夜カラオケやって。

〈住民による運営体制〉 各地区に、何々部会、何々部会っていうのを作っているんですよ。そしてその中に部長さん、その補佐に副部长さんをおいて。ただ三地区ありますから、たとえばスポーツ部会なら木の子の誰々、汐吹の誰々、扇石の誰々って三人が並び、その上に総部会長さんっていうのが一人いるわけです。最初30名かそこらで組織をつくってやっていたのですけれども、青少年部会というのを設けて子どもたちの「体験学習」に専門的に取り組んでもらうということで、PTAに話をして。で、PTAのほうから青少年部会に入ってもらって、今は70名くらいの役員で動いています。

僕は、さっき言ったように1986年に滝沢地区に来て、自分の住んでいる地域さえわからない状態だった…。今は、生涯学習やっているおかげで、すごい多くの人を知ることができて…。それが、僕にとってはすごい宝なんですね。おかげさまですごく多くの人を知ることができたんです。

他の四つの地区も、地域地域に応じた取り組みをしまして、河北地区であれば、山ですから、炭焼き体験だとか天の川筏下りだとか、そういうやつをやっています。湯ノ岱方面でも、畑、農家ですから、田植えだとか畑仕事とかそういう体験学習をやっています。地域的にやることは違うけれども、重なることも結構あるんですね、お互いに。

うちの場合、生涯学習推進会議をつくる前には、家庭学級だとか高齢者学級だとか婦人学級だとかっていう学級があったんですよ。生涯学習推進会議ができて、そのときに町のほうからみんな一緒に合併したらどうかという話があって、家庭学級のほうは「いいですよ」、高齢者学級のほうも「いいですよ」ということになった。ただ婦人学級だけが、やっぱり独特の活動があるというので、「ちょっと待ってください」ということだった。けれども、つい3年くらい前に、一緒に合併して。

〈青年たちの参加状況〉 青年は、主にスポーツ部会ですね。ソフトボール大会だとか、楽しみとしてやるんです。子どものためにというのはないです、青年は。カラオケ大会やるときに手伝いに来てくれたり、そういうのはありますけどね。それとね、うちにね、いろんなスポーツ団体があってですね、ミニバレーのクラブもありますし、ソフトボール連盟もあるんですよ。僕はソフトボール連盟の滝沢チームに入ってるんですけれども、すごいですよ、これだけ若い者がいるのかって感じですよ。

汐吹の誰々、扇石の誰々、大留の誰々、湯ノ岱の誰々、桂岡の誰々って。なーんだ全部

地域の若者じゃねえかって、自分でもびっくりしますよ。ソフトボールなんてすごいですもん。ここにある企業のなかで働いている人もいるし、あるいは江差とかですね、あるいは自分の親の後を継いで漁師をやっている若者だとか。

ほんとにすごいですよ、びっくりするくらい若い人多いから。でも青年ですからね、やっぱり夜にならないと出てこないですよ。(笑)

③生育史・生活史をふりかえる

〈中外鉱山で生まれ育って〉 僕が生まれ育ったのは中外鉱山で、通ったのは若葉小中学校でした。鉱山がなくなったから今はもうないんですけれども…。

子どもの頃は、川で泳いだり、食うおやつもないもんですから、畑行ってスイカだとかきゅうり、トマト、そういうのを取って川へ行って食べたもんですね。隣の町の早川へ行くと海があるんですけれど、そこまで行くのに四十分か四十五分かかるんですよ、歩いてですね。その頃は自転車もなかったもんですから、歩いて行くのが大変で、だから川でばっかり遊んだんですよ。あとは山で木に登ってね、さっきお話したように古い板や釘持っていては木の枝を打ちつけて小屋をつくったり、そういう遊びばかりやりましたよ。その頃はそういうのが一番楽しかったですね。

今の子どもたちは、川へ入って泳ぐというのはないと思いますね。海では泳ぐ子はいると思いますけれども、川で泳ぐっていう感覚あんまりないんじゃないですかね。自分の子どものころのことを今の子どもたちにやらせようとしても、親たちがおそらく反対するでしょうね。やっぱり今の親たちっていうのはけがしたらどうするっていうので…。仮にやらせたとしても、一人でもけが人を出してしまえば、やっぱり批判が大きく出てきてしまうと思うしね。

中外地区では、先生と父兄と子どもとが一体となって、何でも一緒になってやっていたんです。大衆浴場があったんですよ…。大衆浴場というのはすごくいいですよ。子どもたちがよそのおとなたち、親たちと一緒に。だから学校で悪いことしてくるとその日のうちに分かっちゃうわけですよ。そうするとよその親父さんたちも「なんだ、何々(子どもの名前)、お前何やってたんだ」って、人の子でも叱りつける、教えるって感覚がすごくあったですね。

僕らの小さい頃は、鉱山のはじまりでしたから、鉱夫たちの喧嘩が毎日すごかった。中学校へ上がるか上がらないかくらいのときにはもうそういうのがなくなりましたが、そういうのをみて僕も育った。だから大きな喧嘩は、したくないですね。

中外はよかったですよ。生活費がかからなかったですよ。水道料から電気料金がほんとに微々たるもの。燃料タダ、風呂はタダでしょう、会社が全部出してくれましたからね。僕らみたいに若い年代しか、そこで生まれた人はいない。親たちはみんな流れ者なんですよ。だからもうあっちから来た人こっちから来た人、そういう人でいっぱいだったんですね。

僕は、鉱山の労働組合の書記長をやらせてもらってね、自治会の役員までさせていただきながら、つながりを持ってやっていたんです。結構そういう中では自治会の会議なんかでも、和やかな「雰囲気」で、例えばお祭りだとか敬老会だとかそういうのも積極的に取

り組んでやっていました。

〈滝沢に移り住んだ頃のこと〉 さっき言いましたように、1986年に閉山になって、滝沢に来たんですよ。木ノ子に。…やっぱり何て言いますかね、滝沢には三地区あるんですが、地域間が離れている。それに先生方の対応っていうのも、やっぱり、何かこう、昔で言うと「えこひいき」っていうんですかね、そういうものがみられた。けっこう荒れたところもありました。…

一時期、中学校の野球の指導者を、学校から頼まれて、一ヶ月くらいやったんです。頼まれたときに、「先生も必ず付いてくださいよ」という条件で引き受けたわけですよ。ところがやってみると、先生は会議だなんだと言ってね、全然出てこなかったものですから、こんなだったら示しがつかないから、「辞退させてもらいます」って辞めたんです。子どもっていうのは、本音で物事をぶつけてきますからね。だから、子どもが一生懸命やるというのであれば、おとなも一生懸命やってやるというのでなければだめだと思うんですけどね。それを会議とか言い訳ばかり言って、全然こなかったもんですから。…

〈住民と教師が一体だった〉 要するに若葉の場合は、先生方が、一緒に地域に居住していたわけです。そして常にもう、親たちは、先生という感覚じゃなく普通の友だちみたいな感覚でしたね。先生も「親父いたか、一杯飲みに来たぞ」っていう、そういうつながりです。だからもう、ほんとに先生っていう感覚じゃなく、地域の住民みんな一つでやっているという感覚だったんですよ。ところがこっちへ来たら先生方は通っていてね、もう学校終わってしまうと、地域と密着がないというか。

家は、社宅でしたよ。よくテレビで歌志内炭鉱だとかそういうの見るでしょう。ああいう社宅が4軒つながっていた。コンクリではなくて、板で出来たボロボロの長屋です。四軒長屋。四人きょうだいだったんですけど、男一人だったもんですから、すごく甘やかされて育てられたほうなんですよ。その中でもね、母親は厳しかったですよ。悪いことすると冬の真っ只中に裸にされてね、雪の中に投げられたことも何回か記憶にありますよ。親父にも一回、火ばさみで頭バーンと叩かれてここ切れたこともありますけれど。…親父は2交代か3交代で働いていて、うちにメシ食いに来るくらいの働きをしてましたんで、親父とあまり夜一緒にいるというのはなかったんですけども。まあ、でもやっぱり親父よくみてたんでしょうね、悪いことすると…。可愛がられた半面ちょっと厳しいところありましたけどね。まあ私も自分の子どもには優しくはしていましたけどね、悪いことにはやっぱり厳しくしたつもりではありますけれど。

〈今の生き方とのつながり〉 そういうことが、いまやっていることと、やっぱり多少つながっていると思いますね。たとえば、子どもたちと行き会っても、黙って下向いてうつむいていると、「おはよう」「元気ねえなあ、ちゃんと胸張って歩け」などと、声をかけてしまう。…やっぱり子どもは可愛いですよ、どこの子ども、うん。やっぱりおとなが一生懸命接すると子どもも来ますもんね…。

さっき芋掘りをやらせたって言いましたけどね、小学校4年生か5年生かの女の子なんですよ、こんな小さなイモ持ってきてね、「おじさん、イモってすごくいい匂いするん

だね」って言ってきたんですよね。その時僕ね、今までうちで芋掘りやってきたけれど、芋って匂いあったかなと思ってね。それで、「ああ、そうか。芋って匂いするかあ」と訊くと、「うん、すごくいい匂いする」ってね、うん。そして、「ありがとね」って言われたときには、こういうことやっていてよかったなあって思いましたね。

どうせ生きているのであれば、やっぱりお互いに隣近所知らん振りっていうのではなくて、やはりどこで行き合っても声をかけるっていう綿密なつながりというか、そういうのを持ったほうが、生きてく上では幸せでねえかなと思うんですよ。行き合っても知らねえ顔して「ふーん」って声もかけてもらえねえ、これくらい寂しいことないですよ、やっぱり。だから僕もさっきいったように木ノ子にきてから、ずっと今でもやってますよ。行き合うと声をかける。そうすれば声も返ってくるし、笑顔も返ってくるんですね。そのほうが幸せですよ。どうせ生きるんなら。

④これからの課題

〈産業を興して雇用を確保しなければ〉 今の時代すごく心配しているのが全国的に不景気で、どの企業もリストラをかけているということ。そういう時にこの地域の上ノ国町の人でもリストラに遭っている人がいるんですよね。子どもたちが育ち盛りで進学だとか就職だとかで困っている時期に、親がリストラに遭って困っている。子どもたちのことも考えねばならねえってときに、親として果たしてどこまで考えていけるのかっていうことが心配でね。

そのためにはやっぱり、町独自に、雇用の確保を実現するのが手っ取り早いというか、やってもらわないと困るんですけれどもね。うちの方の若い連中はまだリストラには遭っていませんけれど、僕らくらいの年代のものは、リストラで…。お盆に帰ってきてまだ勤めに出て行かない人がいっぱいいますもんね。やっぱり町も、独自の場というか産業を興してね、ある程度行って落ち着いたら、どっかの民間に委託するとか譲り渡すとかそういうやり方でね。いきなり企業に来いっていてもなかなか来ないというのもあるしね。この辺であれば、大きい加工場をやるだとか木材の産業を興すだとかね、…農家でもいいですよ。とにかく町でもって雇用するとか、町でもって畑を買ってここで何々を植えてつくるとかそういうのもいいと思うんですよ。

〈教員住宅を整備して先生が地域に住めるように〉 中学校が統合されて、学校というのは平均的にそうだと思うんですけれど、何かあってもなかなか公表しないというのがある。僕も、まあ生涯学習の議長やっているせいで、社会教育委員やらせてもらってるんですけども、そういう会議の中でも出てきませんね。会議終わったあとで、「こういうこともあんだべ、ああいうこともあんだべ」って話は聞いていますけれどね。

先生も、学校の時間帯が終わればそれでいいんだっていう感覚なんだろうね。それが、うまくないだろうと思うんですよ。昔みたいに、地域に生活を置いて、それで学校を離れても終わっても、「子どもたち、夜何やってんだべ」とか、「どこで遊んでんだべか」「一緒に遊ぶべや」とかそういう先生がいることが、やっぱり一番大事だろうと思うんですよ。

だから町も、先生の住宅をきちんと整備したら、まだまだいい教育が出来るんじゃない

かなと…。そこに自宅があるということであれば、何もあわてて帰る必要もなくなるもんね。たとえば6時半か7時ごろメシになるよっていえば、その間、学校にいて子どもたちと遊んだり、そういうの結構できると思いますけれどね。

〈「ふるさと学習」「地域学習」は重要〉 やはり自分たちが住んでいる地域っていうものをよく知るとというのが一番大事だと思う。それに対しては、上ノ国の学校では力を入れてはいますが、ふるさと学習、いろんな歴史的なもの、あるいは漁業的もの、農業的なものとか、そういうものを勉強するってことはいいことだと思います。

よそへ出て行って自分のふるさとがどういうところだって訊かれても、どういうところかわからないよりもやっぱり、上ノ国ってところはこっだけ素晴らしいんだよってことを教えてくれる方々がいる限りは、教えてもらったほうがうんといいと思いますね。僕らの頃は教えてくれる方々がいなかったものですから。

ふるさとってというのはどういうものか、よくは分かりませんがね。僕生まれ育ったのが鉱山、中外ですからね。中外がなくなったということは、僕にとってはふるさとなさげなものと同じようなものですね。

〈中高一貫について〉 いま中高一貫教育ってことで進められてるんですけども、まあ、上ノ国にとっては高校が存続されていけば町も勢いがつくってというのはよく理解できるんですけども。

ただ問題は、子どもたちが上ノ国高校に入ることによって、その子どもの本当に好きな分野がね、習得できるのかどうかってところにあると思いますね。今あるものだけでやりますよって言ったって、これは子どもがついていかないと思いますね。だから、そういう中高一貫では、子どもがかawaiiそうだなって感じがすることもあるんですけどね。

僕だったらそういうところまで発言しますけれどね。「先生方どこまでどういうふうにやってくれるんだ？」と。で、今の時代に合った、これからの時代に合うような教科を入れる、そういうところまで行かなかったらね、子どもたちはかawaiiそうだと思うんですよ。

就職問題は、おかげさまで、このあいだの校長さんの知らせでは、今年は100%の就職率だったと書かれていました。僕には高校生の子どもがいないから、実際に高校に行ったことないけれども、そういう話がチラシのなかに入っていましたよ。高校としてはがんばって一生懸命やっていますよなんていう、そういうの入ってましたけどね。僕らも最初は心配してたんですよ。都会の有名高校さ行くと就職率がいい、上ノ国の高校であれば就職率悪いだろうと。だから中高一貫だったら子どもがかawaiiそうだというような考え方あったんですけどね。

中高一貫にして高校を存続しなければならない、いいところに就職させるとか、いい偏差値を取れとか、そういう指導は自分たちの職場を確保するための努力みたいなものであって、子どもに対する教育とは何かちょっと違うような気がしますけれどもね、うん。

だからほんとに子どもたちには真剣になってかばってくれる先生というのはよく分かるんですよ。おとなの付き合いでもそうですよね。子どもはみていますよね、そういうところはほんとに素晴らしいと思いますね。いや、ほんと。

〈PTCAにしたらどうか〉 P T Aとの関連なんですけどね、これからの少子化に伴って将来的にP T A独自でもって活動が出来ねえんじゃないかと思っているんですよ。人も少なくなってくるし、会費の問題もあると思うんです。

そこで僕は、去年からP T Aの役員の方々に、「近い将来、一緒になりませんか?」、生涯学習推進会議とP T Aとが一緒にならないかと話しているんです。一緒になってP T A活動も、地域の子どもの体験学習を支える活動も一緒になってやりましょうよと。そうすることによって人の力も多くなるし、会費的なものについても解決につながるのではないかと。

それで、P T Aに、「地域を入れたらどうか」「コミュニティーを入れたらどうですか」「P T C A会っていうのをつくったらどうですか」と言っています。今すぐやろうと言ったんではちょっとみなさん抵抗があるだろうから、3年4年かけて話し合っていきましょうという話をしたのですけどね。

(4) 共同の精神とその系譜一聴きとりを終えて

永田は、中外鉱山で生まれ育った。中外鉱山は、戦時下に開発が着手され、マンガン・亜鉛・銅・金・銀などを産出し、高度経済成長期にさしかかる頃から、各地から人々が働きに集まって来て活況を呈した。永田が生まれた直後の1951年には、中外地区の人口は1100人を超えていた。

永田によれば、新しく形成された中外の地域では、生活と子育てに共同してとりくむ雰囲気が高く、電化製品が上ノ国の他の地域と比べて早く普及するなど、物質的にも相対的に恵まれた生活を享受することが出来た。小中学校の教師たちは、その地区に住んでいて、親たちと同じ住民の一員として、子どもたちの教育に当たっていた。そのなかで育った永田は、鉱山の労働者の一人として、労働組合の書記長や、地域の自治会の役員などを務め、人と人とのつながりを作ることを大切にしながら、1986年に閉山になるまで、そこで働き働いてきたのである。

永田の語りを聴いて最も印象深かったのは、この中外鉱山での生活についての語りであった。彼にとっては、このように中外鉱山で生まれ育ち生きてきたことが、ものの感じ方・考え方に決定的な影響を及ぼしているということがよく伝わってきた。

永田は、1986年に鉱山の閉山に伴って滝沢地区に移ったとき、人々のつながりの薄さと閉鎖性を感じたと語っているが、それは明らかに中外鉱山での生活体験との比較においてである。1986年の鉱山閉山の後、自ら移り住むことになった滝沢の木の子で、近所の人々や子どもたちに意識的に声をかけるようにしてきたのも、今また生涯学習推進会議の活動にかかわって人と人とのつながりを作り、子どもたちの育ちを支える努力を重ねているのも、中外鉱山での共同的な生活体験があつてのことである。

また、永田は、小・中学校は人々の生活圏としての地域の内部に存在する必要がある、教師はその地域に住んで、住民と共に子どもたちの教育に当たらねばならず、行政はそのための条件を整えなければならないと強く考えている。こうした学校観・教師観の根っこに、彼の中外鉱山での学校体験があることも明らかである。

さらに、永田は、今、上ノ国では、揺れ動く思春期の子どもを親が支える必要があるのに、その親たちの生活そのものが「リストラ」の対象とされて非常に不安定な状態におか

かれていることを心配している。そして、どうしても町で産業を興して雇用を創り出す必要があると思うという趣旨のことを語っている。そうした考え方にも、彼自身が、中外鉦山が開かれ、仕事生まれ、人々が集まり、生活が活性化したことがあったという事実を自ら経験してきたことが影響しているであろう。

このように、永田の場合、中外鉦山の活況と閉山に伴う生活の大変動を経験してきたその体験が、人々のつながりを意識的に求める、子どもたちの育ちを共同で支えようとする彼の生き方につながっていることは明らかである。これは極めて興味深いことのように私には感じられた。永田の他にもこのような体験をし生き方をしている人間がいるのか、丁寧に確かめてみる必要があるが、中外鉦山での人々の生活経験は、上ノ国の共同の精神の一つの系譜になっているのかもしれない。⁴

5、学校づくりの試み

(1) 聴きとりとテキスト化

前節で述べた「発達援助者」調査の一環として、私が上ノ国小学校の校長の笹原克哉からの聴きとりを行なったのは、2002年9月14日、上ノ国町の社会教育施設の「雑蔵」の一室においてであった。

調査グループが事前に用意した大まかな聴きとりの柱は、永田の場合と同様に、以下の三つであった。したがって、笹原の語りも、大きくこの三つの柱にそって、展開された。

- i) 地域と子どもの現状をどのように認識しているか。
- ii) 生活者・実践者としてどのように生きてきたか。
- iii) 子どもの生存・成長を支えるための新たな課題をどう考えているか。

この聴きとりに同席したのは、増淵哲子（北海道教育大学札幌校）であった。聴きとりは録音し、増淵がテープを起こし、私が若干の整理をして、上記の三つの柱からなる第一次テキストとした。

そして、そこからインタビューの私の質問・発言を削除し、内容的なまとまりがあると判断できたところで区切りを入れ、一つ一つの区切りの内容にふさわしいと思われる言葉を笹原自身の語りの中から選んで見出しをつけて、第二次テキストとした。

以下に、その第二次テキストを、三つの大きな構成部分に分けて紹介する。

(2) 地域と子どもの現状

〈子どもたちの落ち着きのなさが気になって〉 私は、四年前に、上ノ国小学校に教頭

⁴ 本稿ではふれられないが、私たちは2000年の「子どもの人生イメージ」の聴きとり調査の際に、上ノ国地域の産業・文化の見学を行ない、その一環として、上ノ国町の南端の漁村の小砂子を訪問したことがある。その折、小砂子の漁師たちから、早くから漁業協同組合をつくり、相談し支えあいながら、不必要に船や諸施設の大規模化をせずに、恵まれた自然の条件を生かして、豊富な回遊魚を取ることを主にして、「身の丈にあった」漁業を続けてきているという話を聞いた。そして、実際に、そうした漁業を継ぎたいという青年たちにもあった。そして、こうした、小砂子の漁業協同組合の経験と思想が、上ノ国の共同の雰囲気形成に影響を及ぼしているように感じたことがある。

上ノ国の共同の雰囲気形成には、これらいくつかの異なる歴史的要因が預かっているように思われる。

として一年おりました。そのときに、子どもたちの落ち着きのなさみたいなものを、かなり深い印象として受けとめました。

とくに四年生が非常に落ち着かなかった…。音楽の授業で、二学級でしたから四時間入っていたのですが、今まででしたら、この歌だったら一生懸命歌ってくれるとか、そういうものがあったわけです。そういう曲を、子どもたちに教えたいと思って教室に持ち込んでも、なかなかしっかり声を出してくれない。その曲の背景などについてもいろいろ話をしたり、音楽史のことについてもふれたりしながら授業を進めても、なかなか受けとめてくれない。これまで培ってきた教師としての力って一体何だったのだろうと思うような、そういう子どもと出会ったという印象が強かったわけです。

そこでいろいろ考えてみました。上ノ国小学校は「ふるさと学習」というのを長くやってきていて、学校で羊を飼い続けてきた歴史もあって、多様な取り組みをしてきた。けれども、どこかで子どもたちの認識がバーチャルなままになっていはいしなかったらどうか。それを土台から支える生き方そのもの、生活そのものが、やっぱりバーチャルなものになっているのではないか。そんな具合に受けとめたんですね。

〈一つの「物語」となるような学習を〉 で、子どもたちにとって学ぶということが本当に面白いものにならないだろうか、「ふるさと学習」では、一年たったら一つの「物語」ができるというような学びをさせようではないか、と先生方に呼びかけました。

例えば、二年生は大豆を育てていたわけですが、植えて、育てて、収穫をしたらそこで終わりにするのではなくて、その先に生活があるのではないか。豆腐にしたり、味噌にしたりというようなことがあるはずだ。そういうものは、きっと古い人たちのなかに、おじいちゃん・おばあちゃんの生活のなかに技として引き継がれているはずだから、そういう人に出会わせる必要がある。というようなことで、学びを構想し直す。そんな取り組みをしました。

子どもたちは、その過程で、大豆を使った食べ物にはどんなものがあるかを調べました。たしかあの時はコンビニに行って、大豆でできたお菓子を全部買って、どういう種類の豆でできているのかということも調べたり、どういうお菓子なのか実際に味わってみたりというようなことをして…。それから、二年生のある子のおじいちゃんのところ、昔使っていた大きな豆腐を作る釜があったんですが、そこに出かけて行って、PTAも含めて、学年全体で豆腐を作るという取り組みをしました。

その時、本当に二年生のある生徒のおじいちゃんが昔豆腐屋をやっていたということがわかって、そのおじいちゃんに学校に来てもらって、豆腐の作り方だとか、なぜ豆腐を作っていたのかというような話をしてもらい、豆腐屋をやっていた時に、どういう経験があったのかというような話を聞かせてもらった。朝早くに起きて、豆腐を作って、そして七時ぐらいにはもう、当時は車がありませんでしたので自転車にくくりつけて売りに出かけるというような生活をしたということ。壊れた豆腐をまた持ち帰って、がんもどきにもう一回作り直して、それでまた売って歩いたこと。そんなことを語って下さったわけですね。

で、さっき言いましたように、大きな釜のある農家に出かけて行って、豆腐を作ろうということになったんですね。子どもたちは、豆腐作りに参加して、豆腐がにがりを入れることによって固まりはじめる瞬間から、最後に豆腐になって自分たちで味わうところまで

ずっと経験した。そして、改めて、そういうことを教えて下さったおじいちゃんはずいという具合に、人間をもう一回発見する。そういう驚きを経験したんですね。

それは、バーチャルな世界から少し抜け出すきっかけになったのではないかと思うんです。そこには、実感を掘り起こして、自分に引き寄せて、人間の生きてきた歴史をもう一回見直して、手触りの学びと人間の発見があったように思います。ほっとくと恐らくそういう経験・体験をせずに、子どもたちは、バーチャルな世界で、まさに操作の仕方だけを覚えながら、実感と認識を伴わないまま成長するのではないかと思ったわけです。

〈実感をくぐった認識の大切さ〉 先ほど気になると言いました四年生でも、この地域で水田を開いた新村久兵衛という人がいますが、子どもたちがそれ学んでいくときに、どうやってその久兵衛の苦勞のあとを伝えることができるかという相談をしあったことを思い出します。

久兵衛は二キロぐらいの用水路を掘るわけですが、それだけ掘るのに二・三年かかっているわけです。用水路は幅一メートル、深さ一メートルほどのものですね。久兵衛がそういう用水路を人を雇って掘ったという話だけをしていたら、子どもたちは、今だったら簡単に二キロぐらい掘れてしまいますから、簡単なものだっていうような認識しかもてないかもしれない。これはまさに子どもの思考と切り結ぶ格好の機会ではないかと考えて、子どもたちと実際に一立方メートルの穴を掘って見たわけですね。

四年生の子どもですから、小さい子どもは、一メートルも掘ると、首ぐらいまで埋まってしまう。そしてその穴の傍らにうず高く土が積み重ねられるというようなことになった。交代で掘ったのですけれども、結構汗を流すということもあって、一立方メートルの穴というものは一体どういう穴なのか、これが二千個並ぶとはどういうことか、当時は道具も発達していなかったし、大変なことだったのではないかということがわかりはじめた。そういうことがありました。

四年前に、そんな具合にして子どもたちと学んで、それで、実感をくぐらせなければ、認識というものを本当に子どもの側に引き寄せることができないのではないかということ、非常に強く感じながら過ごすということがありました。

〈上ノ国小学校の校長になって〉 この四月、四年経ってまた上ノ国小学校に校長として戻ってきて、先生方の学級経営案やそれまでに書かれていた文書を読みました。そうしましたら、私自身が四年前に感じて話をしたことが、時代の影響もあってと思いますけれども、一層深刻になっているように感じられました。先生方が、四年前に私が感じたように、「実感が非常に薄い」「学びが抽象化している」「習得したことを生きた力として応用できない」「友だち関係を結べない」「わだかまりや気遣いを抱え続けている」「人と関わる経験が乏しい」など、危機感を持ちながら子どもたちの現実を見ているということがわかったんですね。

実際に子どもたちと顔をあわせてみても、四年前には一・二年だった子どもが五・六年になっていたわけですが、実感の乏しさ、あるいは認識を耕すという点での学びの乏しさは克服されていないのではないか、むしろ広がっているのではないかと感じました。子どもたちは、一面では仮想現実の世界のなかに囲い込まれ、他方ではそのなかに浸りながら

一種の心地よさみたいなものを感じている。そのなかで、子どもたちの生きる積極性や意志みたいなものが鈍くなっているのではないかということ、非常に強く感じたわけです。そのところに切り結ばなければ、上ノ国小学校の教育の前進はないと思いました。

〈サフォーク飼育への教師たちの疑い〉　それが大きな課題であろうと思いましたが、私は、実は、先生方の議論のなかにも一種の「危うさ」みたいなものを感じました。

上ノ国小学校で長く続けてきたサフォークの飼育を続けるかどうかという議論が、先生方のなかから出てきたのです。サフォークの飼育には非常に手間がかかりますし、休日などにも当番を含めて出てこなければいけないということもありますし、動物が好きでないという先生もいますし…。四年前はそういう議論はなかったんですが、もっぱら主張されるのは、サフォークを飼うことが一体どういう意味があるのかという、懐疑的な形の意見でした。

私自身は、その議論を聞いて、もう一度、現代の子どもたちの学びというものを先生方とまともに議論しなければ大変なことになるのではないかと感じました。ですから、サフォークの飼育について議論しながら、現代の子どもたちの学びを、子どもたちのなかに本当の生きる力につながる学びにしていくためにどうしたらよいかということを考えていく議論にする必要があると思い、先生たちに意見を出してもらいながら、話し合いを重ねるようにしてきました。

そのなかで、これは、私たち教師だけで決める問題ではない、子どもたちが今まで羊を飼ってきて、どうそれを受けとめているのかを丁寧に聴きとって、子どもたちの思いを受けとめ子どもたちのなかに何が育ってきたのかをしっかりと見据えながら、議論の方向をもう一回整理してみる必要がある。そんな話に段々傾いていったわけです。

〈子どもたちの意見を聴く〉　実際、子どもたちの意見を聴いてみると、大多数の子どもたちは、ぜひ飼いたいと言ったわけですね。六年生の子どもたちは、「メダカだとかそういう小さな命ではなくて、大きな命を飼って、責任を持って世話していくようなことをやっぱりしたい」、「一年生に入ってきて羊の世話したああいう経験を、新しく入ってくる一年生にぜひさせたい」というような意見を書きました。「いやだ」と言った子どもたちからも、「死ぬということに出会わなければ本当は飼いたい」というような声が出てきました。

そして、教職員のほうでも、そういう子どもたちの気持ちを受けとめながら、羊を飼ってきたこと、それを含んで進めてきた上ノ国小学校の学びの価値を再評価すべきではないかという議論になっていきました。で、方法上の問題は別として、飼い続けるということになったわけです。責任を持って飼い続けるのはたやすいことではなく、そこに大儀さを感じず子どももいるけれども、しかし大多数は終わってしまえば、自分にとって非常にいい時間であったと思ってくれる。そこを、もう一度評価し直して、自分たちの取り組みに位置づけようではないか。そういうところに達したわけですね。

羊を飼うということは、それを応援して下さる地域の方々との関わりのなかで、続けてこられた。ですから、古い先生方のなかには、そういう人たちの顔を思い浮かべ、あの人たちを落胆させることはできない、そういうところから発想して、続けた方がいいという

意見もありました。

ま、そんな格好になってきて、今は、一つの新しい段階を迎えているのではないかと気がしています。この論議が突破口になって、丁寧な学びと言いますかね、実感と認識と癒しとを一体にしながら学んでいくということが、道としてひらかれ始めたかなと思っています。

〈あらためて地域ぐるみで子育てを〉 それからもう一つ、学校が完全五日制になりましたので、休みをどう過ごすかということが非常に大きな問題になりました。

学力の問題は、もちろん参観日に父母から心配の質問がありました。子どもたちを、学習の繰り返しや、ただ量的な多さというところに追い込むわけにはいかないが、しかし何らかの手は打たなくてはいけない。そこで、一時間目の終わりに15分の「学習タイム」を設けて、国語と算数に関わる基本的な事項の勉強にあてました。それは週に直すと二時間ぐらいに相当しますので、そういうものを続けて、いままでと実は変わりのない学習時間を確保しているのだということで、保護者の方に納得をいただきました。

同時に、地域の人たちの力を借りて、子どもたちと月二回でも「体験教室」を開きたいと考えました。で、ここは大変時間がかかりまして、五月ぐらいから構想しはじめて、各区長さんをまわって、お願いしました。子どもの生活がひきこもりがちになるという心配があって、学校としては、子どもたちに体験の場を開きたい。様々な道に秀でている方々、子どもに関わりを持ちたいと思っている方々に来ていただいて、一緒に遊んでいただくとか、いろいろなものを体験させていただくとかということができないかと。全区長さんにお会いしてお願いをしたわけですが、非常によくわかって下さった。

そのなかで、子どもの「人生イメージ」調査の結果にも現れていましたが、「上ノ国は醤油の貸し借りができる地域だ」という子どもたちの思いがあります。本当に子どもたちがそういう思いを引き継いでいけるように、地域のなかで緊密なおとなと子どもの関係をつくってもらうことができないでしょうかというようなことで話をしてまわりました。

このようにもう一回地域ぐるみで子育てをするというようなことをしなければ、今の子どもたちの生活は、人間関係の上でも断絶が生じたり、学びの上でも抽象の世界に陥ったりというようなことで、もっと事態としては悪くなっていくのではないかとというようなことを感じております。

(3) 生活史・実践史をふりかえる

〈教師の家系に生まれて〉 私は、家系っていうのも変ですけども、教員の家系で、四代目になるんです。

曾祖父が、北檜山の若松というところに、開拓をした人たちの農場管理者として、会津の若松から入った。それで、管理の仕事が済んだら帰ろうと思っていたのですけども、チャンスを逸してしまって居着いたわけです。その曾祖父は、小作の人たちの子弟の教育をしなくてははいけないということで、教育を受けた人間であったかと思うのですが、寺子屋を開いたんですね。同時に、人心の安定のためにということもあったのでしようが、お寺を建立して会津から住職を迎えるというようなこともした。

そのあと、その息子、私の祖父ですが、やはり人心の安定ということをお願いしていたという曾祖父のこともあったのだと思いますけれども、今で言えば神社の神主のような資格も得ながら、教員になるわけです。そして校長になって、奥尻にも渡っています。だけれども、大変気の短い人で、何か面白くないことがあったのか、ある日突然校長をやめて帰ってくるというようなことがあったのだそうです。

それから、私の父の代になりますが、父は、結局そういう具合で、教員になるのは当たり前だと思っていたのだと思います。函館の師範学校に行って、そしてあちこちまわったんですけれども、最後はふるさとに戻ってきて、十四年間も若松小学校で教頭をしていました。私もその学校で、叱られながら学んだわけです。当時は師範学校を出ると、二十代にはもう校長になれたわけですが、父は、祖父が55歳で亡くなっていますので、そんなこともあって、妹の面倒もみななければいけない、母の面倒もみななければいけないということで、ずっと若松にいた。私たちもそれを見て育ちましたから、長男、次男、私は三男ですが、皆教員になるものだと思って、父親が行った函館の教育大学に行くことになったわけです。父も五十歳の誕生日をこえて一週間ぐらいで、私がちょうど教育大学の一年生の冬に亡くなりました。弟はそれを見て、医者にならなければと思って、医者になっていく。そのあたりから少し、家の伝統みたいなものが変わりはじめるので、すけれども。

私は、そういう父の姿を見て、何となく、いつも教員が家に集まってきて賑やかにやっていたので、いいなあとに単純に思っていた。大学では、高校の時からピアノを独学で勉強し始めまして、音楽の勉強をするということに中心をおきました。で、高校を卒業して、大学一年生の時に父が亡くなった。長男は、私と入れ替わりに教育大学を卒業して就職した年に亡くなって…。そして、次兄も教員になるということで、母のところに戻ってきてたんですけれども、転勤があって少し離れて暮らすということで…。で、私は、母のところに戻ってきて、妹一人しかいませんでしたので、まだ学校に通っている弟たちはおりましたけれども、母を助けながら一緒に生活をするというようなことを選んだわけです。

〈初任校で先輩教師から受けた影響〉 私の最初の赴任地は、小中併置校で、六十人くらいの学校だった。今はもうなくなりましたが、小川（こがわ）小中学校です。若松からは4キロぐらいしか離れてなくて、生家から通える学校で、免許も持っていませんでしたので、最初は自転車で通ったんですね。そのうちに、自動二輪の免許を取りまして、バイクで通って、車の免許を取って車で通うということになりましたけれども。

私は、後には組合の仕事にも積極的にかかわるようになりましたけれども、最初は、父ももういなくて、母が地元を私を連れてくるために、かなり骨を折って、父の友人であった方々をお願いをした。そういう方に頼んで私を地元に入れてもらうということをしたものですから、組合などに関わらないようにと母から懇願されて、しばらくはそういうことに気をつけながら仕事しなければいけないという具合に思っていたわけです。

1967年に教師になったわけですが、そこで、その頃四十近かった先輩の教師に出会いました。その教師は、高校しか出ていなかったのですが、しかし、いろんなことについて非常に詳しく、当時はほとんどが組合員で、年が明けた二月十六日だったと思

ますけれども、小さなストライキが行われたのですね。当時は年休を出して、ストライキに出るといふ、今では考えられないような格好でのストライキでしたが、出れば処分を受けるといふことははっきりしていたわけです。

そのとき、その先輩の教師がですね、今で言えば指導主事のような口もあつたんですけども、確かこんな言い方をしたんです。「私は、今回のストに出ようと思う。給料が少ないから給料を上げろといふようなストに出る気はない。多少の貧乏をしながらでも何とか妻子を養っていくことはできる。しかし、今度の定員闘争といふストライキは、子どもたちの勉強の条件をよくするものだから、これは教師として出ないわけにはいかない。」

私も、先輩と一緒にストライキに参加をしました。その時に、その先輩が、「今までいろいろなしがらみがあつたけれども、ストに出て非常に気持ちがすっきりした。世の中がよく見えるようになった。もう気をつかう必要は何もない、本当に自分のやりたい仕事に一生懸命邁進すればいい。」といふようなことを言った。そのことが、私にとっては、非常に大きなできごとでした。指導技術もすぐれていましたし、そういう考え方にも非常に共鳴するところがありましたので、その先輩から決定的なことを教わつたと思ひました。かえつて教育大学、学芸大学を出たり、一般大学を出た先生方からはなかなか得られない一種の魅力といひましようか、そういうものを感じたりしたわけです。

それから、本当に一生懸命に教材研究をすすめるといふ具合に、私自身も変わったのではないかなと思ひますし、民間教育研究団体に出かけて学ぶといふことにもなりました。私は、「音楽教育の会」に所属をしましたけれども、当時、「道民教」の集会には2000人も3000人も集まつて、記念講演なんかも大型の講師が来て、目が開かれるといふような思いもありました。それからサークルに行つて、いろんな実践を学ぶ。本当に子どもたちがこんなに生き生きと歌うものなのか、あそこに到達しなければいけないといふか、そういう思いをずっと抱いて教師を続けるといふことになつたわけです。

〈長年の疑問がふつ切れた檜山教組の方針〉 やがて組合の活動などに関わるようになって、当時で言えば北教組の支会の役員をしたりといふようなことなどもありました。しかしどうしても、私自身の中で整理しきれない問題がいくつかあつたんですね。

それは、「管理職敵論」といひますか、そういうとらえ方が組合の中に、昭和四十年代にはずっと強くあつた。私は、父が校長をして、一年も経たないうちに倒れて、職場復帰もままならないまま、結局は他界をするといふことになつたわけですがけれども、管理職を親に持つたといふこともあり、果たして本当にそうだろうかといふことを疑問としてずっと持ち続けていたわけです。組合の仕事をしながら、そうした矛盾みたいなものをどう自分のなかで克服していくかといふことを考えて、いろいろ先輩あるいは同輩と話し合つたといふ記憶があります。

その時に、1979年の3月26日ですが、当時の檜山の教職員組合の支部が、主任制問題をめぐつて全道が揺れ動いているさなかに、学校の創造的な発展をはかるための「確認文書」といふものを発表したわけです。そして、管理職にも教育者としての一面がある、そこを大事にしながら職場づくりをしなければいけない、そういう方針が出された。私は、そのことに、非常に強い衝撃と共感を覚えました。先輩の中には、「組合の方からこんなものを出されては困る」といふことを言う方もおられましたけれども、私自身は、自分の中で

こだわっていた疑問が解決された思いをもってこの文書を読みました。

で、その頃から、三十五歳くらいになっていたでしょうか、「学校づくり」ということを自分自身の一つのテーマにし、それに一生懸命に取り組むようになりました。そして、それまではあまり読んではいなかったんですけども、勝田守一先生やほかの方々の著作に少しは丁寧に目を通すようになったかなと思いますし、やがて組合の運動と教育実践とを両立させながら、民教活動にも一所懸命取り組む、そして田中先生の本にも出会うというようなことになったわけです。

〈原風景としてのふるさとの自然と暮らし〉 こんなふうには、私は、四年間函館に出ただけで、檜山というところで過ごしてきたんですね。

少年時代を、それから青春時代も、ずっと若松で過ごすということになってしまったわけですけども、私にとって、さまざまな子ども時代の遊びも含めて、ふるさとというのは特別な意味をもっているのではないかと思います。大きなユーラップ岳という山があって、遊びに出るとクローバー畑が広がっていて、夕暮れになるまで遊んでいて、疲れて帰ると、父が教員でしたけれどもだいたい帰ってきていて、母ももちろんおりまして、きょうだいたちが揃って食事をする…。そういう環境で育ったものですから、そこは非常に愛着や郷愁の原点になっていて、そういう懐かしさみたいなものをいつも胸にとどめているわけです。

それで、子どもたちと一緒に過ごしなが、私自身が持っているような、そういう、言葉にはうまくできないのですけれども、心に一つの形と言いましょうかね、心を吸引するようなあるいは心をつなぎとめるような、何か繫留点のようなものを持たせなければいけないのではないかなというように、ずっと教育の中で感じてきた。そこを、学校づくりの中の中心に、自分のなかでは据え始めるということになってきたように思うんですね。

〈くりかえし湧いてきた教師であることへの疑い〉 教師になって、間もなく、一番最初に私自身がこれでいいだろうかと思いはじめたのは、夏休みが終わったぐらいだったと思うんですけども、授業がうまくいかない、三・四年を受け持ち、中学生にも音楽を教えたりしたんですけども、授業がうまくいかないこともありました。一学期はただ無我夢中で過ごしたんですけども、二学期始まって間もなく、自分のやっていることが本当に子どもたちの幸せに繋がるのだろうかというように考える。考えるというか非常に疑問になって、自分は何の役にも立っていないのではないかな、ということ考えた記憶があります。

と言いますのは、三・四年を受け持ったのですけれども、一人の子が炭焼きの子どもでして、その親が、結局は炭焼きでは生計が立たなくなったので、転校するというようになった。その子を見送るときに、何の力にもなれなかったのではないかっていうようなことを、強く感じたんですね。この子どもに私は何ができたんだろうかっていうようなことで、自問する、そして結局は何もできなかったということに思い至ると言いますか。で、このまま教師を続けていって、この子どもたちにとって私はどういう意味を持つ存在になるのだろうか、大きく落ち込んだことがありました。

その地域は、古くから開拓をして入った人と、後から入ってきた人たちとの生活の落差

があって…。やっぱり非常に貧しい家庭の子どもがいて、その子どもたちの生活を聞きながら、そこには何の手出しもできないといいますか…。そのことをわかっていながら何ごともなかったように教え続けていて、それで自分自身は平和で、儉安（とうあん）をむさぼるって言えば大げさですけども、そんな仕事をしていていいのだろうかと…。

僕も、父が亡くなって、弟に仕送りをして、そして母親の生活の面倒を見るということをしていましたので、給料はもらったら母親にそっくりわたすという生活で…。煙草もたしなまないし、酒もたしなまないの、ほとんど小遣いはいらなかったわけですけども。それでも、もっと苦しい生活があるのだということ、そういうことが非常に大きく心にひっかかって、これでいいのかというようなことで、私自身がしなければいけない仕事があるのではないかと、こういう無力な仕事をしていてはいけないのではないかとというようなことを考えたことがありましたね。

それから、二・三年ぐらいの周期で、私自身の中では、そういう問題がおこったと思います。弟がちょうど医者になったということもあって、弟の人を助けるという生活が始まって、僕も、もう一回出直して、何かそういう仕事に就いた方がいいのではないかとか、いろんな葛藤がありました。やっぱり一番大きかったのは、子どもにすまないといいますかね、こういう授業しかできなくていいのだろうかということだったと思います。そういうことが、必ず実践上の問題として自分の中に、周期的に立ちはだかる。その時に、やっぱり、落ち込み自問をしてきたというように思いますね。

〈「最も恵まれないものにこそ、手厚い教育がほどこされねば」〉 お金はなかったんですけども、本を買うというのがせめてできることで…。先生方からは笑われるかもしれないですけども、あまり遊びに出歩かなかった。せいぜい遊びは魚釣りをするぐらいで。だいたい一週間に自分でノルマみたいなものを決めておいて、それで教育学全集みたいなものを、全集というか世界の選集みたいなものが出て、そういうものを読む。それから、ま、ゲーテを読むとか、ある作家の一つの本を一週間で一つずつは読んでいくというような生活を、ずっと結婚するまでは続けていたわけですね。

で、その時に、はっと思うような言葉に、迷いの中で出会ったのは、コメニウスの『大教授学』だったと思います。あの中で、「最も貧しいもの、恵まれないものにこそ、手厚い教育が施されなくてはならない」というようなことが書かれていた。そのことが私の中で、後々まで大きな意味を持つ言葉になったんですね。

さっきもお話しましたがけれども、「音楽教育の会」に行って、こういう教材がいいっていうことを学んできて、その教材を何度も何度も自分で歌って、それでこういう具合に教え、こういう具合に子どもたちに伝えたい、こういう背後の世界を伝えたいというようなことを思って、指導案らしきものを作って授業する。たまにはうまくいくこともある。しかしなかなか思うようにいかない。そういうことをくりかえしながら、教師を続けてきて、そのなかで考えてきたように思いますね。

（４）新しい課題

〈教師の学びを深める〉 一つの学校の中に、さっき言いましたように、とくに若い教

師たちの中にさまざまな迷いがあると思います。僕自身も若い頃は迷って、今だってその迷いの途上にあるんだと思いますけれども。

そういう迷いと言いますか、あるいは課題を正確に把握できないということが、現実には学校の中にある。だからこそ、子どもが背負っている課題をどういう具合に丹念に拾い、その中のリアリティーみたいなものを、自分自身の問題として引き寄せて、実践的に切り開いていく課題にしていくか。そういう意味での学校での教師の学びを、やっぱり丁寧に積み重ねていかなければいけないと思っています。それが学校での非常に大きな私の役割だって思います。

〈地域の関係の結びなおし〉 もう一つは、それを包む地域との関係の問題ですけれども、私が教師になった1967年の頃には、さまざまに組合の対立もありましたけれども、PTAで、非常にいい仕事ができたとと思います。PTAの中で、当時流行ったわけですが、「子育ての何箇条」みたいなものを作って、それはなぜかっていう学習会を、それぞれの地域でPTA会長さんを先頭にしてやった。一方では子どものおかしさみたいなものがどんどん現れてきていた時期でしたが、地域のお年寄りも含めて、まだ地域共同体的な名残みたいなものがあって、かろうじてまだ関係を作れるということがあったと思います。

今、それがすっかり途切れているのではないかというようなことを感じます。ですから、それをもう一度取り戻したい、もう一度地域の中に蘇らせたいと思います。単純に昔の形で蘇らせるというふうにはいかないと思いますけれども、そこはさっきお話したように、一方では、学校と教師の教育実践の課題にして、子どもたちに、地域の様々な世代の人たちにいろんな形で出会わせて、子どもたちに人間を再発見させる。学校では「人間と出会う旅」って言うわけですが、そういう経験を子どもたちにさせる。その中で、今までどこかのただのおじいちゃんだった人が、子どもにとっては非常に意味のあるおじいちゃんになってみたりする。そういうことができないか。

同時に、地域には、人々の暮らしがあり、組織があるわけですから、現実には、区長さんとか町内会長さんとかですね、そういうところに働きかけながら、手順を踏みながらやらなければいけない。そういう方とも、丁寧に話をしながら、取り組みをしていかなければいけないなと思っています。

〈子どもの「人生イメージ」の広がりを支える教育実践の構想〉 田中先生が、上ノ国の看護婦になろうとしている高校生の語りを、私たちの前で読んで下さったことがありますね。¹

あの子どもだけではなくて、あの子どもをある意味で一つのモデルにしながら、ああいいう物語を子どもたちに作らせたいって思っているわけです。小・中・高、あるいは保育所時代も含めて、子どもたちの「人生イメージ」の広がりを支える教育実践みたいなものを構想することができないだろうか。そうすると小学校で取り組まなければいけない課題というのが、非常にはっきりしてくるのじゃないかというようなことなどを考えたりして、中学校ともこの問題で勉強しあいたいと思いますし、高校とも勉強しあいたいと思ってい

¹ これは本稿の第3節第3項の女子高校生の語りのことである。

ますね。

田中先生の言葉を借りれば「人生イメージ」ですが、そこに肯定的に自分を見て、肯定的に自分の人生を描いていくような、そういう学びというものを創っていかなければ、小学校まで責任を持てばいい、中学校まで責任を持てばいい、といったことになってしまう。そこを何としてもですね、繋ぎたいという、そういう思いを持っている。「人生イメージ」という言葉は、僕にとっては非常に大きいと言いますか…。そういう思いが、私の中でふくらんでいる…。

(5) 学校づくりの思想—聴きとりを終えて

①地域に生きる生活者の感覚

「私は、四年間函館に出ただけで、檜山というところで過ごしてきたんですね。少年時代を、それから青春時代も、ずっと若松で過ごすということになってしまったわけですが、私にとって、さまざまな子ども時代の遊びも含めて、ふるさとというのは特別な意味をもっています…。

大きなユーラップ岳という山があって、遊びに出るとクローバー畑が広がっていて、夕暮れになるまで遊んでいて、疲れて帰ると、父が教員でしたけれどもだいたい帰ってきて、母ももちろんおりまして、きょうだいたちが揃って食事をする…。そういう環境で育ったものですから、そこは非常に愛着や郷愁の原点になっていて、そういう懐かしさみたいなものをいつも胸にとどめているわけです。

それで、子どもたちと一緒に過ごしなが、私自身が持っているような、…心に一つの形をと言いましょかね、心を吸引するようなあるいは心をつなぎとめるような、何か繫留点のようなものを持たせなければいけないのではないかというようなことを、ずっと教育の中で感じてきた。そこを、学校づくりのなかの中心に、自分のなかでは据え始めるということになってきたように思うんですね。」

このように、笹原は、幼・小・青年期を過ごした北檜山の若松を中心とし、暮らし働いてきた檜山の自然と人間関係に対する愛着を心に刻みながら生きてきたと語っている。そして檜山という地域に生きてきた生活者として、同じ地域に生まれ育つ子どもたちに対して、人間が生きていく上での「根っこ」となるもの、それを笹原は「心の繫留点のようなもの」という言葉で表現しようとしているが、その「根っこ」をじっくり育むことを教育という仕事の中核的課題と考えている。

地域に根を下ろすというのは、何かの理論的学習により選り取られた立場というよりは、地域に生きてきた一人の人間としての笹原の生き方そのものであり、そこから培われ形作られてきた生活感覚であり思想であり、その有機的な一部分としての教育観であるように感じられた。そして、それは、失われたものをただ懐かしむ後ろ向きの古い思想ではなく、現代の人間の不安定感の根底にある「原風景の喪失」とでも言うべき事態を根底から克服しようとする、現代的な意味をもった人間形成の思想という性格を帯びているように感じられたのである。

②「民衆的インテリゲンチャ」としての教師

同時に、笹原は、経済的には豊かとは必ずしも言えない生活を送りながら、より厳しい生活を強いられている生徒たちに出会って、彼らの成長を支えきれない自分、教師である自分への疑いが繰り返し襲ってきたと語っている。このように、笹原は、教師であることを疑い続けながら、教師であることの意味と限界について深く考えをめぐらし続けてきた。

また、笹原は、教職員組合の運動に参加しながら、組合運動の中に強くあった管理職を機械的に「敵」とみなす傾向に簡単には同意することができず、長く葛藤を抱いてきた。笹原は、こうした葛藤を通じて、子どもの成長を支え、親と共同し、教職員とともに学校づくりを進めていく、「管理職」の可能性や役割についても思いをめぐらしてきた。だからこそ、檜山教職員組合が1979年に出した、あくまでも地域の子ども・住民と共に歩むという教師論と学校づくりの方針、管理職の単純な「敵視」を自戒する方針が、笹原には心から納得できるものに映ったのであろう。

こうした疑いや葛藤を通じての笹原の思想形成には、彼が語っているように、明治の初期に曾祖父が会津から北檜山に入って以来、代々教育者・校長を務めてきた「家系」の中で育ったという、育ち方が影響している。笹原の語りを聴いていると、自らが檜山に生きる普通の民衆の一員であるという生活者の感覚と共に、学習の機会を得、教養の機会を得たものは、それを民衆の生活と成長に、とりわけ困難に遭遇している子どもたちのために役立てる責任があるという、本来の意味での「インテリゲンチャ」「知識人」としての自覚が伝わってくるように感じられた。

最近ではほとんど使われなくなった言葉であるが、私には、それは、やはり「民衆的インテリゲンチャ」（戸坂潤）の自覚と呼んで良いのではないかと思われた。そして、「民衆的インテリゲンチャ」という言葉は、教師という仕事とその専門性を今日的に再定義しようとする際に、あらためて思い起こされてよい言葉ではないかと感じたのである。

③子どもに対する理解と尊敬の徹底を基軸に

笹原は、2002年の4月に、上ノ国小学校に校長として着任し、教職員に向かって一月に一回の割合で「校長便り」を出し始めた。私たちがこの聴きとりを行なった折、笹原は、資料としてそのうちの何号かを私たちに手渡してくれた。

その第一号には、笹原があらゆる教育実践、学習指導の構想の出発点と考えているように思われる、「子どもに対する理解と尊敬」のことが記されていた。これは笹原の考えの重要な特徴を示すものであるので、その一部を紹介しておく。

家庭訪問に当たって

笹原克哉

今日から家庭訪問です。ご苦労様です。4月は各分掌の計画案や学習計画案、しかも日々の必要に迫られた提案に追われ、休む暇もなかったのではないかと申し訳なく思っていました。今また家庭訪問で駆け回ることになり何と多忙なことかと健康を心配しております。せめて訪問が早く終わった日ぐらひは早めに帰宅してほしいと願っています。ところで家庭訪問について、教務部から適切な観点が示されており安心してはいますが、できる

だけ親の声や子どもの生活を丁寧に聞き取ってきてほしいと思います。

実は家庭訪問という思い出すことがあるのです。前任校で出会ったA子のことです。A子は一見とてもしっかりした子に見えたのですが、入学して間もなく、気に喰わないことがあればパニックになり、教室を飛び出したり、泣き喚いたりとても手のかかる子でした。しかしその様子は不思議に満ちたものでした。第一に決して大きな声で泣かないのです。口を大きく開けはするものの押し殺したような声で泣くのです。しかも涙を流さないのです。

担任は、新卒の若い女教師でしたが、原因をつかめませんでした。それでも学校では「子ども理解のカンファレンス」を始めていましたので、A子についてあれこれと相談し、A子を受容するための方針を立てました。その一つに教室をとび出したA子をだき抱える(残りの子については管理職が対応する)というものがありました。A子に「置き去り感」を持たせないという方針でした。実際に、体育館まで行ったA子はいつも担任の膝に座って落ち着きを取り戻すのでした。

もう一つはA子の内面に何が起きているのかを知り、A子を全身で受けとめられるようにしようという方針でした。家庭訪問ではできるだけ親子の絆の深さを聞き取って来ることが課題となりました。しかし、聞き取ってこられたのは、「手のかかからない良い子で、親としてうれしい」という母親の言葉でした。学校と家とどちらがA子の素顔なのかと私たちは議論し合いました。そして学校と家との二つの姿の落差の中に鍵が潜んでいるのではないのかと考えたのです。A子は、「家でいい子を演じなくてはならないのではないか」「一年生の子が背負うにはあまりにも重すぎる世界を抱えているのではないか」と。もちろん、私たちは、「そのどちらもA子であり、どちらも愛せるように私たちの世界を広げよう」とも話し合いました。

その上で夜、親との懇談をしました。学校でのA子の姿を知った母親は驚きました。しかし泣く様子を話すと驚くような事実を話し始めるのでした。A子は、飯場で育った子でした。母親はA子を出産し、夫と飯場で共働きをしながらA子を育ててきたのです。その母親の子育ての苦労は並大抵のものではありませんでした。何よりも気遣いしたのは、働いて戻ってきた男たちに子どもの泣き声を聞かせないということでした。泣き出すと急いで外に連れ出し、声を忍ばせて泣かせたというのです。もう一つは、いつも機嫌の良い子でいて、飯場でかわいがってもらえるようにしたというのです。しかも同世代の子どものいないおとなだけの世界で育ち、友だちとの関係を結ぶことも知らずに育ち、入学を前に夫の故郷に戻ってきたのでした。

思いきり母親に甘えることもできず、声を上げて泣くこともできず、いつも機嫌よく可愛がられる存在でなければならなかったA子の生い立ちを知り、私たちも胸いっぱいさせられました。「お母さん、時には思い切り抱きしめてください。誰のものでもない、A子の母だと体温で伝えてください。安心して泣いていいのだと。心の中に棲んでください。」と言ったことを思い出します。カンファレンスでそのことを話し合いました。「A子が涙と声を出して泣くことができるように。」「私たちも、A子に安心感を与えることができるように。」「良い子ではなく、素顔の自分、ありのままの自分でいいのだ。」と伝えようと方針を立て直しました。「甘やかしではなく精一杯心を繋いで甘えさせよう。」「担任がA子を抱きとめられるようにTTを含めた補強体制を組む。」ことも決めました。

それから、「A子は声を上げて泣いた。」「涙が出た。」と言っては喜び合う日々が重なっていきました。心の交流がゆったりと広がっていく手応えを覚えるのでした。私たちの受容の広がりと共に飛び出しがなくなり、泣く回数は減り…。もちろん、全くなくなったわけではないのですが、A子の落ち着きには目を見はるものがありました。

家庭訪問ですべてを聞き取ることはできないかも知れません。しかし、子どもを深く知り、心の交流を図ろうとすればするほど、子どもへの関わり方が変わるということを心しておきたいと思うのです。そしてその出発は「人間に対するやさしい関心と深い理解を」という姿勢ではないかと思うのです。

この「校長便り」にはっきりと記されているように、笹原は、「子どもを深く知り、心の交流を図ろうとすればするほど、子どもへの関わり方が変わる」と考え、一人一人の子どもに対する理解を同僚教職員とともに深めていく「子ども理解のカンファレンス」を教育実践と学校づくりの軸に据えてきた。この点については、今回のインタビューではとりたてて語られることは無かった。しかし、私たちは、これを、教育と学校に関する笹原の思想の最も基本的な特徴として受けとめておく必要があるだろう。

④生活実感に根ざし、生活実感を発展させる学習

「上ノ国小学校は『ふるさと学習』というのをやってきていて、とくに学校で羊を飼って続けてきたという歴史もあって、多様な取り組みをしてきたわけですが、どこかで子どもたちの認識がバーチャルなままになっていはいしななかつたでしょうか。認識を土台から支える生き方そのもの、生活そのものが、やっぱりバーチャルなものになっているのではないか。…子どもたちにとって学ぶということが本当に面白いという具合にならないだろうか。『ふるさと学習』などでは、一年たったら一つの物語ができるというような学びをさせようではないか。」

このように、笹原は、子どもたちの生活と認識が上ノ国のような地域においても「バーチャル」なものになりがちな傾向を、心配していた。そして、子どもたちが、自らの生活実感から出発して、その生活実感を発展させていくような、手ごたえのある、面白い学習を経験できるようにすることを重視していた。そのために、教職員と共に、徹底して子どもたちの声に耳を傾け、上ノ国小学校で重視してきた「ふるさと学習」の質を点検し直し、「サフォーク」の飼育の意味を疑う教師の姿勢を問い直してきた。

こうした笹原の語りを聴いて、彼の実践的・思想的努力が、校長という立場にあることもあるが、この点、つまり生活実感を耕すことから出発し、生活実感を発展させる学習指導をどう創造するかという点に集中してきているように感じられた。

⑤もう一回地域ぐるみの子育てを

さらに、笹原は、上ノ国にある共同の雰囲気について語りながら、今、子どもの生存を支えるためにも、子どもたちに本当に手ごたえを感じられる学習を経験させるためにも、地域でのおとなたちの共同の努力が新たに強まる必要があると語った。

「もう一回地域ぐるみで子育てをするというようなことをしなければ、いまの子どもたちの生活は、人間関係の上でも断絶が生じたり、学びの上でも抽象の世界に陥ったりとい

うようなことで、もっと事態としては悪くなっていくのではないかというようなことを感じております。』

また、そのために校長としてできる具体的な努力に足を踏み出していることを語ったのである。

子どもを同じ地域に生きる生活者として感じる子ども観。子どもに対する理解と尊敬の徹底を基軸とする教育観。子どもの生活実感から出発し、生活実感を発展させる学習の追求。子どもを支えるおとなの共同関係の創造。長い年月をかけて確かめられてきたこれらの基本的な観点から生まれてくる、「学校づくり」の構想。これが、笹原の語りを直接聴いて、私が感じとったものである。そして、それは、私には、「地域に根ざす」を合言葉に実践・運動・研究を重ねてきた檜山の多くの教師たちが蓄積してきた教育思想の、学校づくりの試みの今日的結晶の一つでもあるように思われたのである。

6、教師像の模索

(1) 聴きとりとテキスト化

やはり前述の援助者調査の一環として、上ノ国中学校の教諭の茶森茂樹（当時、檜山教職員組合書記長）からの聴きとりを行なったのは、2002年9月14日、上ノ国の社会教育施設の「雑蔵」で、二時間余の時間をかけてであった。

調査グループが事前に用意した大まかな聴きとりの柱は、笹原の場合と同様に、以下の三つであった。したがって、茶森の語りも、大きくこの三つの柱にそって、展開された。

- i) 地域と子どもの現状をどのように認識しているか。
- ii) 生活者・実践者としてどのように生きてきたか。
- iii) 子どもの生存・成長を支えるための新たな課題をどう考えているか。

この聴きとりには、池田考司（札幌東稜高校教員）、入山利彦（北海道大学大学院生）が同席した。聞き取りの記録化に当たっては、まず、録音テープを入山が起こし、私が重複部分などの整理を行なって、第一次テキストとした。次に、このオリジナルテキストから、聞き手の私の問いと発言を削除し、茶森の語りとして意味が通るように最低限の整理をした。そして、内容的に一つのまとまりをなしていると判断できた「塊」ごとに区切りを入れ、その「塊」の内容をあらわす小見出しを、できるだけ茶森自身が語った言葉を生かしながらつけて、第二次テキストとした。

ここでは、この第二次テキストを、やはり大きな三つの部分にわけて紹介し、その後に総括的な感想と分析を記したい。

(2) 地域と子どもの現状

〈略歴〉 私は、1955年の1月21日に、奥尻町に生まれました。島です。中学卒業まで奥尻でした。今は江差町に住んでいます。居を構えたのは五年前でしたが、その前に教員として十年ほどいましたので、通算で十四年ほどになります。

檜山教職員組合の書記長になって三年になりますので、上ノ国の地域と学校からは三年

間離れております。僕が上ノ国に関わったのは六年前からになりますが、上ノ国中学校へ、統合と同時に着任しました。その前に、一年だけ、もう閉校になりましたけど、湯ノ岱(ゆのたい)というところで中学校に勤めておりました。えーっと…1996年ですね。

〈湯ノ岱の子どもたちの地域がなくなることへの不安〉 で、ちょっとその時のことから語りたいんですけども、生徒数が11名でした。統合計画が進んでいて、もう最後の年だったんですけど、それまで何百人といたところからいきなり11名で、カルチャーショックを受けたというか…。

その時に、ある子どもが、湯ノ岱という地域そのものがなくなってしまうという不安を語ったことが記憶にあるんですよね。閉校間際ということもあって、湯ノ岱について調べたり、湯ノ岱の歴史物語をつくって地域の人に見せたりというような授業を組んでいたんですが…。その中で、「湯ノ岱のことを勉強しても、将来俺たちが帰ってくるところなんてねぐなんぞねえのか？」ということ子どもがしゃべったのを聞いて、ショックを受けたんです。教師になって地域ということがグッと重く感じられるようになった最初のきっかけは、それだったんですね。

その子たちと1年間過ごす中で、生徒たちが湯ノ岱という地域にかなり執着を持っているというのわかったんですよ。やっぱり湯ノ岱に将来帰って来たいということですね。湯ノ岱は材木の集産地で栄えた場所ですけども、高齢化がはじまって、もうみんな湯ノ岱から出て行くって感じで、生活が成り立っていない。自分の住んでいる地域の将来に対するすごい不安、なくなってしまうという不安を抱えながら、でもやっぱりそこに帰ってきたいと思うような、そういう子どもたちがいる中学でした。これが上ノ国にきて最初に、子どもたちとの出会いを通して地域をみるきっかけになった出来事ですね。

娯楽施設の全く無いところで、温泉が唯一の娯楽施設で、子どもたちが、学校終わって夕方になると、そこに集まって、二時間も三時間も話しててね。そういう生活をしているところなんですよ(笑)。ちょっとこちらの街場の子どもたちとは違う。それは後から気が付いたんですけど、ゆったりとした時間が流れていて、昔の村落共同体のような雰囲気があって。まあ自然もありますし…。僕、国語が専門なんですけどね、俳句なんか作らせますと、ほんと湯ノ岱の子どもたちは素直に自然を描きましたね。閉校式のときに彼らが作った俳句を展示したら、先輩たちが感無量になった。天の川とか星とかそういうものの歌にしても、ごく自然に目を向けている、そういうのがありました。

ただ、小さい集落でありながら、村の人々の間につながりがあったかということ、そうでもなくなっていたんですね。子どもたちに、湯ノ岱のこと調べてみようと言って、土地の古老たちを訪ねる授業を組んで、七十歳・八十歳になられる方々をお願いして、インタビューに行かせたことがあったんです。お年寄りが生徒に、「おめ、どこのわらしだ？」って訊いて、生徒が「○○の△男だ」って言うと、「おお、おめか。□助とこの息子か」って感じになる。けれども、子ども自身は、わかってないんですね、そのおじいちゃんのことを。で、「いったいどこのじいさんだべ。俺の父さんのこと覚えてた。」って言うんですね。そういう感じでね、やっぱりつながりが薄くなっているんだなって感じましたけどね。

〈中学校統合で疎遠になった地域と学校の関係〉 それから上ノ国中学校に統合された

んですけど、子どもたちは統合をかなり嫌がっていました。三年生が五人卒業しちゃうと六人しか残りませんので、その子たちが統合される中学校に入るのは、嫌だ、不安だって気持ちはよくわかるんですけども。僕のほうも、統合される各中学校から教師が一人ずつ集まるということになり、湯ノ岱から上ノ国中学校に移りました。

で、湯ノ岱の子どもたちとの感覚と、上ノ国の街場の子どもたちの地域に対する感覚にはズレがあった。湯ノ岱では、学校と地域が一体だった。たとえば運動会とかも、中学生だけではできませんので、保育園から小学校、それから地域の老人会だとか、まあ地域ぐるみの運動会になって、学校と地域の地理的な距離っていうのかな、そういうものはなかった。運動会だけではなくて、新しい先生が着任されると集落あげて歓迎会やるとか。

上ノ国中学にきたとき、これは江差にいたときの比較で言うんですけども、親たちが学校に対してかなり親近感を持っているなということがわかったんですね。湯ノ岱は特別としても、…たとえば、学校で父母会をやったときに、ここから離れた河北、滝沢という地区があるんですが、欠席者なしに集まったんですよ。上ノ国の街場のお母さんたちは江差と同じであまり集まらない。しかし、その他の地区の父母がみんな来てくれるというのびっくりしたんですよ。参観日でも懇談会でも、何か子どもたちがレクやるにしても、とにかくみんな来てくれる。この結果、学校と地域の密着度はかなりのものだというのを強く感じました。河北や滝沢地区というのはもともと地域と学校が密着している、そういう歴史があったんだと思いました。

…ところが統合されて一年・二年して…、ずっと顔を出していたのは河北地区のお母さんたちでしたが、滝沢地区のお母さんたちは段々学校から遠のいていった。「学校の敷居が何だか高くなったねえ」ってなことを、又聞きで聞いたことがあった。で、そのときにあらためて、学校と地域との関係というのを、もう一回考え直さなくちゃあと思った。それが統合して二年目くらいだったでしょうか。

…集落から学校が地理的に遠くなったし、学校に来るには車でこなくてはならないということもあって。もともと歩いて通えるところに学校があったし…。檜山では、もともと学校は単なる教育施設じゃなくて、地域の文化施設の機能を担っていて…。僕の子どものころはまさにそうでしたからねえ。演劇とかいろんな地域の催し物を学校でやる。そういうのが湯ノ岱だとか河北、滝沢にはまだ残っていた。しかし統合ということになると、学校が集落から離れますから、まったくの教育施設としかみられなくなっちゃって、自分たちが気軽に入っていくというような施設ではなくなったのかもしれない。

それであらためて学校にとっては、地域の親との関係をどうするかということが問われた。檜山では「地域学習」とか「地域に根ざした教育」ということが言われていましたので、そういうのも手伝って、親との関係を研究テーマにする、あるいは学校づくりの一つの課題として位置づけるということは、それほど困難なことではなかったですけども。行政の理解もあったし。

〈子どもたちの感情の素直さ、子どもを見守る親たち〉 上ノ国の子どもたちは、また江差との比較ですけども、何というか、感情が素直でね。人との接し方でわきまえというのがちょっとないのかもしれないけれども、人間的に感情を殺さずに接するなあということを感じます。これは学校の先生たちに対してだけではなくて地域のおとなに対しても

言えるんですが、たとえば僕の受け持ちの子どもが学校の帰り道に駐在所に入って、おまわりさん相手に何十分も喋ったりするんですよ。そういうのって江差ではなかったですね。イメージ湧くでしょうか、そういうところなんですね、ここは。

それと、子どもたちが他の生徒の親のことをよく知っていて、たとえば誰々の父さんが倒れたってということなどをよく知っていて、子ども同士で親たちのことを話しているんですよ。

親たちも、地域の子どもたちを「引き取る」(受け容れる)余裕があるというかな。ほかの子どもを叱るところも見たし。なんていうか…、親にもいろいろな困難もあるんだけど、子どもを見守るといような…、自覚されてそうになっているんじゃないんだろうけれど、雰囲気としてそうになっている部分がありますね。

思いつくままに話してしまうんですが、たとえば、子どもが親とけんかして、「家出てやる！」っていうことになって、家出てきたのはいいんですけど、どこかをそのまま徘徊するかと思ったら、学校さ逃げてくるんですね(笑)。「あんな家帰りたくない！」って言って。で、しばらく感情を吐き出させてやって、少しいろんなところ連れまわすと、素直に家に帰っていく。そんなことがあったりして。家出したら普通は深刻なんだけど、何だかあっけらかんとしたというか…。おとなたちの間に、子どもを引き取って、看るとい雰囲気自然に残っていて、子どもたちもそのことをよく知っているんだと思います。

〈厳しい親たちの生活〉 ただ、親たちの生活がかなり厳しいっていうのはよくわかります。実はそこが教師として苦しいところで、どんなに子どもを励まそうと思っても、本当に彼らの生活の基盤を保障してやれるかといったら、できない。子どもたちは、天真爛漫なところがあるんですが、生活の重荷をどこかで背負っている。そういうことを感じますね、ええ。

…自分たちの生活については、子どもは敏感に感じ取っていますね。「職場体験学習」をやったときのことで、実施して二年目くらいときに地域の方をお願いに回ったときに、断られることが多くなったんです。上ノ国というところは三十何ヶ所も土建屋があるんですよ。それで、「先生、いま仕事少ないから、子どもたちに来てもらっても困る」というところが多くなってきたんですね。子どもたちの感想文にも、「おとなも大変だなあ、仕事ないんだもんなあ」とか、そういう感想が目立ったのを覚えています。

さっき河北地区、滝沢地区のお母さん方の結束が強くて学校の集まりにはかならず参加するという話を話しましたが、一戸一戸の家庭をみるとかなり困難を抱えているんですね。

〈子どもをまんやかに語り合う雰囲気〉 でも学校に来て、生き生きと語る。たとえば中学生とレクやるときに、ミニバレーボール大会とか、中学生とお母さん方がチーム組んでやる。まあ中学生だから親とは一緒のチームではやりたくないですよ。それで親子対抗でやるんですけども。お母さん方のなかにもバレーのうまい方がいて、本気でやるんですね。そういうときの姿みると、ものすごく生き生きしている。

子どもにたいする希望というか、何と言ったらいいですかね。…きちっと子育ての道筋を理解してやっているというふうには思えないんですよ。そういうことじゃなくて、ご

く自然体で子どもに接しているというかね。子育て理論を振りかざしてというお母さんはごくまれです。でも、子どもを真ん中において語れる、真ん中において見られる。そういうものを、理性の世界じゃなくて感情の世界で体得しているといいますかね。何だかそう感じますね。…

…たとえば、中学校時代に、家に帰って酒を飲み始めてね、毎日毎日酒飲んで、鬱憤晴らしをしていた子がいたんですよ。その子が、そのことを平気で僕にしゃべるんですよ。で、母さんに確かめたら、「そうなんだわ」って、あっけらかんと言うんですよ（笑）。「何度言ってもやめないんだわ」って。ことさら深刻なふうでもないんですよ。そのときには、事態を何とかするというよりも、なぜその子がそうなったかを一緒に語り合った。そういうことがありましたね。これ、よそのたいていの地域だったら、かなり深刻な事態であって、親は「学校から責められるんじゃないか」って思って、教師との間にシビアな緊張関係が生まれると思うんですけども、ここではそういうふうにならない。ゆとりというかね…。

(3) 生活史・実践史をふり返る

〈自分のなかにある「だらしなさ」〉 僕も、檜山で生まれ育って、「檜山の教育」という言葉で括れるものがあるとするれば、そのなかで育てられてきたわけです。奥尻で、離島の出身ですから、なおのことそういう度合いが強いかもかもしれませんね。どうしても教師になると、教師という立場から教育という営みの対象として地域というものを考えたりするんですけど、今言ったように、僕が上ノ国という地域を雰囲気として面白いなと思うのは、僕自身の中に「僕は檜山人なんだ」という空気というか血が流れているからだと思っています。

さっきのお母さんの話を、いやな人はいやだっと思うと思う。「ちゃんとしつけてくれよ、おっ母さん」って言いたくなる人はいるでしょう。でも僕はあんまりそういうふうには思えない。多分、僕のなかに原初的にだらしなさみたいなものがあって、そういうところで育ってきましたから、あまり違和感を持たないのかもしれない。

〈奥尻の人々の生活とつながり〉 奥尻で生まれ育ってきたので、僕には、庶民の生活の匂いってというのがよくわかりますね。

たとえば、ある生徒のところに家庭訪問に行ったときのことだけでも、その生徒のお父さんは、ダンプカーの運転手をやっている方で、仕事から帰ってきて、狭い部屋の中で、テレビをガンガンかけて、焼酎あおりながら観ているんですよ。で、すぐその横で僕と母さんとが話をして、ひとしきり家庭訪問の用件が終わって、「じゃ、これで失礼します」って僕が言ったら、それまでテレビ見ていた父さんがこっちにグッと向き直って、「終わったか先生、よし、じゃ一杯やるべ」って。こういうところがね、わかるんですよ。

島ではよくあったことだから。先生が家に来て、子どものことを評価し情報交換するといった家庭訪問じゃなくて、仲良くなる、人間としてつき合うというような場面がよくあったんですよ。こういうのは、僕は違和感を感じないんですよ。でも、感じる人は感じるかもしれないですね。「とんでもない」って言って帰っちゃうかもしれない（笑）。でも、

それってね、理屈つけて言いたくないけれども、大事なことじゃないかなあと思う。

何というかなあ、人と人とのつながりがなかったら、おそらく、人間を育てるという教育の営みの大部分が失われてしまうのではないかなって気がしてならない。それは本で学んだわけじゃなくって、身体の中にあっただと思います。それが根っこにありますからね。だから先生が親たちと一緒に盃を交わしてくだらん世間話をしたり、ああでもないこうでもないってというような、…子育ての話だけをしましょうっていうんじゃないで、一個の人間として付き合うという姿は何となくいいなって思う。

その姿をね、僕は子どもながらにみて、親たちと先生たちのそういうつき合いをみてね、安心というか嬉しいと思ったんですね。先生が家庭訪問に来て何が嬉しいっていったら、父さんと一緒に酒を飲んでいる姿が嬉しかった。なかには泊まっていく先生もいましたからね（笑）。そういうのがね、すごく自慢だったり…。

それからね、昔話になっちゃうんだけど、うちは漁師だったんで、まあ獲った魚を「先生のところへ持っていけ」って言われて持っていくんだけど、そのお使いが妙にうれしかった。教師の権威というのもあったからでしょうけれども、もっとそれを超えてね、「なんだ、先生とはこういうつき合いもできるんだ。ウチの父さんとも仲いいしな」って。そういうのがあって、子ども心に、なんというか安心、安堵のイメージを持っていました。そういうのが、多分、僕の根底にあるんだろうと思います。当時の檜山の先生たちはそういう雰囲気を持っていた。ここにおられる小林勝行先生がよく使っているんですけど「土着」って言葉。「土着性」、言葉で表現するとそれが檜山の教師のなかにあって…。

〈学校は地域の文化施設でもあった〉 当時の学校と地域との関係でいいますと、学校は単なる教育施設ではなかったですね。

我が家にテレビがついたのが昭和39年くらいですから、それまでテレビがなかった。何が楽しみだったかというのと、年に一・二回やってくるドサまわりの劇団で…。四谷怪談とかそういうのをやるんですけど、公民館使ったり、学校使ったり。今でも思い出しますけれど、ベンチャーズっていうエレキバンドがやってきて、エレキが流行った頃で、一回そういうの聞いてみたいなあって親父に言って、自転車に乗せてもらって連れていってもらったのが学校の体育館だった。学校はそういう施設でもあったんですね。

〈幼い頃の不登校体験〉 でも片一方で、やっぱり学校は学校でした。幼いとき、僕は将来大きくなったら学校の先生と病院関係の仕事には絶対就きたくないと思っていた。

僕、小学校3年生くらいのときに、今でいう不登校なのかなあ、学校に行きたくなくて、当時は「仮病」って言われて、その「仮病」をつかって「ハラ痛い」って言って休んだ時期があったんです。三年生で学級替えがあって、一・二年生のときに習っていた担任の女の先生が代わって、男の先生になっちゃって。すごく厳しい先生で、それが僕に合わなくて「怖い」って思っただけ。もう、それまでの先生とすごいギャップがあってね。当時九九は三年生で習ったのですけれど、僕は九九が言えなくて、ちゃんと言えらるまで言わせてやろうかという先生で、よく怒られて立たされました。それがいやで、もう学校はいやだって思い始めたんです。

〈一・二年の担任教師の肌の温もり〉 でも、自分が教員めざそうと思ったときに想い出したのが、その一・二年生の女の担任の先生で。

その先生には、何なのかなあ、ちょっと変ですけど、肌にあたたかさを感じた。悪さするとその先生がしっぺするんですね、こうやってピッシャと。それが、今思えば、ちょっと痛くて、でもちょうどいいというか、なんとなくもう一回やって欲しいなって思うようなしっぺでね。(笑) 友だちと相談してわざとまた悪さしては、先生が「ちょっとおいで」って言って、またピッとやられる。

しっぺって、こう腕を握ってもらえますから。そのときの肌のぬくもりというのを、そのあと忘れていましたけれど、教員になるときに思い出しましてね。原点とまではいかないんだけど、子どもにたいする慈しみというか愛情というか、まあどういふ言葉でもいいですけど、ぬくもりみたいなのを僕も感じていたことがあったのだなと後から気がつきました。

どっちかという学校は僕いやでしたから。ずっと教員なんかにはなりたくないと思っていましたから。でも、そういう出会いがあったんだなと後から気がつきました。人のあたたかさとかそういうものを感じながら育ってきたのかなあと思います。

〈働く子ども〉 …それから、島だったから特異なことなのかもしれないですけど、姉たちは高校に行かせてもらえなくて…。ウチの親父は「女子が学校なんか行って何するだ」って言う、そういう親父でしたから。「中学卒業したらすぐ働け」っていう調子で、一番上の姉は集団就職で、二番目の姉は家出同然に「なら自分で行く」って言って定時制に通った。なぜか僕だけには親父は高校へ行かしてくれたんですね。僕、きょうだい五人で、上の兄を小さいとき亡くしているもんですから、上に姉二人と下に妹がいるんですけど、女ばかりで。家が漁師なもんですからね、当時はいかを獲って、今みたいに生で卸さなくて、するめに加工して卸していたものだから、もう朝ものすごく忙しくて、姉たちは三時・四時に起こされていた。僕はあまりそういうことには狩り出されなかったですけれども。学校は仕事の二の次でしたね、親父にとって。「仕事終わってから行け」と。

当時は島の子どもはみんなそうだった。僕は学校がイヤだっていうのがあったんですけど、僕の友だちなんかは仕事に狩り出されるわけだから、学校が逃げ場所になりますよね。当然、仕事から解放される場所だから、学校に行きたくて行きたくて仕方がないんですよ。男の子なんかは、物心ついたころから舟にのっけられて、漁に連れていかれますから。いか釣り船は、夕方出て夜を通して朝帰ってくるんですよ。で、子どもたちは仕事が終わってから来るんですね、学校に。そうすると、午前中は起きていても、午後になると眠ってしまいますよ、まったく寝てないわけですからね。

〈懐かしい中学校の教室風景〉 鮮明に憶えているのがね、中学のとき、冬場の午後からの数学の授業だったかな、先生が教室に入ってきたときに、ストーブがたいてあるんですが、こっちに教科書持って、こっちに毛布持っているんですよ。授業始まってグーグーと寝ている子どもたちが何人かいると、「ほら、かけてやれ」って先生が毛布投げてよこすんですよ。それがね、ごく当たり前。当たりの了解事項としてあった。そういう中学校時代を送ったんですよ、うん(笑)。

これも「古き時代」の話とも言えるだろうけれど…。でも明らかに「あいつは一睡もしないで学校さ来てるんだものな」ってわかるんですよ。それで、先生の厚意も嬉しいんだけど、もう一つ、そういう友だちに対して、僕には、「おら、だめだな。あいつ偉いな」という気持ちもあった。

あの教室全体の雰囲気。ストーブの上ではクタクタクタとお湯が沸騰していて…、というのが何となくね、僕の学校のイメージとして残っていてね。教師になって、ああいう空間がいいなあと思っているんですけど。

〈子どもながらに感じていた「民衆の悲哀」〉 でも、子どもは、一方でかなり生活のきつさを背負っていて…。僕は、奥尻中学校だったのですけれど、半分高校に行って、半分働きに出て、僕なんかよりはるかに成績のいい子どもたちが高校行かないで働きにくい姿を目のあたりにしてきた。

それは、やっぱり親が学校にやれないというのがあったし、そういうのを全部ひっくるめて僕の中学校時代には何となく生活に対する悲哀みたいなのがありましたね。「民衆の悲哀」というか、当時そういう言葉は全く知りませんでしたけれど、そういう雰囲気とか匂いとか感じて。

だから教師になって湯ノ岱に行ったときも、生活が厳しい子どもが多くて、そういうのみると…。「先生、そのう、牛肉を食ってみてえな」とか言うから、「じゃあ、焼肉をはらいっぺえ食いに行くか」って、生徒は三人しかいませんでしたから、まあ簡単にできるのですけれど、あちこち連れて肉食わしたり、家さ連れて行って肉つついて、それから一緒に泊まったりとか…。そういうのってほっとけなかったですよ。なんつうか、当時の生活とダブっちゃったりしてね。これだけ社会が豊かになって、そういうのは見えづらいいけれど、でも事実は事実で…。子どもや親の生活はゆるくないですよ。

…ちょっと前後しますけれども、上ノ国中学校に来たときに、ある子どもが、高校に行きたくないと言い張って。最初は行きたいと言っていたんだけど、いきなり行きたくないって言い出して、何言ってるんだと思って親と面談したら、実は親が子どもに高校行くなって一生懸命説得した結果だったということがわかったことがあって…。父さんが肝臓わずらっていて入退院繰り返していて、「この子には早く働いてもらわないと家が持たない」というようなことを聞いたりして。もうなんというか、しめつけられる思いがしたんですけれどね。

やっぱり子どもたちのことが、…僕の中学時代とダブルですね。僕と同じ集落にいた女の子ですけれども、僕よりずっと勉強が出来て真面目な生徒だったけれど、高校行かなかったんですね。行かなかったんだけど、冬休みの受験のための補習授業には欠かさず出てくる。そういう姿とダブったり…。

幸か不幸か、うちは漁師で貧乏だったから、周りもそういう生活していましたから…。…誕生日になると、ちらし寿司が定番だったんですよ。あと、なんもおかしくないけれども、おふくろが作る。作ると必ず近所に半分持っていかすんですね。それから、米なくて近所に借りにいったりとか、そういうのがごく自然にあって。…原点じゃないですかね、フツと思ひ出すんですね、教師をしながらそういうことを。

〈教師希望ではなかった〉 僕は、教員希望じゃなかったんです。あの、親父がそうだったから、海の仕事がしたかったんです。

中学の二年生のときに、先生が「もうそろそろ進路を決めなくてはならないから、父さんと相談しておいで」って言って…。家帰って、姉たちは高校に行かせてもらってないですから、「僕は男だから漁師にならなきゃ」て親父に言ったら、そしたら親父に「ならなきゃという気持ちで漁師がつとまるものか、この馬鹿者」って一蹴されたんですね。それが高校へ行っていいぞというサインだったことが、後になってわかりました。

漁師にならなくても船に乗ろうと思っていましたから、北大の水産学部とか受けたんですけどダメでね。それで一浪して入ったのが函館の教育大学だったんですよ。チャンスあったらもう一回商船大学かそういうところを狙おうと思っていた。ちょっとまあ惰性で大学生活送っていたのですが、教育実習でやっぱり変わりました。子どもたちと接して。

教師っていいなって思って試験受けたんですけど、六回採用試験に落ちて。その間、あちこちで臨時教員をして、六校以上まわったかな。渡島と檜山の学校です。でも、二十六のときに、勤めていた学校の校長先生とけんかしちゃって、「お前は二十六にもなって、父さん母さんに養ってもらおうようなことでいいんだか！」って言われて、ものすごい腹が立って逆ギレしてね、「辞めた！」って感じで。もうそこでいったん教師とは縁を切って…。

〈病院勤めの経験〉 で、生活になるものを探さなくちゃということで、たまたま病院の事務の仕事に応募して。もう衝動的でしたけれども、とにかく仕事に就かなくちゃと思って。そういうわけで病院に入りました。で、たまたま教員目指していてなれなくてという人がそこに二人くらいいたんです。(笑) だからよく教育論議したけれども…。

で、患者さんと接することになりましたからね。そうすると人間に対する見方の幅が広がったと思いますね。患者の死にも直面するわけですから。あっ、これは大きかったですね。おばあちゃんが亡くなって、あとを引き取る人が誰もいない。で、本当はちゃんと霊柩車を頼んで運ばなければならないんだけど、そういう手続きも出来ないってことで、医者から「ちょっとお前運んでやれ」って言われて、亡骸を車に乗せて運ぶというようなことがあった。最初はおっかないと思ったけれども、そういうのを何度か経験すると、人の死というか尊厳というか、そういうものを感じるようになりましたね。

宗教論でお医者さんと議論交わしたときに、「俺、神様信じねえ」っていったら、その医者から、「茶森君、そんなこと言ったってな、死ぬ間際に信じるものがあれば幸せなんだぞ」っていわれたときには宗教観もちょっと変わったし、そういう影響はあったと思いますね、かなり。…

…病院にいるときにこういうこともありました。中学生がね、シンナーやって二・三度運ばれてきたことがあったんですよ。劇症肝炎寸前の状態で、すぐ処置されたんですけども、そのときのドクターの接し方をみて、教育ってものを考えたことがあった。そのドクターは、今で言うカウンセリングなんでしょうかね、その子とじっくり向き合って…。お医者さんって治療すればいいんでねえかなって思ってたんですけども、そうではなくて…。そのときに頼まれたんですね、ドクターに。「お前、教員希望してたんだべ、少し勉強みてやれ」と。そういうこともあってね。

で、その子を三ヶ月して立ち直らせて病院から出したんですね。そしたらね、半年しな

いうちにまた運ばれてきたんですよ、シンナーで。僕は、「もうだめだ、こいつ」って思ったんだけど、そのお医者さんは、あきらめなかったですね。またおんなじようにして…。それもちょっと大きかったかなあ。…そのときに「教育」っていう意識なかったですけど、人間に対して、そうやって裏切られても、こっちは最善を尽くすというスタイルというかな。

たまたまそういうお医者さんがいたので…。実に人間臭かったお医者さんで、一緒に患者さんと泣くような。尊敬していますけれど。そういうのは、やっぱり影響あると思いますね。

〈正規の教師に採用された時の気負い〉 それから、臨時（教員）で四年間で六校まわったので、これもちょっと影響あると思います。まあ、教員試験なんぼ受けても落ちるわけですから、悔しいという気持ちも当然抱えていて、自分ではもう教員に向いてないんじゃないかっていう自己嫌悪と自己否定の気持ちにもなったし。うーん、でもなにくそっという気持ちもあるし。

だから僕、三十歳で正式採用になったときには、かなり気負いを持っていました。やってやるぞって気負いがあって、ものの見事にそこで裏切られたんですね。最初に江差中学校で学級担任になりました。そこで半年もしないうちに「学級崩壊」を起こしちゃって、「茶森かえれ、死ぬ」って黒板に書かれて…。そのときにはもうショック受けてショック受けて。檜山では江差中学校が荒れていた時期で、当時どの学年でもいじめがあって、僕の学級でもあって、対処できなくて悶々としていた。

そのときはもう教員やめようと思いました。家に帰ってかみさんに率直に相談したら、かみさんが、「うん、やめたかったらやめたら？あたしがあと稼ぐから」って言って。「そうか、いつでもやめられるんだ」と思ったら、もう少しがんばってみようかと（笑）…思いました。そのときのかみさんのセリフ、今はもう照れくさくて言わないですけどね、そういう励まし方もあるんだなあって。その、頑張れ頑張れじゃなくて、もっと引き取ってね、すると安心の基地になるというかね、子どもにとって。子どもだけじゃなくて自分もそうだったなあとと思いますね。

臨時のときの思いというのがあって。で、その思いが裏切られたっていうのがあって。それもちょっと、なんというかな、挫折したのがよかったのかもしれない。よかったのは、もうちょっと子どもを引き取って考えてみようというようになったところで。

〈荒れる中学校での子どもとの出会い〉 それから江差中学校が荒れていた時代に遭遇したのも、教師として自分を支えてくれた経験だったのかなという思いも、いま思えばありますね。そのときは、ものすごくつらくてつらくて…。荒れまくっている子どもたちをどうすることもできなかったんですね、追っかけまわしているばかりで。もうせせら笑うかのように次から次へと悪さしますから。酒飲んで暴れるし、ガラスこわして歩くし、メチャクチャでしたね。

…でもね、あるとき僕の学級の子どもが、こぶしから血を流しながらガラスをバンバン壊して歩くのを見て、すっ飛んでいって、止めなくちゃならないから止めたんですよ。そしたら「うるせえ、てめえ。あっち行け、来んじゃねえ」とか言って、振り払おうとする

んですけれどね、ふっとみたら、「うるせえ、てめえ」ってわめいている子が、僕の手を握って離さないんですよ。

今までもそういうことあったのかもしれないけれど、そのとき僕初めて「あっ」と思って、「あっ、こいつ」って。そのときに何かがあった。ピリッピリッとその子の何か、「そばにいてくれ」っていう思いなのかな、理屈じゃないけどね。切なさというかな、もう涙出るほど衝撃を受けたことありました。それまではもう、「あいつさえいなければ」と思っていたんですけどね。いやあそれでちょっと変わりましたね。

その子、高校にはいけなかった。一応高校受験したんだけど、二人か三人落ちて、そいつも落ちてしまって。彼は、四歳の時に、お母さんが倒れちゃって、抱きたくても抱けない、そういう状態が続いた。そういう経験をしてきたってということが後になってわかって…。その、高校に行けなかったときには、夷王山に連れて行ったんです。夜、車に乗って。で、そこからずっと黙って海眺めていたんですけど、その彼がぼつんと、「先生、俺、高校行けなくても立派な大工になれるかな」って言うんです。大工になることが決まっていたから。僕は「なれるさ」とか言って…。こいつとの関わりはいっぱいあるんですけどね、ちょっと大きかったな、その経験は…。

その子たちとの取っ組み合いでは、僕は翻弄されたほうですけども、でも、大きかったです、僕の間人形成にとって。本当に人間的だったのかもしれないです、この子たちは。人間の本性の感情をぎりぎりのところで守ろうとしていたっていうのを、痛切に感じましたね。手を握って離さなかったり、日記に走り書きで「先生、助けて」って書いてきたこともあったし…。

〈母のこと〉 …それから、これ身内のことですけども、僕、おふくろが自分の人間形成にとって大きいと思っています。おふくろは、学校に小学校四年生までしか行ってなくて…。

僕は、「勉強せえ」って言われたことないんです、一度も。学校から宿題出て、自分の部屋なんてないですから、食事が終わって、ちゃぶ台の上で勉強するんですけども、おふくろは「何でそんな無理すんだ？」って言ってね。(笑)「早く寝れば？面倒くせえこと、そんな根つめてやらなくてもいい」って言うようなおふくろでね。でも、なぜか僕、いつも安心していられたね。僕が北大を受けて失敗して落ち込んだときにも、「行かなくてもいい、大学なんて。働きたかったら働けばいい」って。とにかくそうしてくれるおふくろで、非常にふわっとした感じで、なんつうんだべなあ、大きい人なんですよ、僕にしてみれば。

江差から嫁に入って、農家の出で。これも語れば長いんですけど、嫁に行けって言われたら、命令一下で行かされた時代ですから。おふくろ、よく言ってましね、「父さん好きで来たわけでねえんだ」って(笑)。「ばばが行けっていうから来たんだけど、子どもらは大事だ」って言っていましたね。何てことはないんですけどね、おふくろは空気のような存在で、僕にしてみれば…。

親父は亡くなって、いま一人で島にいます。八十近いんですけどね。まあ、来ませんねこっちには。親戚・遠戚よりも隣近所とのつきあいのほうが…。来るんですけど、二ヶ月もしたら帰っちゃいます。島のほうがいいって言います。

島では玄関に鍵かけたことないんですよ。鍵ついてないです、そもそも。誰かがご飯食べていてこぼしたりすると、「ああ、誰か食いたい人そこさいるんだねえ」って言ったりするおふくろでね。たぬきとか野良犬とかが家のほうに降りてくると、おふくろは余った食べ物をそこらにぱっと置いて、「さあ食え、食え」って感じで。飼っているわけじゃないんだけど、いつも家の周りにたぬきや野良犬が群がっていました（笑）。

（４）新しい課題をめぐって

〈発達援助の専門家を含めた共同へ〉 ああ、いま組合の専従で上ノ国の地域と学校現場を離れていて、状況がどうなっているのかちょっとわからないところもありますが、なにか組合の先生方からあちこちの現場の状況を聞くと、かなり急激に変化していて、子どもが変わって、それへの対応が出来ない状況も生まれたりしているということ…。

さっき言ったことと矛盾してくるかもしれないけれども、共同体の雰囲気はあるんだけど、それだけではもたないような状況が一方では進行しているのかなあということを感じます。たとえば小学校入学の一年生がお手上げ状態ということがあったり…。檜山管内のことですが、上ノ国でもあります。

…何年前前に間宮正幸先生（北大教育学部）と「教育フォーラム」のことでお話したときに、「ほんとに子どもたちがのっぴきならない事態に陥ったら、上ノ国の人たちどうしますか」って訊ねられたことがあって、僕は誰に相談するかといえばやっぱりそれは親でしょうと答えたら、先生は驚かれていた。そのときは、僕は、学校とか地域とかの括りのなかで、何とか問題を解決することではないのかなと思っていました。

でもたとえば、今、ネグレクトみたいな状況が多分広がってきているのではないかと思います。そう言われれば、これまでもそれに近いと思われるような子どもたちがいました。それまで学校とか地域の括りのなかでやってきたけれど、それで果たしてすむのかって、ちょっと疑問に思うこともあったんですよ。たとえば函館とか行かないとないのですけれど、児童相談所の方々が何回か来てね、不登校の子どもたちの相談に乗るといような、そういうところとのパイプが、これまでの学校にはなかったんです。どっちかという、僕も含めて、そういうところを当てにしないというようなところがあって。

でも、組合にいて、いろいろ深刻な状況聞くと、そういう人たちとの連携のあり方をどうするかっていうことを、田中先生も本で書かれているけれども、もう少し「発達援助」の専門職とのかかわりが必要かなということを実感をもって受けとめつつありますね。

〈挫折した人が戻ってこられる場所として〉 不思議なのは、最近、いやどうなのかな昔からなのかな、上ノ国には「挫折」した方々が戻ってくることが非常に多いんですよ。調べたわけじゃないですけど、話を聞く限りでは。

都会に出て生活が成り立たなくなっって戻ってくるケース、あるいは「家庭崩壊」を起こしてというケースなど、多いんです。多分、隣近所との助け合いだけではどうにもならないような、ものすごい困難を抱えてのことだと思うんですよ。そういうのもあるんで、もっと福祉とかそのあたりとの連携、というか共同って言葉が一番いいんですかね、子どもを軸に置いた。

僕たち教師は、そういうことを、子どもが転校してきたということで知るわけなんですね。つまりその子たちの親は、年齢でいうと30代が多いですね。結婚して、子どもを産んで、その子が小学校に上がる頃に、止むを得ない事情でこっちに戻ってくるというケースが。離婚が多いです。それから、もっと深刻なのは、「家庭崩壊」しちゃって親が子を祖父母に預けちゃう、そういうケースもあります。

そのなかには、ほんとうに深刻な問題を抱えているケースがあります。とても学校の教師だけの対応では無理、そこのおじいちゃんおばあちゃんだけの対応でも無理だと思うものもあります。

(5) 地域に生きる教師像—聴きとりを終えて

以上の茶森の語りについては、多面的で興味深い内容が含まれており、多様な読み取り方が可能であり、また必要でもある。ここでは、その一つとして、直接に茶森にインタビューした聴きとり手としての私の内部に浮かび形となってきた印象・感想のいくつかを書き留めておきたい。

①並々ならぬ子どもへの共感力・理解力

「江差中学校が荒れていた時代に遭遇したのも、教師として自分を支えてくれた経験だったのかなという思いも、いま思えばありますね。そのときは、ものすごくつらくてつらく…。荒れまくっている子どもたちをどうすることもできなかったんですね。追っかけまわしているばかりで。もうせせら笑うかのように次から次へと悪さしますから。…でもね、あるとき僕の学級の子どもが、こぶしから血を流しながらガラスをバンバン壊して歩くのを見てね、すっ飛んで行って、止めなくちゃならないから止めたんですよ。そしたら『うるせえ、てめえ。あっち行け、来んじゃねえ』とか言ってね、振り払おうとするんですけど、ふっと思ったら、『うるせえ、てめえ』ってわめいている子がね、僕の手を握って離さないんですよ。今までもそういうことあったのかもしれないけれど、そのとき僕初めて『あっ』と思って。『あっ、こいつ』って。そのときに何かがあった。ビリッビリッとその子の何か、『そばにいてくれっ』という思いのかな、理屈じゃないけど。切なさというかな、もう涙出るほど衝撃受けたことありました。それまではもう、『あいつさえいなければ』と思ってたんですけどね。いやあそれでちょっと変わりましたね。」

これは、今回の茶森の語りの中でも、極めて印象深い部分の一つであった。茶森は、ある「荒れ」ていた中学生が、「うるせえ」と突っかかりながら、彼の手を握って離さなかったという事実気づいて、「この生徒はそばにいてくれと言っていると感じた」と語っている。例えばこのような語りから、子どもに対する茶森の並々ならない感受力・理解力を感じるのは、私だけではなからう。

そして、そうした子どもへの共感力・理解力が、どのようにして彼の内部に形成されたのだろうかと考えながら、私は、彼の語りを聴いたのである。

②日本の子どもの生活の歴史的変化を凝集して辿った子ども時代

茶森は、母親のことや、幼い頃の奥尻での共同体的な生活の雰囲気、次のように思い出している。

「島では玄関に鍵かけたことないんですよ。鍵ついてないです、そもそも。誰かご飯食べててこぼしたりすると、『ああ、誰か食いたい人そこさいるんだねえ』って言ったりするおふくろでね。たぬきとか野良犬とかが家のほうに降りてくると、おふくろは余った食い物をそこらにぱっと置いて、『さあ、食べ食べ』って感じで。飼っているわけじゃないんだけど、いつも家の周りにたぬきや野良犬が群がっていました（笑）。」

また、茶森は、子ども時代に身近にあって嬉しく感じていた、島の人々と教師たちとの人間的交流の姿を思い出して、こう語っている。

「先生が親たちと一緒に盃を交わしてくだらん世間話をしたり、…一個の人間としてつきあうという…姿をね、僕は…子どもながらにみて、…安心というか嬉しいと思ったんですね。嬉しいんですよ、先生が家庭訪問に来て何が嬉しいっていったら、父さんと一緒に酒飲んでる姿が嬉しかったり。なかには泊まっていく先生もいましたからね（笑）。そういうのがね、すごく自慢だったり…」

さらに、半数の子どもが高校にいけなかった、当時の民衆と子どもの生活の厳しさを振り返って、「子どもは、一方でかなり生活のきつさを背負っていて、僕は、奥尻中学校だったんですけれど、半分高校に行って、半分働きに出て、僕なんかよりはるかに成績のいい子どもたちが高校行かないで働きに行く姿を目のあたりにしてきた。それはやっぱり親が学校にやれないというのがあったし、そういうのを全部ひっくるめて僕の中学校時代には何となく生活に対する悲哀みたいなのがありましたね。『民衆の悲哀』というかね、当時そういう言葉は全く知りませんでしたけれど、そういう雰囲気とかにおいとか感じてね。」と語っている。

そして、そうした厳しい生活を背負う子どもたちに対して優しいまなざしを向けていた教師と学校の姿を、懐かしく思い出して次のように語っている。

「男の子なんかは物心ついたころから舟にのっけられて漁に連れていかれますから。いか釣り船は、夕方出て夜通して朝帰ってくるんですよ。で、子どもたちは仕事が終わったら来るんですね、学校に。そうすると、午前中は起きていても、午後になると眠ってしまいますよ、まったく寝てないわけですからね。そのときに鮮明に憶えているのがね、中学のとき、午後からの授業で数学の先生だったかな、先生が教室に入ってきたときに、冬場なんですね、ストーブがたいてあるんですが、こっちに教科書持って、こっちに毛布持っているんですよ。そして授業始まってグーグーと寝ている子どもたちが何人かいると、『ほら、かけてやれ』って先生が毛布投げてよこすんですよ。それがね、ごく当たり前。当たりの了解事項としてあったんですよ、そういう中学校時代を送ったんですよ、うん（笑）。…あの教室全体の雰囲気、ストーブのクタクタと沸騰したお湯沸かしながら、というのが何となくね、僕の学校のイメージとして残っていてね。教師になって、ああいう空間いいなあと思ってるんですけどね。」

茶森は、この聴きとりをしたとき、まだ四十七歳であったが、彼は、子ども時代の生活をこのように語ったのである。その語りを聴いていると、彼が、日本の近・現代史において民衆とその子どもたちが経験してきた生活の大きな歴史的な変化の跡を、彼の生育の過程で凝縮した形で体験してきたように思われて、それが私には非常に興味深かった。

これには、茶森が、「経済成長」の波が本格的に及ぶのが時期的に比較的遅く、物心ついた少年期の頃から一気に生活の現代的変化が進行した北海道の奥尻という離島に育った

という事情が、深く影響しているように思われた。ちなみに、茶森は「家にテレビが入ったのが1964年の東京オリンピックの年だった」と語っているが、関西の住宅地で育った私の家にテレビが入ったのはその10年ほど前の1950年代半ばのことであった。

子どもにたいする茶森の並々ならぬ共感力・理解力の基底に、こうした時代と地域の状況に刻印された、茶森自身の特徴的な生活史・生育史の経験があるということは明らかである。

③生活者の感覚、子ども時代の生活感情の反芻

自らの生活史・実践史を語る茶森の語り口に注目してみると、彼が、これまでの生活史・実践史の中で遭遇してきたできごとを、大きな歴史的・社会的な背景を持つこととして理解しながら、あくまでも、一つの地域で、社会の大きな流れに翻弄されつつ、なお人間的に生きようとしてきた、一人の「普通」の生活者の視点から語っていることが特徴的である。近年さまざまな領域で新しく使われ始めている「当事者性」という概念を用いればよりはっきりするが、茶森は一貫して「当事者」の言葉で語っているのである。

このこととあわせて、茶森の語りを聴いていて印象的であったのは、彼が、子ども時代に体験した日常生活の出来事や、その際に彼の内面に湧いてきた生活感情を、「場面」「情景」として実によく記憶しているということであった。しかし、それは、人間の記憶とは本来そのようなものであるのだが、過去の生活体験や生活感情をただ正確に保存しているというだけのことなのではないように思われた。

「上ノ国中学校に来たときに、ある子どもが、高校行きたくないと言い張って、最初は行きたいと言っていたんだけど、いきなり行きたくないって言い出して。何言ってるんだと思って親と面談したら、実は親が子どもに高校行くなって一生懸命説得した結果だったということがわかったことがあって…。父さんが病いをわずらっていて入退院繰り返していて、『この子には早く働いてもらわないと家が持たないんだ』っていうようなことを聞いたりして。もうなんというか、締めつけられる思いがしたんですけれどね。やっぱり子どもたちが、…僕の中学時代とだぶるんですね。僕と同じ集落にいた女の子ですけれども、僕よりずっと勉強が出来て真面目な生徒だったんですけれど、高校行かなかったんですね。行かなかったんだけど、冬休みの受験のための補習授業には欠かさず出てくる、そういう姿とダブったり…。」

たとえばこの部分に典型的に現れているように、茶森は、教師になって目の前の子どもや親に接していると、自らの子ども時代のできごとと感情体験が思い出されるということ、くりかえし語っている。これは、今回の茶森の語りの全体を貫く著しい特徴をなしていると言ってよい。いや、語りの特徴と言うよりは、茶森は、実際に、教師になって様々な子どもに接しつつ、彼自身の子どもの時代の生活経験と生活感情を繰り返し内部で反芻しながら生きてきたのであり、それは彼の生き方そのものの特徴であると言うべきであろう。そうした生き方を通じて、茶森は、人間が人間として生き育っていく上で欠かせない条件についての感度・センスを自らの内部で磨いてきたのではないかと思われる。それは、たとえば、「だらしなさ」の意味のとらえなおしを含む、次のような語りから、よく伝わってくる。

「中学校時代に、家に帰って酒飲み始めてね、毎日毎日酒飲んでね、鬱憤晴らしをして

いた子がいたんですよ。...で、母さんに確かめたら、『そうなんだわあ』って、あっけらかんと言うんですね。『何度言ってもやめないんだわあ』って。ことさら深刻なふうでもないんですね。そのときに、その事態を何とかするというよりも、何故その子がそうなったかということと一緒に語りあった。そういうことがありましたね。... (この) お母さんの話を、いやな人はいやだっと思うと思うんです。『ちゃんとしつけてくれよ、おっかさん』って言いたくなる人はいるでしょう。でも僕はあんまりそういうふうには思えない。多分、僕の中に原初的なだらしなさみたいなものがあるって、僕はそういうところで育ってきましたから、あまり違和感を持たない...。』

こうした生き方と精神的活動の累積の結果として、茶森の内部では、ある意味では「古い」共同体的な人間関係の中での子ども時代の感情体験が、単なる「古い」ものにとどまらずに、現代の「不安」に満ちた子どもたちに対する「新しい」感受性・理解力につくり変えられていったのではないだろうか。このことが、私には、教師の、さらには父母や発達援助専門職の人々の子どもに対する共感力・理解力を問題にする時に、何よりも注目すべきことであるように感じられたのである。

④援助的・教育的実践の構想力

「…きちっと子育ての道筋を理解してやっているというふうには思えないんですよ。そういうことじゃなくって、ごく自然体で子どもに接しているというかね。…子どもを真ん中において語れる、真ん中において見られるというのを、理性の世界じゃなくて感情の世界で体得しているといいますかね、何だかそう感じますね。」

茶森は、上ノ国の人々の間にあるこれまで紹介した聴きとりの記録から明らかなように、「共同」的な雰囲気について、このように共感的に語っている。こうした地域の雰囲気も、単なる「古い」共同体の自然な名残りではなく、茶森のようにその内部で育ち、それに人間的価値を感じる人々の意識的な努力によって、この地域で継承され保存され新たに形作られてきたものである。

しかしまた、茶森は、子どもを支えるこの地域の「共同」が、新しい性格のものに発展していかなければならないのではないかと、次のように語っていた。

「共同体の雰囲気はあるんだけど、それだけではもたないような状況が、一方では進行しているのかなあということを感じます。…たとえば、今、ネグレクトみたいな状況が多分広がってきているのではないかと思います。…学校とか地域の括りのなかでやってきたけれど、それで果たしてすむのか。…もう少し『発達援助』の専門職とのかかわりが必要かなということを実感をもって受けとめつつありますね。」

さらに、茶森は、上ノ国町において、各集落にあった中学校が上ノ国中学校に統合されたことに伴って、学校が人々の生活圏の外側に出てしまい、人々にとってよそよそしいものになりつつある傾向を心配していた。そして、学校と地域、学校と父母住民の関係を新しい形で回復・創造する必要があると感じていることを語っていた。

このように、茶森は、子どもに向き合いながら自らの生活史・実践史をふり返し、自らの生活史・実践史をふりかえりながら、人間とその子どもの生存と成長を支える本質的な条件についての洞察を深めてきた。そして、その蓄積のなかから、子どもの生存・成長を支える地域における新しい共同関係や、地域と学校の新しい関係について、極めて今日的

な援助的・教育的実践の構想を自らの内部に描くようになり、それを自らの言葉で語るようになっていた。このことが、また強く印象に残った。

奥尻の漁師の家に生まれ、自らを檜山の民衆の一員と語る生活感覚。近・現代の日本の子どもの生活の変化の歴史を凝縮したかたちで体験してきたかのように見える生育史。自らを、檜山の「地域に根ざす教育」の中で育てられてきたと感じるという被教育体験。その生活体験・被教育体験と生活感情を繰り返し反芻ししながら生きてきた生き方。そこから形作られてきた現代の子どもたちに対する並々ならない理解力。そして、子どもたちの生存・成長を支える援助的・教育的実践の新しい構想力。

茶森の語りを聴いて、私の心に残ったのはこれらのことであり、その語りの全体を通じて印象深く伝わってきたのは、あくまでも地域の人々や子どもと共に生きようとする教師としての姿であった。このような茶森の語りは、全体として、檜山の「地域に根ざす教育」を追求してきた教師たちが模索し続けてきた「地域に生きる教師像」の、今日的な姿を表現したものとして性格づけてよいように思われた。

おわりに―臨床教育学への地域的接近

檜山・上ノ国に足を踏み入れると、そこに独特の雰囲気があることに気づく。それを、檜山・上ノ国の人々は、とりわけそうした雰囲気の形成に少なからぬ役割を果たしてきた教師たちは、「地域に根ざす」思想と呼んでいる。

しかし、この「地域に根ざす」ということを、短い言葉で定義風に説明するのは簡単ではない。本稿では、この間の聴きとり調査をもとに、この地域の一人の高校生の「人生イメージ」の語り、一人の住民の生活史と子どもを支える実践史の語り、二人の教師の生活史と実践史の語りを、テキスト化して紹介した。この四人の語りを読み重ねてもらえば、この地域の人々の間にある生活の雰囲気と子育て・教育の思想がどのようなものであるかを、ある程度イメージしてもらえらると思ったからである。

ただし、読めば分かるように、それは、上ノ国が一つの地域として安定的に存在することを自明の前提とするものではない。四人が語っているように、上ノ国には、一方では、歴史的・経済的・文化的な個性を持ったより小さいいくつかの地区があり、各々の地区のなかにあった各中学校の上ノ国中学校への統合は、各々の地区と学校の間を弱め、それまでの生活圏としての自律性を弱めつつある。他方で、上ノ国町に暮らす四人は、自治体の再編・統合という今日の動向の下で、より大きな世界との関係で、どのようにして上ノ国町を自らの生存と成長にとって意味のある一つの地域として存続させるかを問うているのである。

こうした状況の中で語られる「地域に根ざす」思想とは、変動する現代社会において、生活者としての住民とそこで育つ子どもの側から、生きて成長していくのに必要な共同の関係の単位として、「地域」をいかに創出するかという課題を問い続けていく生活態度のことなのだと考えよう。

また、「どこへいっても通用する『学力』を」という声が、住民からも父母からも強まっていることから明らかなように、「地域に根ざす教育」ということが、「地域のことを

教えていけばよい」とか、「日本や世界のことは考えなくてもよい」というようなものにとどまっていたはずはない。むしろ、「地域に根ざす教育」という発想は、「ふるさとを心に刻む」ということと「世界に通用する『学力』を育む」ということとをどうつなぐか、そして今本当に世界に通用する学力とは何かを、真剣に問おうとする思想であると言わなければならない。

飛躍するようだが、去年の秋、私は、北極圏に近いフィンランドのカヤーニという町の教員養成大学を訪問する機会を持った。人口三万人ほどの小さなその町にも、「効率」の名のもとに地域を破壊していく「グローバリゼーション」と「新自由主義」の波が押し寄せていて、長年人々が暮らしてきた地域をどう守るかという問題が発生していた。そして、カヤーニの教員養成大学では、そうした地域で生まれ育ち生きる子どもたちが成長の途上で直面する問題を察知し、彼らの発達を全体的に支える教育実践を構想し得る教師を養成するという方向で、教師教育を改革しようとする試みが始まっていた。その動きに、私は、上ノ国の人々の間にある「地域に根ざす」思想と同質のものを感じた。

こういう体験もあって、私は、「地域に根ざす」という思想は、古いように見えて、今、人間の生存・成長とその援助や教育を考える際の、人類的な原理の一つになりつつある、新しい思想なのではないかと考えるようになってきている。そして、都留において臨床教育学の構築を図る際の基本的な接近方法としたいと考えるようになってきているのである。